

6.7 動物

6.7.1 調査の結果

1) 調査項目

動物の調査項目は、対象事業の特性及び地域の特性を踏まえ、動物相の状況、重要な種及び注目すべき生息地の分布、生息環境の状況とした。

2) 調査方法

調査方法は、表 6.7-1 に示す。

表 6.7-1 動物の調査方法

項目	調査方法	内容
哺乳類	任意観察調査	糞や足跡などの動物の痕跡によって生息種を記録するフィールドサイン調査を行った。
	捕獲調査	小型哺乳類を対象とし、シャーマントラップとホールトラップを用いた捕獲調査を行った。 シャーマントラップは1地点へ各20個2晩設置した。 ホールトラップは1地点へ各5個2晩設置した。
	自動撮影	哺乳類が頻繁に往来する「けもの道」のような場所や調査範囲を代表するような環境へセンサー付きカメラを設置した。
	夜間調査	コウモリ類を対象に、バットディテクター（超音波を可聴音に変換する機器）を用いた生息確認調査を行った。
鳥類 (一般鳥類)	任意観察調査	特に調査地点は設定せず出現した鳥類を記録した。
	ラインセンサス調査	あらかじめ決めたルートに沿って鳥類の出現種数等を記録した。
	定点観察調査	あらかじめ決めた定点において鳥類の出現種数等を記録した。
	夜間調査	フクロウ類等の夜行性鳥類を対象とし、夜間に鳴き声の確認を行った。
	ミゾゴイ確認調査	ミゾゴイを対象とし、夜間に鳴き声の確認を行った。また、ICレコーダーを用いて一晩鳴き声の録音を行い、生息の確認を行った。
鳥類 (猛禽類)	定点調査	目視、双眼鏡及び望遠鏡を用いて、希少猛禽類の種別、個体識別（年齢・性別）及び行動（旋回、滑空、探餌、とまり等）や繁殖行動の有無等を確認し記録した。
	営巣地調査	定点調査によって繁殖行動が確認された範囲や繁殖の可能性があると思われる地域を対象に、樹林の外部からの観察と、林内の現地踏査を実施した。
爬虫類	任意観察調査	目視による直接観察、タモ網等を用いた任意採取を行った。
両生類	任意観察調査	目視、鳴き声等による直接観察、タモ網等を用いた任意採取を行った。
昆虫類	任意採集	スウィーピング(捕虫ネットを振り、草や木の枝の先端などをなぎ払うようにしてすくい取る方法)とビーティング(木の枝・草などを叩き棒で叩いて下に落ちた昆虫をネットで受け取って採集する方法)等による直接採集をし目視観察を行った。ため池での採集も行った。
	捕獲調査	ベイト、ライト（ボックス法）、水中のトラップにより行った。
	夜間調査	ホタル類を対象とし、夜間に目視と直接採集により観察を行った。
魚類	捕獲調査	タモ網及びサデ網等を用いて捕獲調査を行った。
底生動物	定量採集調査	膝程度までの水深の場所で、25cm×25cm や 50cm×50cm といった一定面積内の底生動物を採集した。
	定性採集調査	調査範囲内の様々な環境に生息する底生動物を採集量を制限せず採集した。

3) 調査地域及び地点

調査地域は、対象事業実施区域及びその周囲における地形、植生、水系等を考慮し、対象事業実施区域及びその周囲約 200m の範囲を設定した。

調査地点は表 6.7-2 に、調査地点位置は図 6.7-1～図 6.7-9 に示す。

表 6.7-2 動物の調査地点

項目	調査方法	内容
哺乳類	任意観察調査	特に調査地点は設定せず、対象事業実施区域及びその周囲約 200m の範囲内とした。
	捕獲調査	対象事業実施区域及びその周囲約 200m の範囲内で、主要な環境である落葉広葉樹林 (No. 1, 4 地点)、草地 (No. 2 地点)、アカマツ林 (No. 3 地点) の 4 地点とした。
	自動撮影	対象事業実施区域及びその周囲約 200m の範囲内の 5 地点へセンサー付きカメラを設置した。
	夜間調査	対象事業実施区域及びその周囲約 200m の範囲内の 8 地点を中心に、その周辺部とした。
鳥類 (一般鳥類)	任意観察調査	特に調査地点は設定せず、対象事業実施区域及びその周囲約 200m の範囲内とした。
	ラインセンサス調査	対象事業実施区域及びその周囲約 200m の範囲内で、周辺地域における鳥類の生息状況を把握できると考えられる対象事業実施区域外 (L1 ルート) 及び対象事業実施区域内 (L2 ルート) の 2 ルートとした。
	定点観察調査	対象事業実施区域及びその周囲約 200m の範囲内で、周辺地域を可能な限り眺望できると考えられる対象事業実施区域外 (No. 1 地点) 及び対象事業実施区域内 (No. 2 地点) の 2 地点とした。
	夜間調査	対象事業実施区域及びその周囲約 200m の範囲内の 10 地点を中心に、その周辺部とした。
	ミゾゴイ確認調査	対象事業実施区域及びその周囲約 200m の範囲内の 10 地点を中心に、その周辺部とした。なお、鳴き声を録音するため、調査範囲内の 3 地点へ IC レコーダーを設置した。
鳥類 (猛禽類)	定点調査	視野範囲を広く確保でき、出現する個体を観察しやすい地点 (定点) 4 地点を設定した。また、希少猛禽類の出現状況等によって移動定点 (適宜場所を移動しながら観察を行う定点) を併用した。
	営巣地調査	定点調査によって繁殖行動が確認された範囲や繁殖の可能性があると思われる地域を対象とした。
爬虫類	任意観察調査	特に調査地点は設定せず、対象事業実施区域及びその周囲約 200m の範囲内とした。
両生類	任意観察調査	特に調査地点は設定せず、対象事業実施区域及びその周囲約 200m の範囲内とした。
昆虫類	任意採集	特に調査地点は設定せず、対象事業実施区域及びその周囲約 200m の範囲内とした。対象事業実施区域内の 4 箇所のため池で任意採集を行った。
	捕獲調査	対象事業実施区域及びその周囲約 200m の範囲内の 6 地点にベイトトラップ、2 地点にライトトラップ、ため池 4 箇所に水中トラップを設置した。
	夜間調査	対象事業実施区域及びその周辺の 3 地点を中心に、その周辺部とした。
魚類	捕獲調査	対象事業実施区域からの工事排水等の影響、対象事業実施区域からの放流口の位置を考慮し地点を設定した。調査は、No. 1～6 地点で実施した。
底生動物	定量採集調査	対象事業実施区域からの工事排水等の影響、対象事業実施区域からの放流口の位置を考慮し地点を設定した。定量採集は、No. 1 と No. 3 地点で実施した。
	定性採集調査	対象事業実施区域からの工事排水等の影響、対象事業実施区域からの放流口の位置を考慮し地点を設定した。定性採集は、No. 1～6 地点で実施した。なお、5 箇所において任意の調査も実施した。

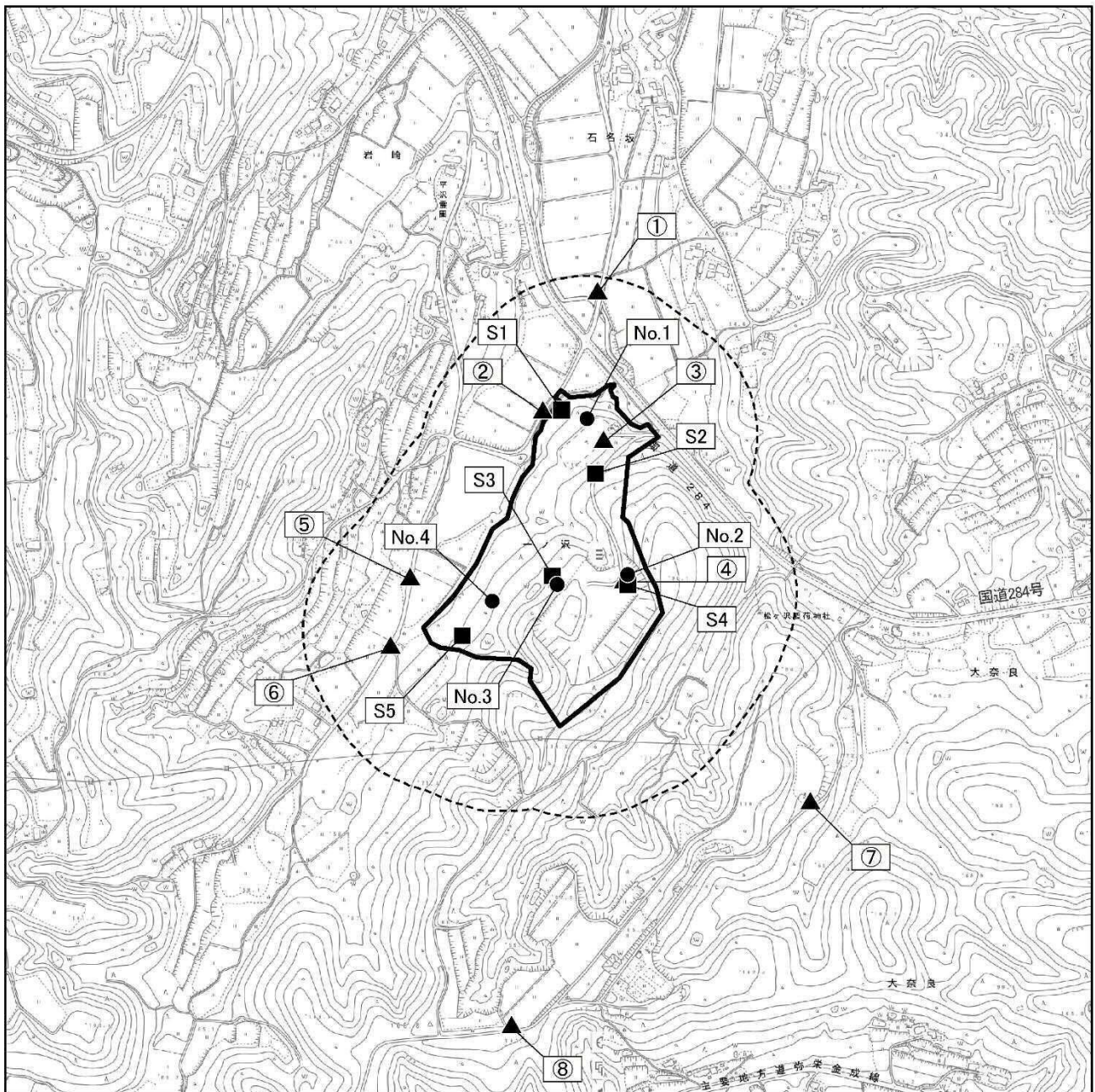


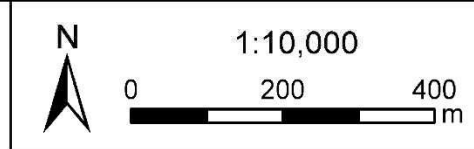


図 6.7-1 哺乳類調査範囲及び調査地点位置図

凡例

-  対象事業実施区域
-  調査範囲(対象事業実施区域から約200m)



哺乳類調査地点

記号	番号	調査項目
●	No.1~4	捕獲調査地点(トラップ調査地点)
■	S1~5	自動撮影地点(センサーカメラ設置地点)
▲	①~⑧	夜間調査地点

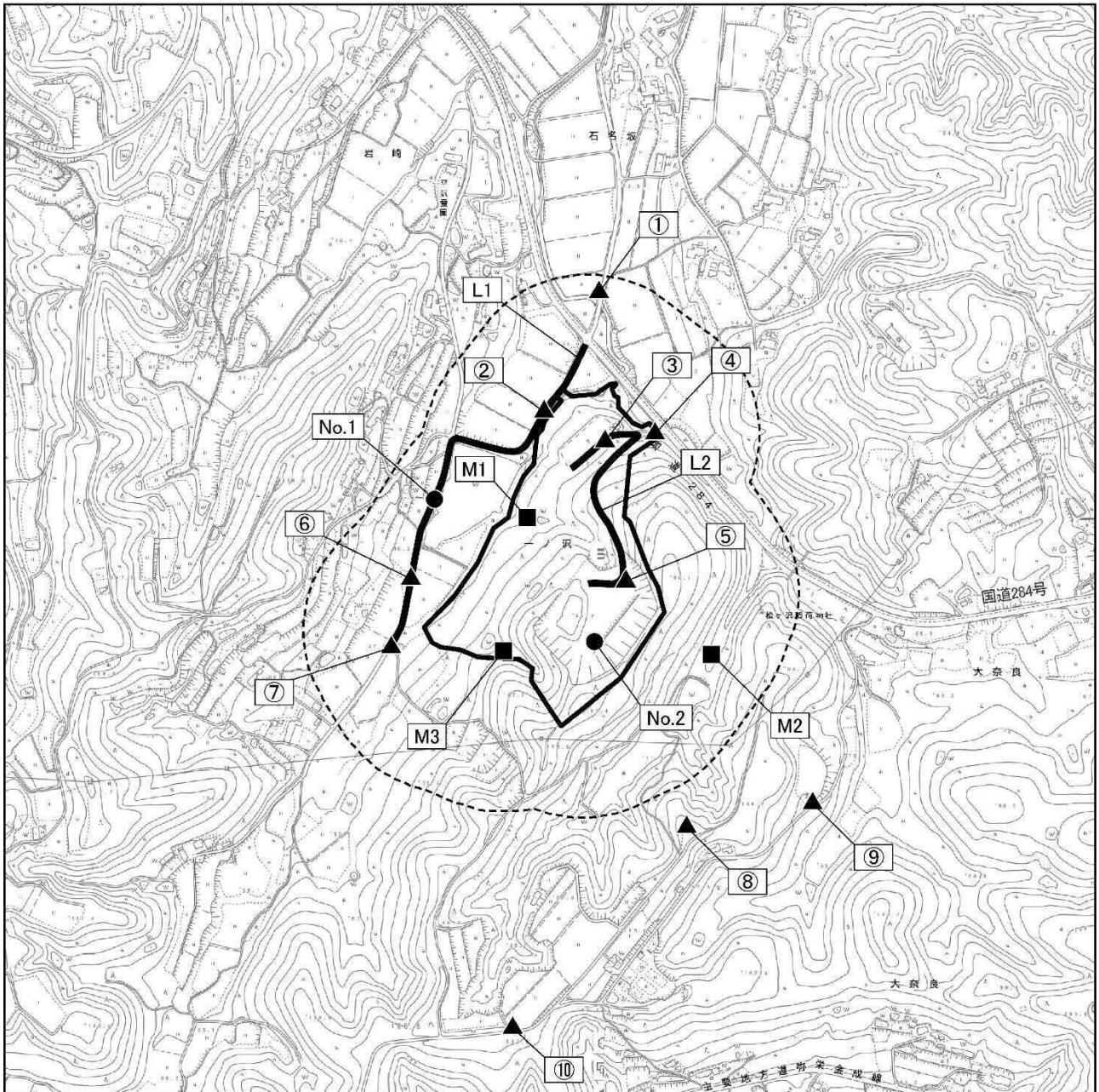


図 6.7-2 鳥類（一般鳥類）調査範囲及び調査ルート・地点位置図

凡例



対象事業実施区域



調査範囲(対象事業実施区域から約200m)

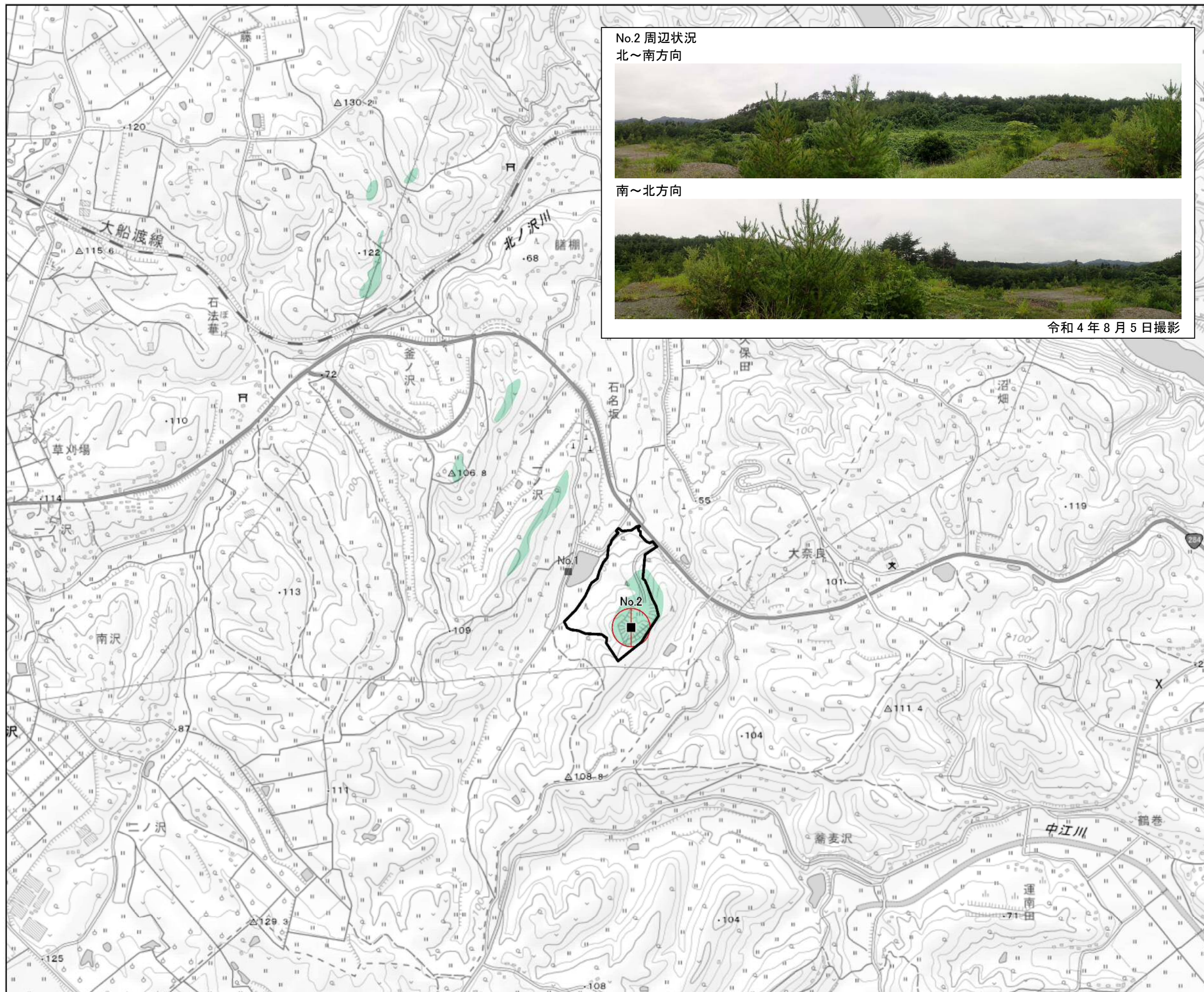


1:10,000

0 200 400 m

鳥類査地点

記号	番号	調査項目
●	No.1~2	定点観察
—	L1~2	ラインセンサスルート
▲	①~⑩	夜間調査地点
■	M1~3	ミゾゴイ調査(ICレコーダー設置地点)



凡例

- : 対象事業実施区域
- : 調査地点
- : 現地可視領域(地表面)
- ◇ : 周辺状況撮影方向

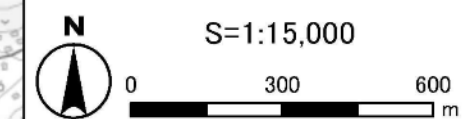


図 6.7-3(2) 鳥類 (一般鳥類)
定点視野状況 (No. 2)

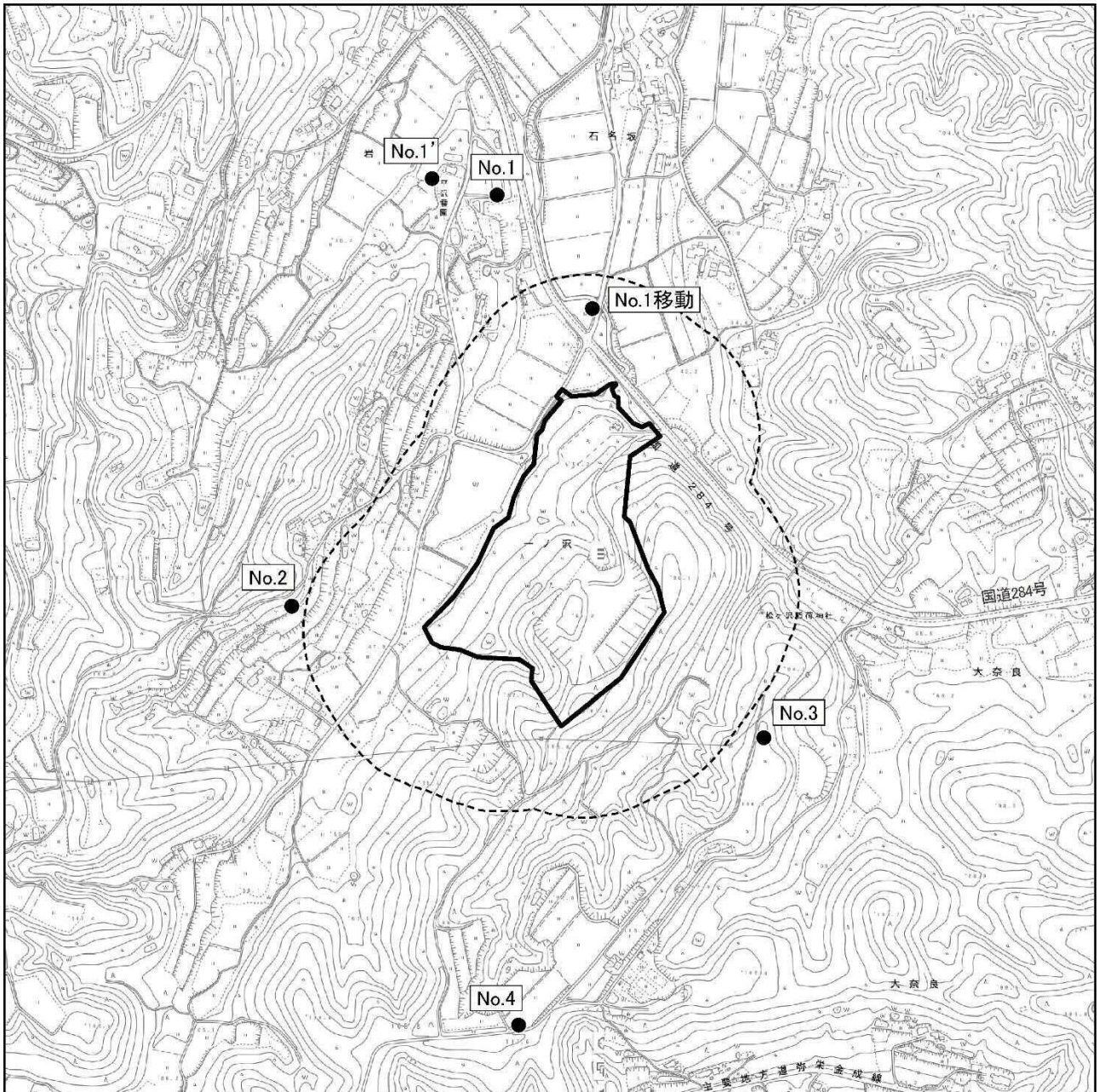



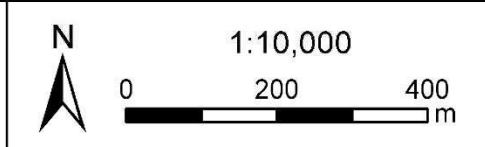
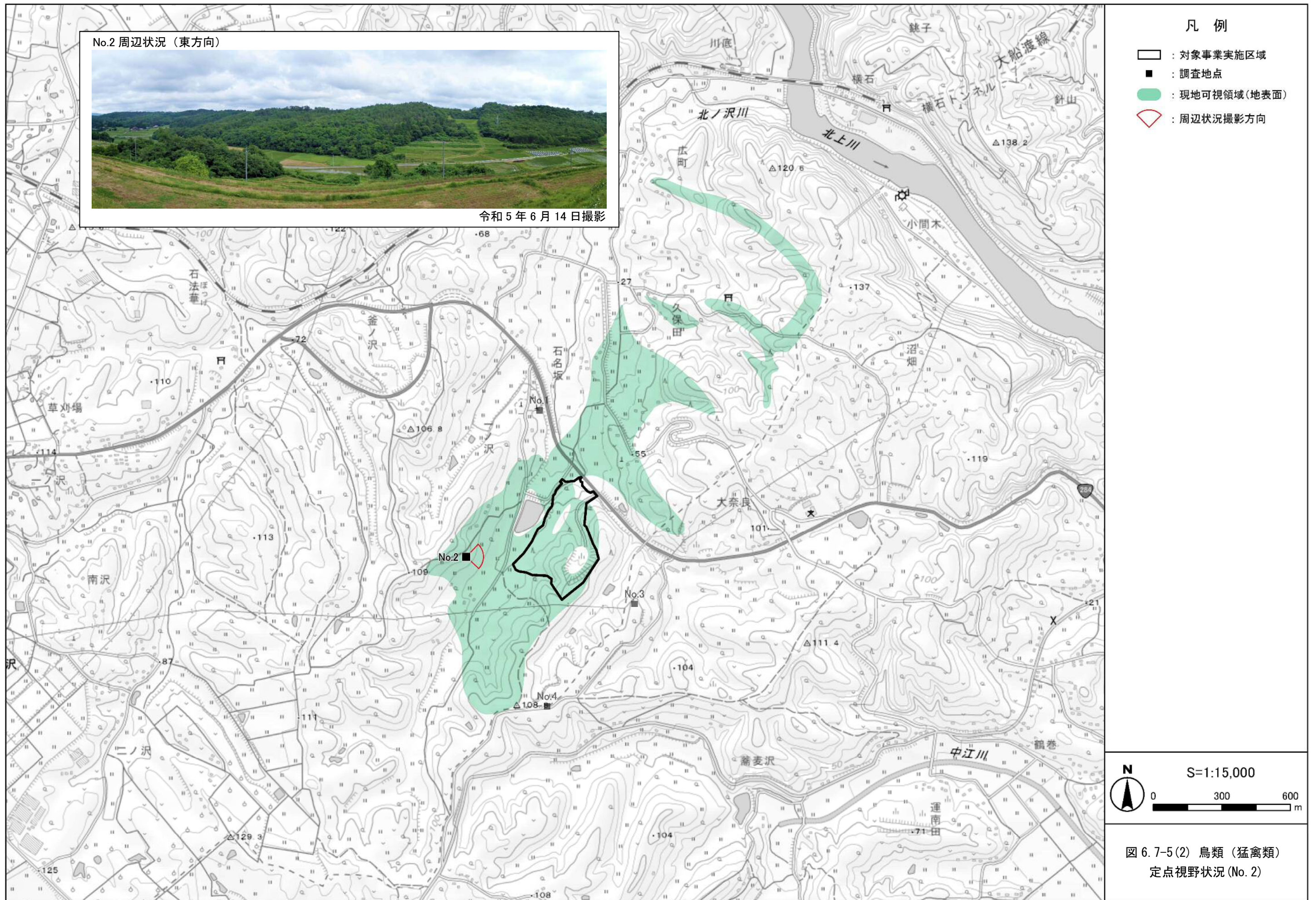


図 6.7-4 鳥類（猛禽類）調査地点位置図

凡例

-  対象事業実施区域
-  調査範囲(対象事業実施区域から約200m)
-  猛禽類調査定点







凡例

- : 対象事業実施区域
- : 調査地点
- (緑色) : 現地可視領域(地表面)
- ◇ (赤色) : 周辺状況撮影方向

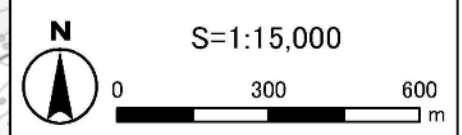


図 6.7-5(3) 鳥類 (猛禽類)
定点視野状況 (No. 3)

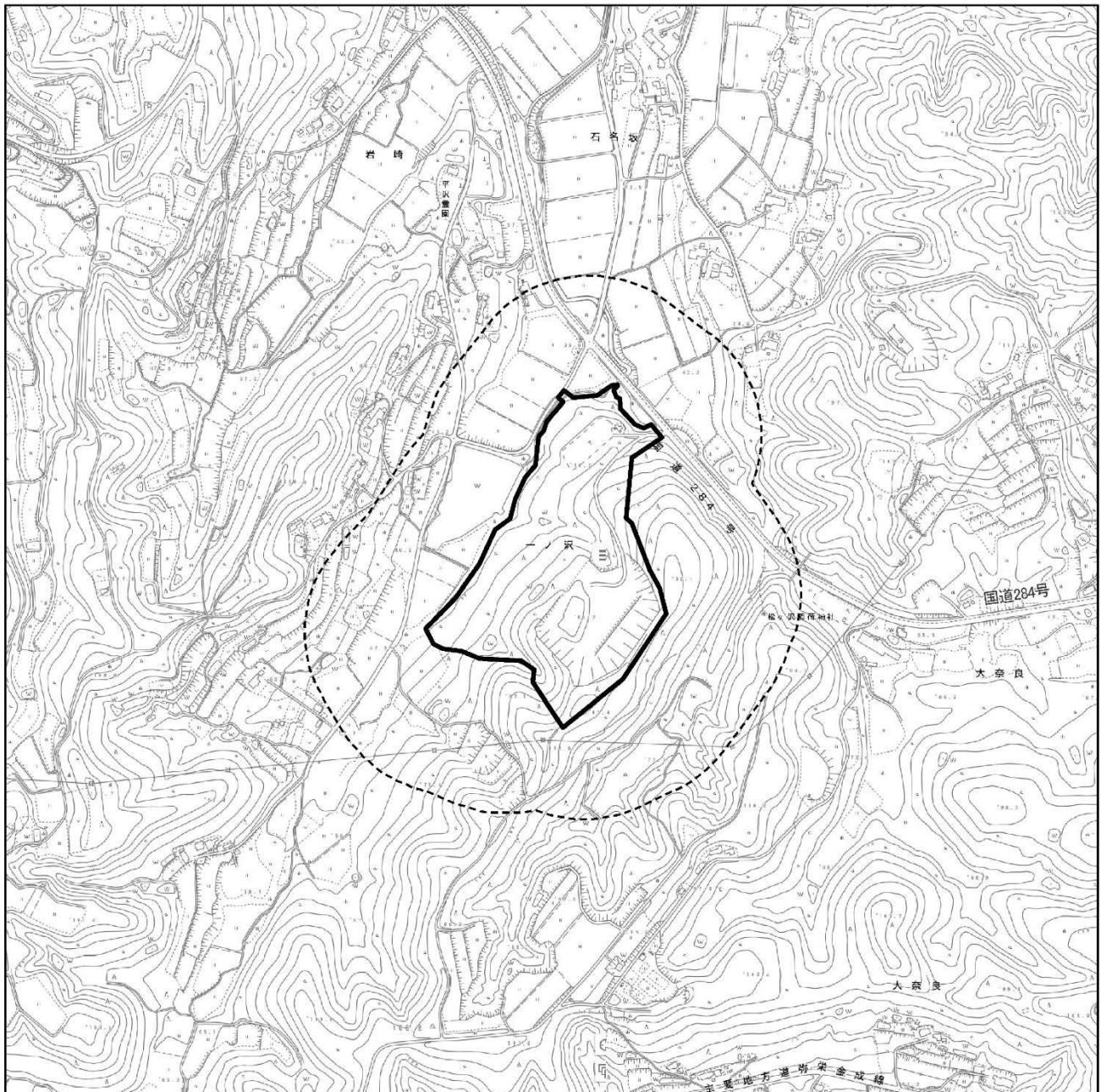


図 6.7-6 爬虫類・両生類調査範囲

凡例



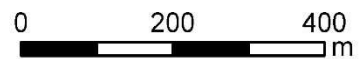
対象事業実施区域



調査範囲(対象事業実施区域から200m)



1:10,000



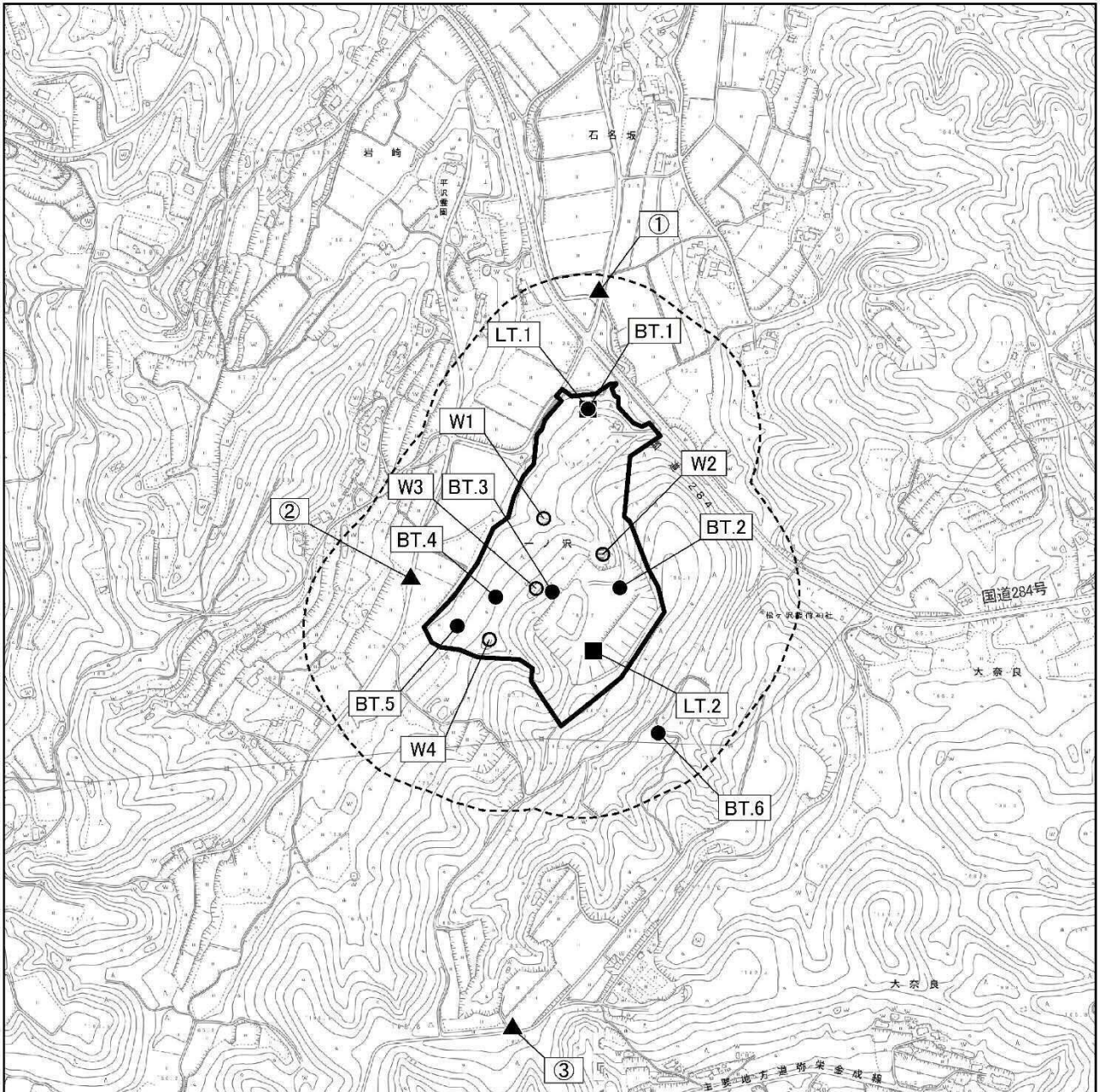


図 6.7-7 昆虫類調査範囲及び調査地点

凡例



対象事業実施区域



調査範囲(対象事業実施区域から約200m)



1:10,000

0 200 400 m

昆虫類調査地点

記号	番号	調査項目
●	BT.1~6	バイトラップ(BT.5、BT.6は夏季に追加し、夏季・秋季に実施)
■	LT.1~2	ライトトラップ
○	W1~4	水中トラップ(ゲンゴロウ類採集用)
▲	①~③	夜間調査地点(ホテル)

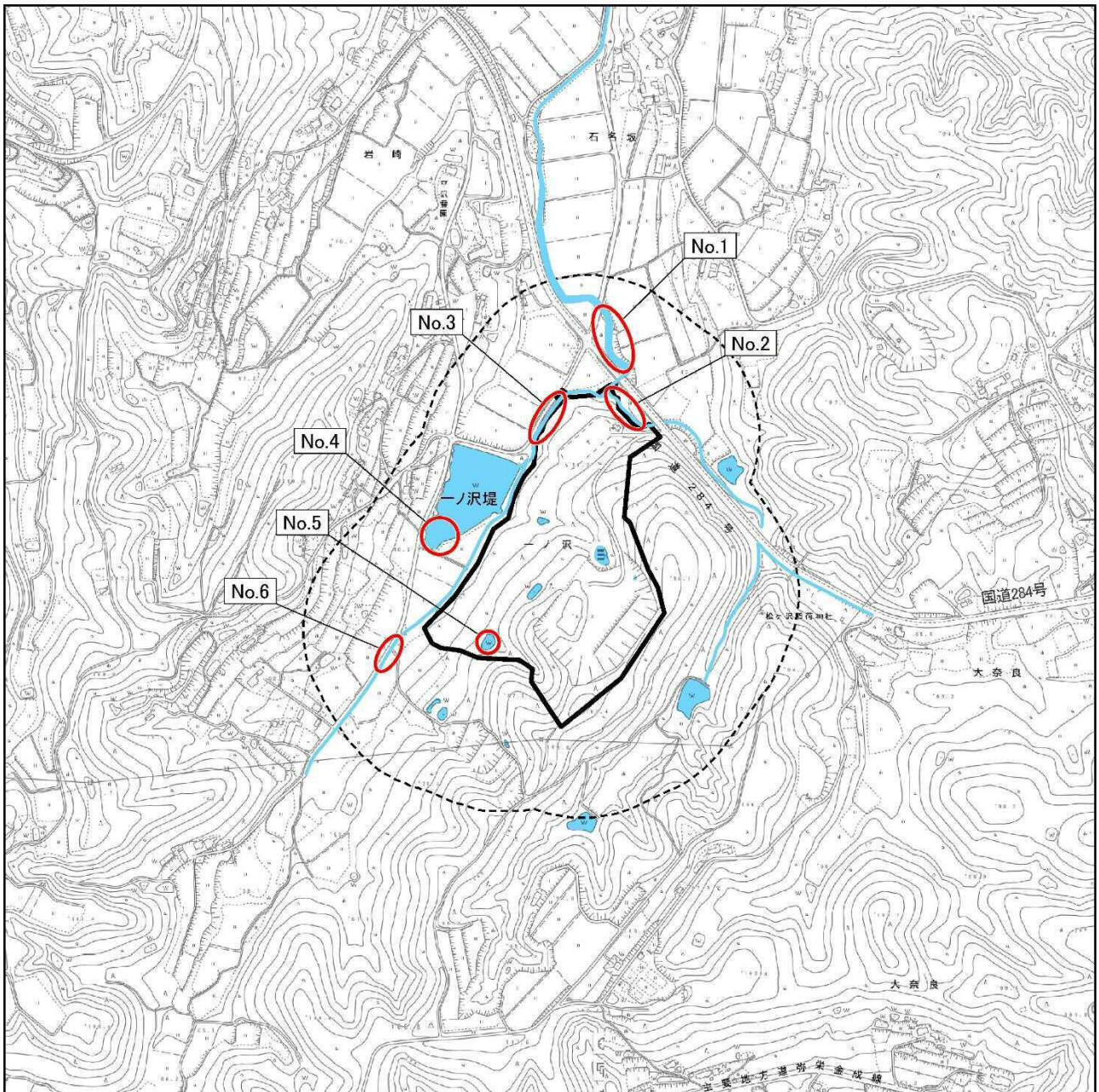


図 6.7-8 魚類調査範囲及び調査地点

凡例



対象事業実施区域



河川



ため池



調査範囲(対象事業実施区域から約200m)

魚類調査地点

記号	番号	調査項目
	No.1~6	捕獲・採集調査地点



1:10,000

0 200 400 m

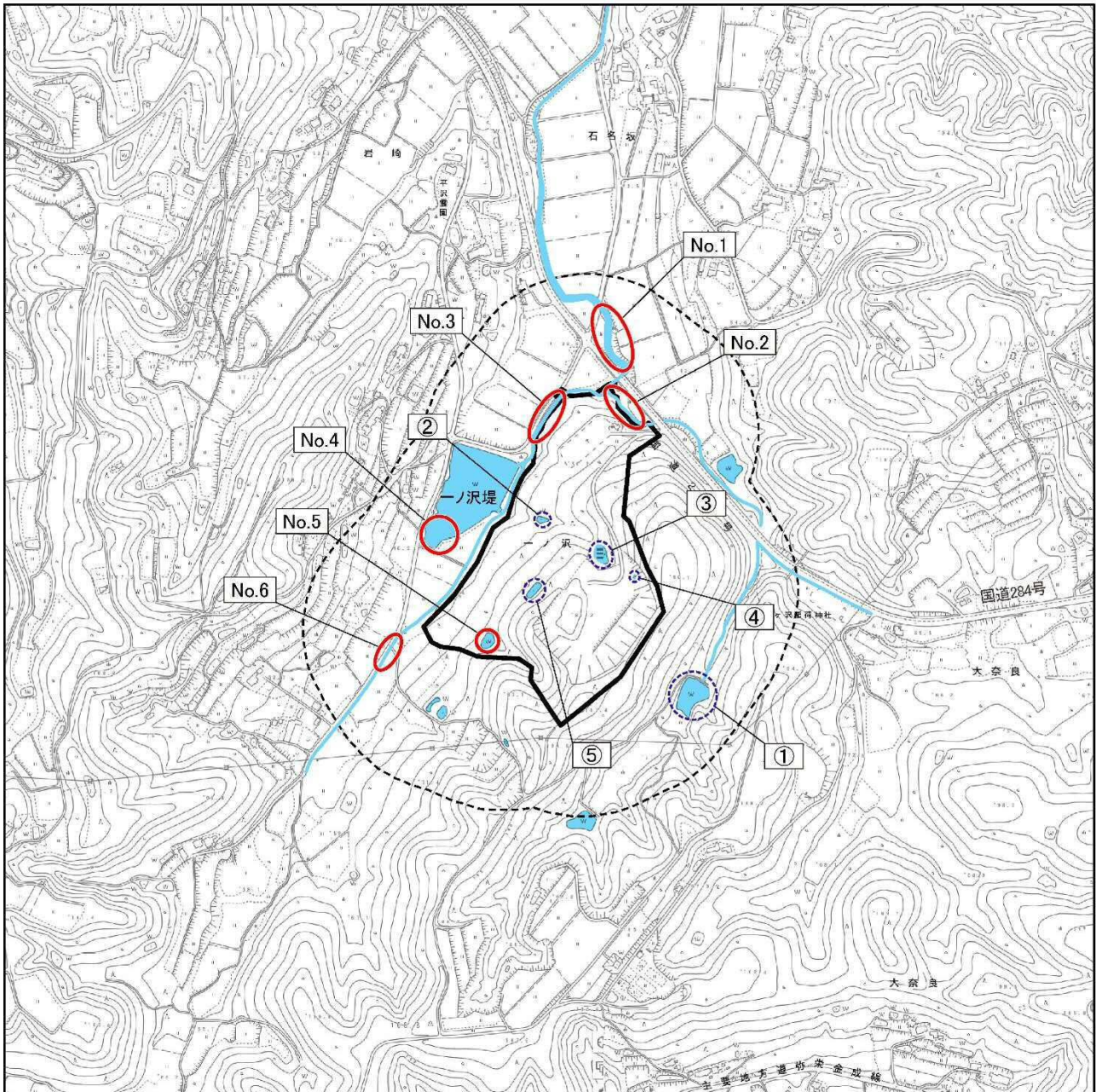


図 6.7-9 底生動物調査範囲及び調査地点

凡例



対象事業実施区域



河川



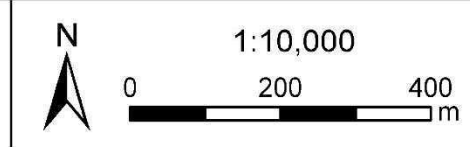
ため池



調査範囲(対象事業実施区域から約200m)

底生動物調査地点

記号	番号	調査項目
	No.1~6	捕獲・採集調査地点
	①~⑤	任意調査地点



4) 調査期間

調査期間は、表 6.7-3 に示す。

表 6.7-3(1) 動物の調査期間

調査項目	調査時季	調査日	備考
哺乳類	春季	令和4年5月26日(夜間)、27日、28日	
	(初夏)	令和4年6月20日(夜間)、7月11日(夜間)	夜間調査のみ実施
	夏季	令和4年8月3日、4日(夜間)、5日	
	秋季	令和4年10月11日(夜間)、12日、13日	
	冬季	令和4年12月12日、13日	
鳥類 (一般鳥類)	(早春季)	令和4年4月18日(夜間)	ミゾゴイ調査のみ実施
	春季	令和4年5月26日(夜間)、27日、28日	
	初夏	令和4年6月20日(夜間)、7月11日(夜間)、12日	
	夏季	令和4年8月4日(夜間)、5日	
	秋季	令和4年10月11日(夜間)、12日	
鳥類 (猛禽類)	令和4年3月	令和4年3月23日～25日	定点観察調査
	令和4年4月	令和4年4月18日～20日	定点観察調査
	令和4年5月	令和4年5月23日～25日	定点観察調査
	令和4年6月	令和4年6月20日～22日	定点観察調査
	令和4年6月	令和4年6月22日～23日	営巣地調査
	令和4年7月	令和4年7月13日～15日	定点観察調査
	令和5年3月	令和5年3月22日～24日	定点観察調査
	令和5年4月	令和5年4月17日～19日	定点観察調査
	令和5年5月	令和5年5月8日～10日	定点観察調査
	令和5年6月	令和5年6月14日～16日	定点観察調査 営巣地調査(14、15日)
	令和5年7月	令和5年7月10日～12日	定点観察調査 営巣地調査(10日)
爬虫類	(早春季)	令和4年4月18日、19日	両生類調査時に確認
	春季	令和4年5月26日、27日、28日	
	初夏	令和4年7月11日、12日	
	夏季	令和4年8月3日、4日、5日	両生類も確認
	秋季	令和4年10月11日、12日、13日	
両生類	早春季	令和4年4月18日、19日	
	春季	令和4年5月26日、27日、28日	
	初夏	令和4年7月11日、12日	
	(夏季)	令和4年8月3日、4日、5日	爬虫類調査時に確認
	秋季	令和4年10月11日、12日、13日	

表 6.7-3(2) 動物の調査期間

調査項目	調査時季	調査日	備考
昆虫類	(早春季)	令和4年4月18日、19日	植物調査時に確認
	春季	令和4年5月26日、27日、29日	
	初夏季	令和4年6月20日(夜間)、7月11日(夜間)、12日	
	夏季	令和4年8月4日、5日	
	秋季	令和4年10月11日、12日	
魚類	春季	令和4年5月28日、29日	
	秋季	令和4年10月24日、25日	
底生動物	春季	令和4年5月28日、29日	
	秋季	令和4年10月24日、25日	

5) 重要種の選定基準

重要種の選定は、表 6.7-4 に示す基準に準拠した。

表 6.7-4 重要種の選定基準

略号	選定根拠	カテゴリー
I	「文化財保護法」(昭和 25 年 法律第 214 号)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 特天：特別天然記念物 ・ 天：天然記念物
II	「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律(種の保存法)」 (平成 4 年 法律第 75 号)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 国内：国内希少野生動植物 ・ 国際：国際希少野生動植物
III	「岩手県希少野生動植物の保護に関する条例」 (平成 14 年 3 月 29 日 条例第 26 号)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指定：指定希少野生動植物 ・ 特定：特定希少野生動植物
IV	「環境省レッドリスト 2020」(2020 年、環境省)	<ul style="list-style-type: none"> ・ EX：絶滅 ・ EW：野生絶滅 ・ CR：絶滅危惧 I A 類 ・ EN：絶滅危惧 I B 類 ・ VU：絶滅危惧 II 類 ・ NT：準絶滅危惧 ・ DD：情報不足 ・ LP：絶滅のおそれのある地域 個体群
V	「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物」(2014 年、岩手県環境生活部自然保護課)	<ul style="list-style-type: none"> ・ EX：絶滅 ・ EW：野生絶滅 ・ A：絶滅危惧 I 類 ・ B：絶滅危惧 II 類 ・ C：準絶滅危惧 ・ D：C ランクに準ずる種 ・ DD：情報不足

6) 調査結果

(1) 哺乳類

確認状況は、表 6.7-5、表 6.7-6 と図 6.7-10 に示す。全体で 6 目 11 科 16 種を確認し、そのうち重要な哺乳類は 2 目 2 科 3 種であった。

確認された重要種の生態及び確認状況等は、表 6.7-7 に示す。

表 6.7-5 哺乳類の確認種一覧

No.	目名	科名	種名 ^{*1}	調査時季					確認形態
				春季	初夏 (夜間)	夏季	秋季	冬季	
1	モグラ	モグラ	ヒミズ				○		死体
2	(食虫)		モグラ科 ^{*2}	○		○		○	塚
3	コウモリ	キクガシラコウモリ	キクガシラコウモリ	○			○		目撃、バットディテクター
4	(翼手)	ヒナコウモリ	ヒナコウモリ科 ^{1*}	○	○	○	○		バットディテクター
5			ヒナコウモリ科 ^{2*}	○	○	○	○		バットディテクター
6	ウサギ	ウサギ	ノウサギ	○		○		○	糞、自動撮影
7	ネズミ	リス	ニホンリス	○		○	○	○	食痕、自動撮影
8	(齧歯)	ネズミ	アカネズミ	○		○	○		捕獲
-			ネズミ科 ^{*5}	○		○			自動撮影
9	ネコ	イヌ	タヌキ	○		○	○	○	足跡、糞、自動撮影
10	(食肉)		キツネ	○			○	○	糞、自動撮影
11		イタチ	テン	○		○	○	○	糞、自動撮影
12			ニホンイタチ				○	○	糞
13			アナグマ	○					目撃
14		ジャコウネコ	ハクビシン	○		○	○		足跡、自動撮影
15	ウシ	シカ	ニホンジカ	○		○	○	○	目撃、糞、自動撮影
16	(偶蹄)	ウシ	カモシカ	○		○			目撃、糞、自動撮影
-		-	ウシ目 ^{*6}	○		○	○	○	足跡
合計	6 目	11 科	16 種	14 種	2 種	11 種	12 種	8 種	-

*1. 種名等は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト 令和 4 年度生物リスト」(令和 4 年、国土交通省水情報国土データ管理センター)に準拠したが、一部他の文献を参考にした。

*2. モグラ科はアズマモグラまたはミズラモグラである。塚のみの確認では種を特定するには至らなかった。

*3. ヒナコウモリ科 1 は確認した音声のピーク周波数(20~25kHz)や分布情報より、コヤマコウモリ、ヤマコウモリ、クビワコウモリ、ヒナコウモリのいずれかである。ヒナコウモリ科 2 とは別種の可能性が高いため、種数合計には計上した。

*4. ヒナコウモリ科 2 は確認した音声のピーク周波数(40~50kHz)や分布情報より、ヒメホオヒゲコウモリ、カグヤコウモリ、モモジロコウモリ、クロホオヒゲコウモリ、ノレンコウモリ、モリアブラコウモリ、アブラコウモリ、チチブコウモリ、ウサギコウモリ、ユビナガコウモリ、コテングコウモリ、テングコウモリのいずれかである。ヒナコウモリ科 1 とは別種の可能性が高いため、種数合計に計上した。

*5. ネズミ科は自動撮影で撮影されたが、種は不明である。

*6. ウシ目はイノシシ、ニホンジカ、カモシカのいずれかである。不明瞭な足跡では種を特定するには至らなかった。これらの種が確認されているため、種数の合計には含めていない。

注) は重要種を示す。

表 6.7-6 哺乳類の重要種一覧

No.	目名	科名	種名*1	調査時季					選定基準*2					
				春季	初夏 (夜間)	夏季	秋季	冬季	I	II	III	IV	V	
1	コウモリ (翼手)	ヒナコウモリ	ヒナコウモリ科 1*3	○	○	○	○							
			(コヤマコウモリ)									EN	A	
			(ヤマコウモリ)										VU	B
			(クビワコウモリ)										VU	
			(ヒナコウモリ)											B
2			ヒナコウモリ科 2*4	○	○	○	○							
			(ヒメホオヒゲコウモリ)											C
			(カグヤコウモリ)											B
			(クロホオヒゲコウモリ)										VU	A
			(ノレンコウモリ)										VU	B
			(モリアブラコウモリ)										VU	A
			(チチブコウモリ)										LP	A
			(ニホンウサギコウモリ)											B
			(ユビナガコウモリ)											B
			(コテングコウモリ)											D
			(テングコウモリ)											B
3	ウシ(偶蹄)	ウシ	カモシカ	○		○				特天				D
合計	2目	2科	3種	3種	2種	3種	2種	0種	1種	0種	0種	2種	3種	

*1. 種名等は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト 令和4年度生物リスト」(令和4年、国土交通省水情報国土データ管理センター)に準拠したが、一部他の文献を参考にした。

*2. 選定基準のカテゴリーランクは、以下のとおり。下線は現地調査で確認された種の該当するランクを示す。

I : 「文化財保護法」(昭和25年 法律第214号)

特別天然記念物(特天)、天然記念物(天)

II : 「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律(種の保存法)」(平成4年 法律第75号)

国内希少野生動植物(国内)、国際希少野生動植物(国際)

III : 「岩手県希少野生動植物の保護に関する条例」(平成14年3月29日 条例第26号)

指定希少野生動植物(指定)、特定希少野生動植物(特定)

IV : 「環境省レッドリスト2020」(2020年、環境省)

絶滅(EX)、野生絶滅(EW)、絶滅危惧ⅠA類(CR)、絶滅危惧ⅠB類(EN)、絶滅危惧Ⅱ類(VU)、準絶滅危惧(NT)、情報不足(DD)、絶滅のおそれのある地域個体群(LP)

V : 「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物」(2014年、岩手県環境生活部自然保護課)

絶滅(EX)、野生絶滅(EW)、絶滅危惧Ⅰ類(A)、絶滅危惧Ⅱ類(B)、準絶滅危惧(C)、Cランクに準ずる種(D)、情報不足(DD)

*3. ヒナコウモリ科1は確認した音声のピーク周波数(20~25kHz)や分布情報より、コヤマコウモリ、ヤマコウモリ、クビワコウモリ、ヒナコウモリのいずれかである。ヒナコウモリ科2とは別種の可能性が高いため、種数合計には計上した。

*4. ヒナコウモリ科2は確認した音声のピーク周波数(40~50kHz)や分布情報より、ヒメホオヒゲコウモリ、カグヤコウモリ、モモジロコウモリ、クロホオヒゲコウモリ、ノレンコウモリ、モリアブラコウモリ、アブラコウモリ、チチブコウモリ、ニホンウサギコウモリ、ユビナガコウモリ、コテングコウモリ、テングコウモリのいずれかである。ヒナコウモリ科1とは別種の可能性が高いため、種数合計に計上した。

表 6.7-7(1) 重要種の生態及び確認状況等（哺乳類）(1)

種名	分布・生態	確認状況・特記事項
ヒナコウモリ科 1 コヤマコウモリ 【重要種ランク】 環境省：EN 岩手県：A ランク	【形態】前腕長 48～53mm、体重 20g 前後、体毛は暗褐色。形態、体色ともに酷似しているヤマコウモリと比べると体毛の色はかなり黒味が強い、また前腕長、体重ともに明らかに小さい。 【分布】県内では二戸市、宮古市、岩泉町、早池峰山、住田町、旧玉山村で確認されている。 【生息状況】全国的にも希少であり、県内においても確認は極めて少ない。採集地の大半が大木の多い自然広葉樹林であることから樹洞をねぐらとすると考えられ、本種には大径木を含む広葉樹林の存在が必須である。繁殖、冬眠については不明。	夜間のバットディテクターを用いた調査で 20～25kHz の波長が確認された。これはヒナコウモリ科の波長に該当し、コヤマコウモリ、ヤマコウモリ、クビワコウモリ、ヒナコウモリの可能性がある。 春季調査時に対象事業実施区域外で 2 例、対象事業実施区域内の改変区域内で 1 例、初夏調査時に対象事業実施区域外で 6 例、対象事業実施区域内の非改変区域内で 1 例、改変区域内で 1 例、夏季調査時に対象事業実施区域外で 9 例、対象事業実施区域内の改変区域内で 2 例、秋季調査時に対象事業実施区域内の改変区域内で 1 例が確認された。 (バットディテクターによる確認のため現地撮影写真なし)
ヒナコウモリ科 1 ヤマコウモリ 【重要種ランク】 環境省：VU 岩手県：B ランク	【形態】前腕長 58～65mm、体重 26～60g、体毛は光沢のある茶色が目立つ。日本の食虫性コウモリの中では最大で翼を広げると 40 cm に達する。翼は狭長型。 【分布】県内では二戸市、宮古市、岩泉町、薬師岳、旧川井村、盛岡市、紫波町、八幡平市、岩手山・八幡平地域、雫石町・国見山、北上市、旧水沢市、一関市 で確認されている。 【生息状況】広い広葉樹林を好み、ミズナラ、ブナなどの大木をねぐらにするが、時には町中の神社、寺、公園などの大木の樹洞をねぐらにすることもある。	
ヒナコウモリ科 1 クビワコウモリ 【重要種ランク】 環境省：VU	【形態】前腕長 38～43mm、頭胴長 55～65mm、尾長で 35～43mm、体重 8～13g。体毛は黒褐色系で、刺毛の先端は薄い褐色から白色である。 【分布】福島県、栃木県、埼玉県、山梨県、静岡県、長野県、富山県、石川県、岐阜県と本州中部からのみ知られる。 【生息状況】落葉広葉樹の自然林、針広混交林などから知られる。本来は樹洞を昼間のねぐらとしていていると思われる。樹洞がなくなった地域では、他へ移動したか滅びたものと思われるが、一部では家屋を初夏から秋のねぐらとして利用し、出産と子育てをそこで行っていることが知られている。	
ヒナコウモリ科 1 ヒナコウモリ 【重要種ランク】 岩手県：B ランク	【形態】前腕長 45～54mm、体重 14～30g、体毛は黒褐色に先端が白い刺毛が混在し霜降り状に見える。翼は狭長型。翼は狭長型。 【分布】県内では宮古市、岩泉町、旧大迫町、遠野市、旧玉山村、旧安代町、盛岡市、旧水沢市で確認されている。 【生息状況】本来のねぐらである樹洞が森林伐採で減少したため、神社や寺の屋根裏、陸橋、新幹線の橋脚の隙間を利用するようになった。	

分布・生態情報の出典：「レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生動物-」（2015 年、環境省）
 「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物 web 版」（2014 年、岩手県）

表 6.7-7(2) 重要種の生態及び確認状況等（哺乳類）(2)

種名	分布・生態	確認状況・特記事項
ヒナコウモリ科 2 ヒメホオヒゲコウモリ 【重要種ランク】 岩手県：C ランク 出典より、別名のフジホオヒゲコウモリで記載。	【形態】前腕長 31～37mm、体重 4～8g、体毛は黒褐色から赤褐色、皮膚は黒褐色。形態、体色ともに似ているカグヤコウモリよりも小さく、下腿長は 17mm 以下と短い。 【分布】県内では宮古市、五葉山、遠野市、薬師岳、旧玉山村、岩手山・八幡平地域、旧安代町、旧湯田町で確認されている。 【生息状況】県内では標高 500m 以上のミズナラ、ブナ帯の森林に多く生息。主に樹洞や樹皮下をねぐらとするが、稀に洞窟を利用することもある。	夜間のバットディテクターを用いた調査で 40～50kHz の波長が確認された。これはヒナコウモリ科の波長に該当し、ヒメホオヒゲコウモリ、カグヤコウモリ、クロホオヒゲコウモリ、ノレンコウモリ、モリアブラコウモリ、チチブコウモリ、ニホンウサギコウモリ、ユビナガコウモリ、コテングコウモリ、テングコウモリの可能性がある。 春季調査時に対象事業実施区域外で 2 例、対象事業実施区域内の改変区域内で 2 例、初夏調査時に対象事業実施区域外で 2 例、対象事業実施区域内の非改変区域内で 1 例、改変区域内で 1 例、夏季調査時に対象事業実施区域外で 6 例、対象事業実施区域内の改変区域内で 1 例、秋季調査時に対象事業実施区域外で 2 例が確認された。
ヒナコウモリ科 2 カグヤコウモリ 【重要種ランク】 岩手県：B ランク	【形態】前腕長 36～42mm、体重 6～11g、体毛は赤褐色。形態、体色ともに似ているヒメホオヒゲコウモリよりも足が長く、下腿長は 17mm 以上ある。 【分布】県内では旧山形村、宮古市、岩泉町、薬師岳、旧玉山村、旧安代町、岩手山・八幡平地域で確認されている。 【生息状況】樹洞をねぐらとするが、時々洞穴で休眠したり、100 頭ほどの繁殖集団が人家で発見されたこともある。	
ヒナコウモリ科 2 クロホオヒゲコウモリ 【重要種ランク】 環境省：VU 岩手県：A ランク	【形態】前腕長 30～35mm、体重 3～5g、日本産ホオヒゲコウモリ属のなかで最小。体毛は黒色で背面上毛の先端に銀色の金属光沢をもつ。 【分布】県内では山田町、宮古市、岩泉町、早池峰山、旧安代町、北上市和賀町、奥州市、一関市、西和賀町で確認されている。 【生息状況】採集地の大半が大木の多い自然広葉樹林であり、樹洞や樹皮下などをねぐらとする本種には広葉樹林の存在が必須である。	(バットディテクターによる確認のため現地撮影写真なし)
ヒナコウモリ科 2 ノレンコウモリ 【重要種ランク】 環境省：VU 岩手県：B ランク	【形態】前腕長 37～43mm、体重 5～10g、体毛は背面灰色、腹面は白っぽい、他のホオヒゲコウモリ類より耳株は長く 9mm 以上あり、尾膜の後縁の尾端周辺に細い毛が列生している。 【分布】県内では旧山形村、岩泉町、旧玉山村、旧安代町で確認されている。 【生息状況】主に自然洞窟をねぐらとするが、廃トンネルや防空壕、神社の社、稀に樹洞などでも確認されている。	
ヒナコウモリ科 2 モリアブラコウモリ 【重要種ランク】 環境省：VU 岩手県：A ランク	【形態】前腕長 31～33mm、体重 5～9g、体毛は背面に赤褐色または黄褐色、皮膜の色は黒い、犬歯後方の突起はアブラコウモリより大きく発達している。 【分布】県内では九戸村、旧山形村、山田町、宮古市、岩泉町、遠野市、早池峰山、旧玉山村、旧安代町、葛巻町で確認されている。 【生息状況】全国的にも希少であり、県内においても確認は少ない。採集地の大半が大木の多い自然広葉樹林であり、樹洞や樹皮下などをねぐらとする本種には樹林の存在が必須。	

分布・生態情報の出典：「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物 web 版」(2014 年、岩手県)

表 6.7-7(3) 重要種の生態及び確認状況等（哺乳類）(3)

種名	分布・生態	確認状況・特記事項
<p>ヒナコウモリ科 2 チチブコウモリ</p> <p>【重要種ランク】 環境省：LP 岩手県：A ランク</p>	<p>【形態】前腕長 39～44mm、体重 8～12g、体毛は黒色、耳介は大きく幅広で左右の根元が頭部中央で結合する。</p> <p>【分布】県内では二戸市・折爪岳、久慈市、山田町、宮古市、岩泉町、釜石市、旧玉山村で確認されている。</p> <p>【生息状況】本州での確認事例も少なく、県内での確認も極めて少ない。確認されているのが原生林であることから主に樹洞をねぐらとしていると考えられる。繁殖については不明。岩泉町の洞窟で冬眠個体、秋季に久慈市の洞窟で休息中の個体が確認されている。</p>	
<p>ヒナコウモリ科 2 ニホンウサギコウモリ</p> <p>【重要種ランク】 岩手県：B ランク</p>	<p>【形態】前腕長 37～44mm、体重 6～11g、体毛の背面は薄茶色、腹面は僅かに淡い。耳介 38～40mm 耳珠、約 19mm とともに著しくながい。翼は広短型。</p> <p>【分布】県内では二戸市、旧山形村、山田町、宮古市、岩泉町、旧川井村、遠野市、住田町、旧玉山村、旧安代町、岩手山・八幡平地域、一関市で確認されている。</p> <p>【生息状況】森林地帯での捕獲が多いことから、樹洞を主なねぐらとしてと思われるが、家屋、石室、洞窟などをねぐらとすることも稀ではない。</p>	
<p>ヒナコウモリ科 2 ユビナガコウモリ</p> <p>【重要種ランク】 岩手県：B ランク</p>	<p>【形態】前腕長 45～51mm、体重 10～17g、体毛は焦げ茶色で短くビロード状、第三指(中指)が長く、高速飛翔に適した狭長型の翼をもつ。</p> <p>【分布】県内では北上市の洞窟内で確認されているほか、旧安代町・安比高原一帯の街路灯に 8～10 月頃 に飛来が観察されている。</p> <p>【生息状況】主に自然洞窟をねぐらとするが廃トンネルや防空壕などでの休息も確認されている、県内では飛翔観察をのぞけば北上市の人工洞での確認のみである。</p>	
<p>ヒナコウモリ科 2 コテングコウモリ</p> <p>【重要種ランク】 岩手県：D ランク</p>	<p>【形態】前腕長 27～34mm、体重 4～8g、体毛は薄茶色から黄土色、この体毛は尾膜まで及ぶ、鼻部は筒状でやや外側に突出している、翼は広短型。</p> <p>【分布】県内では二戸町、旧山形村、山田町、宮古市、大槌町、釜石市、岩泉町、旧川井村、旧大迫町、旧玉山村、盛岡市、岩手山・八幡平地域、旧安代町 で確認されている。</p> <p>【生息状況】広葉樹林の樹洞、樹皮下や枯れ葉などをねぐらとし低木林から高木林と樹林内の環境を広く利用している。</p>	

分布・生態情報の出典：「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物 web 版」(2014 年、岩手県)

表 6.7-7(4) 重要種の生態及び確認状況等（哺乳類）(4)

種名	分布・生態	確認状況・特記事項
<p>ヒナコウモリ科 2 テングコウモリ</p> <p>【重要種ランク】 岩手県：B ランク</p>	<p>【形態】前腕長 40～46mm、体重 8～15g、体毛は灰褐色で先端に銀色の光沢を持ち、この体毛は尾膜まで及ぶ、鼻部は筒状でやや外側に突出している、翼は広短型。</p> <p>【分布】県内では旧山形村、山田町、宮古市、岩泉町、遠野市、陸前高田市、旧玉山村、旧安代町、岩手山・八幡平地域で確認されている。</p> <p>【生息状況】主に森林の樹洞をねぐらにするが、洞穴で休眠することもある。その際、洞内の天井にあいた隙間、小孔に単独で潜んでいることが多い。</p>	
<p>カモシカ (ウシ科)</p> <p>【重要種ランク】 天然記念物：特天 岩手県：D ランク</p>	<p>【形態】頭胴長 70～85cm、体重 30～50kg。大型の草食獣。角は落ちず、毎年角輪を形成する。</p> <p>【分布】都市部を除く県内の山地、里地のほぼ全域に分布。</p> <p>【生息状況】生息数はほぼ安定していると思われる。三陸地方の一部市町では、農作物被害の防除のため捕獲も行われている。</p>	<p>春季と夏季の調査において、糞及び目撃（センサーカメラ含む）で確認された。</p> <p>春季調査時に対象事業実施区域外で 3 例、対象事業実施区域内の改変区域内で 3 例、夏季調査時に対象事業実施区域外で 1 例、対象事業実施区域内の非改変区域内で 1 例が確認された。</p>



分布・生態情報の出典：「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物 web 版」（2014 年、岩手県）



図 6.7-10 哺乳類重要種確認位置図

(2) 鳥類（一般鳥類）

確認状況は、表 6.7-8、表 6.7-9 と図 6.7-11 に示す。全体で 14 目 33 科 72 種を確認し、そのうち重要な鳥類は 8 目 10 科 15 種であった。

確認された重要種の生態及び確認状況等は、表 6.7-10 に示す。

表 6.7-8(1) 鳥類（一般鳥類）の確認種一覧

No.	目名	科名	種名 ^{*1}	調査時季					
				早春	春季	初夏	夏季	秋季	冬季
1	キジ	キジ	ヤマドリ					○	
2			キジ		○	○		○	○
3			コジュケイ						○
4	カモ	カモ	コハクチョウ						○
5			オオハクチョウ						○
6			オシドリ					○	
7			ヒドリガモ						○
8			マガモ					○	○
9			カルガモ		○	○		○	○
10			ハシビロガモ					○	
11			オナガガモ						○
12			ホシハジロ					○	○
13			キンクロハジロ						○
14	ハト	ハト	キジバト		○	○	○	○	○
15			カワラバト			○	○		○
16	カツオドリ	ウ	カワウ			○		○	○
17	ペリカン	サギ	アオサギ		○	○	○	○	○
18			ダイサギ		○		○	○	○
19	ツル	クイナ	バン					○	
20			オオバン					○	○
21	カッコウ	カッコウ	ホトトギス		○	○	○		
22	アマツバメ	アマツバメ	ハリオアマツバメ					○	
23	チドリ	シギ	イソシギ						○
24	タカ	ミサゴ	ミサゴ				○		
25		タカ	トビ		○	○	○	○	○
26			ツミ					○	
27			ハイタカ			○			
28			オオタカ				○		
29			サシバ		○		○		
30			ノスリ		○	○	○	○	○
31	フクロウ	フクロウ	フクロウ	○				○	○
32	ブッポウソウ	カワセミ	カワセミ		○	○	○	○	
33	キツツキ	キツツキ	コゲラ		○	○	○	○	○
34			アカゲラ			○		○	○
35			アオゲラ		○	○	○	○	○
-			キツツキ科				○		
36	スズメ	サンショウクイ	サンショウクイ		○	○	○		
37		カササギヒタキ	サンコウチョウ			○			
38		モズ	モズ			○	○	○	○
39		カラス	カケス			○		○	○
40			ハシボソガラス		○	○	○	○	○
41			ハシブトガラス		○	○	○	○	○
42		クイタダキ	クイタダキ						○

表 6.7-8(2) 鳥類（一般鳥類）の確認種一覧

No.	目名	科名	種名*1	調査時季						
				早春	春季	初夏	夏季	秋季	冬季	
43	スズメ	シジュウカラ	コガラ			○				
44			ヤマガラ		○	○	○	○	○	
45			ヒガラ						○	
46			シジュウカラ		○	○	○	○	○	
47		ツバメ	ツバメ		○	○	○			
48			イワツバメ			○				
49		ヒヨドリ	ヒヨドリ		○	○	○	○	○	
50		ウグイス	ウグイス		○	○	○	○	○	
51			ヤブサメ		○	○				
52		エナガ	エナガ		○		○	○	○	
53		メジロ	メジロ		○	○	○	○	○	
54		センニュウ	シマセンニュウ					○		
55		ミソサザイ	ミソサザイ						○	
56		ムクドリ	ムクドリ			○				
57		ヒタキ	ツグミ						○	
58			ルリビタキ						○	
59			ジョウビタキ						○	
60			キビタキ			○	○			
61			オオルリ				○			
62		スズメ	スズメ		○	○	○	○	○	
63		セキレイ	キセキレイ				○			
64			ハクセキレイ				○	○	○	
65	セグロセキレイ					○	○	○		
66	アトリ	カワラヒワ		○	○	○	○	○		
67		ベニマシコ						○		
68		シメ						○		
69		イカル				○		○		
70	ホオジロ	ホオジロ		○	○	○	○	○		
71		カシラダカ						○		
72		アオジ					○			
合計	14 目	33 科	72 種	1 種	27 種	38 種	29 種	40 種	47 種	

*1. 種名等は「日本鳥類目録改訂第7版」（2014年、日本鳥学会）に準拠した。

注) は重要種を示す。

表 6.7-9 鳥類（一般鳥類）の重要種一覧

No.	目名	科名	種名*1	調査時季						選定基準*2					
				早春	春季	初夏 (夜間)	夏季	秋季	冬季	I	II	III	IV	V	
1	キジ	キジ	ヤマドリ					○						D	
2	カモ	カモ	オシドリ					○					DD	D	
3	ツル	クイナ	バン					○						D	
4			オオバン					○	○					C	
5	アマツバメ	アマツバメ	ハリオアマツバメ					○						D	
6	タカ	ミサゴ	ミサゴ				○						NT	B	
7		タカ	ツミ				○							C	
8			ハイタカ			○							NT	C	
9			オオタカ				○						NT	B	
10			サシバ		○		○							VU	B
11			ノスリ		○	○	○	○	○						D
12	フクロウ	フクロウ	フクロウ	○				○	○					D	
13	ブッポウソウ	カワセミ	カワセミ		○	○	○	○						D	
14	スズメ	サンショウクイ	サンショウクイ		○	○	○						VU	C	
15		カササギヒタキ	サンコウチョウ			○								D	
合計	8目	10科	15種	1種	4種	5種	6種	9種	3種	0種	0種	0種	6種	15種	

*1. 種名等は「日本鳥類目録改訂第7版」（2014年、日本鳥学会）に準拠した。

*2. 選定基準のカテゴリーランクは、以下のとおり。下線は現地調査で確認された種の該当するランクを示す。

I：「文化財保護法」（昭和25年 法律第214号）

特別天然記念物(特天)、天然記念物(天)

II：「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）」（平成4年 法律第75号）

国内希少野生動植物(国内)、国際希少野生動植物(国際)

III：「岩手県希少野生動植物の保護に関する条例」（平成14年3月29日 条例第26号）

指定希少野生動植物(指定)、特定希少野生動植物(特定)

IV：「環境省レッドリスト2020」（2020年、環境省）

絶滅(EX)、野生絶滅(EW)、絶滅危惧 I A 類(CR)、絶滅危惧 I B 類(EN)、絶滅危惧 II 類(VU)、



準絶滅危惧(NT)、情報不足(DD)、絶滅のおそれのある地域個体群(LP)

V：「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物」（2014年、岩手県環境生活部自然保護課）

絶滅(EX)、野生絶滅(EW)、絶滅危惧 I 類(A)、絶滅危惧 II 類(B)、準絶滅危惧(C)、

C ランクに準ずる種(D)、情報不足(DD)

表 6. 7-10(1) 重要種の生態及び確認状況等（一般鳥類）(1)

種名	分布・生態	確認状況・特記事項
<p>ヤマドリ (キジ科)</p> <p>【重要種ランク】 岩手県：D ランク</p>	<p>【形態】赤褐色のキジの仲間で雄の尾の長いものは80cmもあり、横縞がある。雌の尾は24cm位。</p> <p>【分布】キジは平地から低山帯に多いが、ヤマドリはキジの生息圏にもいるが、それより上部の山間地帯に多い。1960年代までは平泉の中尊寺のまわりにも普通に生息したが滅びた。</p> <p>【生息状況】戦前から戦後の狩猟が盛んな時代、岩手はキジ・ヤマドリの宝庫といわれたが昔日の面影はない。キジより飛翔力が強く木の枝にもよく止まる。山林と林道の開発によって、ヤマドリの生息圏の自然は荒廃し、生息数は減っている。</p>	<p>秋季調査時に対象事業実施区域内の改変区域内で1個体が確認された。</p> <p>(現地撮影写真なし)</p>
<p>オンドリ (カモ科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：DD 岩手県：D ランク</p>	<p>【形態】雄の羽色は日本産カモ類中最も色彩に富む、銀杏羽と呼ばれる三列風切羽などが特徴的。</p> <p>【分布】北海道、本州中部以北で繁殖し主として西日本等で越冬するが本県の一部河川や湖沼で冬季生息している。</p> <p>【生息状況】樹洞性のカモ類で溪流畔や平地流河畔の広葉樹林などで繁殖するが、水田地帯などでは社寺林が営巣やねぐらに利用されることがある。ナラ類の種子、水生昆虫類を餌とする。</p>	<p>秋季調査時に対象事業実施区域外で2個体が確認された。</p> <p>(現地撮影写真なし)</p>
<p>バン (クイナ科)</p> <p>【重要種ランク】 岩手県：D ランク</p>	<p>【形態】キジバトよりやや大きく全身はほぼ黒、嘴と額が赤く嘴先端が黄色。下尾筒は白く目立ち尾は短い。</p> <p>【分布】国内では主に夏鳥として各地に飛来するが関東以西では越冬するものも多い。</p> <p>【生息状況】河川、湖沼などや背の高い水草が生える湿地を好み営巣する。イネ科、タデ科など植物質を主食とし小動物も餌とする。クイナ科の他種より多いが、近年減少が顕著で狩猟対象種として不適になりつつある。</p>	<p>秋季調査時に対象事業実施区域外で2個体が確認された。</p> 
<p>オオバン (クイナ科)</p> <p>【重要種ランク】 岩手県：C ランク</p>	<p>【形態】全長39cm。雄、雌同色。全身が灰黒色で嘴と額板が白い。鉛色の足。趾にはひれがある。クークーまたはキュイツ、キュイツと繰り返して鳴く。</p> <p>【分布】岩手県内では渡りの時期に河川や湖沼で少数見られる。2005年以降、気仙川河口(陸前高田市)では越冬する大群(300羽)が毎年観察されるようになった。</p> <p>【生息状況】2005年以降に、岩手県沿岸南部の気仙川河口(陸前高田市)で大群が(300羽)越冬するようになった。2011年3月11日以降は50羽ほどになったが、大震災の影響と思われる。</p>	<p>秋季調査時に対象事業実施区域外で2個体、冬季調査時に対象事業実施区域外で5個体が確認された。</p> 


分布・生態情報の出典：「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物 web 版」(2014年、岩手県)

表 6. 7-10(2) 重要種の生態及び確認状況等（一般鳥類）(2)

種名	分布・生態	確認状況・特記事項
<p>ハリオアマツバメ (アマツバメ科)</p> <p>【重要種ランク】 岩手県：Dランク</p>	<p>【形態】全体が黒褐色で背中央は灰白色。喉、下腹、下尾筒および三列風切2枚は白い。尾は短めで角尾、羽軸が強く先端は針状に突出する。</p> <p>【分布】日本では夏鳥として本州北部に4月頃渡来するほか、他地域を渡りの時期に通過する。ブナ帯や亜高山以上の高い地域で確認できるが、繁殖地の確認はほとんどない。</p> <p>【生息状況】岩手県内では夏期に普通に目撃されるが繁殖確認はない。東北地方の繁殖記録は、白神山地「クマゲラの森」で1994年7月にクマゲラのねぐら木を利用した1例のみ。</p>	<p>秋季調査時に対象事業実施区域外の上空を飛翔する1個体が確認された。</p> 
<p>ミサゴ (ミサゴ科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：NT 岩手県：Bランク</p>	<p>【形態】全長54～64cm 頭部に冠羽があり上面は褐色で下面は白く、飛翔中には白い下面がよく目立つ。</p> <p>【分布】国内では全国に分布。県内では沿岸の海岸や内陸のダム湖などで繁殖。秋期には南へ渡るが、県南では少数が越冬している。</p> <p>【生息状況】沿岸地域に広く生息。沿岸では営巣数は1990年代まで増加していたが、2000年代中頃より減少に転じている。2005年頃から宮古市の閉伊川河口ではウグイの激減により飛来数が激減した。内陸では2000年以降に四十四田ダム、御所湖、錦秋湖、田瀬湖他では、外来魚や淡水魚を餌とした繁殖や生息が確認されている。</p>	<p>夏季調査時に対象事業実施区域外の上空を飛翔する1個体が確認された。</p> <p>(現地撮影写真なし)</p>
<p>ツミ (タカ科)</p> <p>【重要種ランク】 岩手県：Cランク</p>	<p>【形態】雄は体長27cm、雌は30cmで国内最小のタカ類。雄の脇腹はぬめっとした赤褐色、雌腹部は白地に黒い横縞がある。雄、雌とも眉斑が目立たず、翼先端に5本の初列風切が出るのが特徴。</p> <p>【分布】極東アジア中北部の狭い範囲で繁殖し、冬季は一部が国内暖地や東南アジアに渡る。岩手県内では、オオタカ、ハイタカより数が少ないが山地で見られる。</p> <p>【生息状況】1997年葛巻町で営巣確認、盛岡市東部で繁殖記録、その他早池峰山に比較的多く、花巻市豊沢、早坂高原、宮古市、陸前高田市などで目撃例がある。</p>	<p>秋季調査時に対象事業実施区域内の非改変区域内上空を飛翔する1個体が確認された。</p> 


分布・生態情報の出典：「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物 web 版」(2014年、岩手県)

表 6. 7-10(3) 重要種の生態及び確認状況等（一般鳥類）(3)

種名	分布・生態	確認状況・特記事項
<p>ハイタカ (タカ科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：NT 岩手県：C ランク</p>	<p>【形態】雄は体長 32cm、雌は 39cm の小型タカ類。雄は背中が灰色、腹部は赤褐色横斑がある。雌は背中が褐色、腹部は白地にこげ茶の細い横縞がある。雄、雌とも眉斑があり、翼先端に 6 本初列風切が出るのが特徴。</p> <p>【分布】日本では北海道、本州で繁殖する。岩手県内では全県的に低山地からブナ帯で 1 年中見られる。</p> <p>【生息状況】滝沢市、大船渡市、陸前高田市、盛岡市東部などで繁殖記録がある。最近も県内各地の開発現場のアセス調査で繁殖や目撃記録がある。</p>	<p>初夏調査時に対象事業実施区域内の非改変区域内上空を飛翔する 1 個体が確認された。</p> <p>(現地撮影写真なし)</p>
<p>オオタカ (タカ科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：NT 岩手県：B ランク</p>	<p>【形態】雄：全長 50cm、翼開長 106cm、雌：全長 56.5cm、翼開長 131cm。成鳥では上面黒くて下面が白く、胸と腹に横帯が多数ある。</p> <p>【分布】日本では北海道と本州が主な繁殖地になっている。</p> <p>【生息状況】岩手県内では、北上高地と奥羽山脈の平野部から低山帯、丘陵地帯のアカマツ林やカラマツ林の壮齢林地帯に生息していたが近年個体の消失が多い。</p>	<p>夏季調査時に対象事業実施区域外の上空を飛翔する 1 個体が確認された。</p> <p>(現地撮影写真なし)</p>
<p>サシバ (タカ科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：VU 岩手県：B ランク</p>	<p>【形態】全長約雄 47～雌 51 cm、翼開長約 102.5～115 cm。ハシブトガラスくらいの大きさの、翼の長い赤褐色のタカで、胸に暗褐色の太い帯、腹に暗褐色の横縞、風切と尾には横帯がある。「キンミー」と良く鳴く。</p> <p>【分布】日本の東北から九州までの極東の限られた地域で繁殖し、冬季は南西諸島、東南アジア諸国で越冬する。岩手県では夏鳥。雫石町以南で繁殖する。4～5 月の春の渡りの時期には沿岸地域や県北部でも目撃されることがある。</p> <p>【生息状況】台地や丘陵地の谷津田を含む里山が主な繁殖地で、アカマツ、スギに営巣することが多い。まれに山間部の森林地帯で繁殖することもある。木の梢や電柱等にとまり、地面等のカエルやヘビ等を捕える待伏せ探索型の採食様式。</p>	<p>春季調査時に対象事業実施区域外で 1 個体、夏季調査時に対象事業実施区域外で 1 個体が確認された。</p> 


分布・生態情報の出典：「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物 web 版」(2014 年、岩手県)

表 6.7-10(4) 重要種の生態及び確認状況等（一般鳥類）(4)

種名	分布・生態	確認状況・特記事項
<p>ノスリ (タカ科)</p> <p>【重要種ランク】 岩手県：Dランク</p>	<p>【形態】雄：全長 52cm、翼開長 122cm、雌：全長 56.5cm、翼開長 137cm。上面が暗褐色、下面が淡バフ色で、脇と翼下面の翼角部に暗褐色のパッチがある。</p> <p>【分布】日本では北海道から九州まで広く繁殖している。</p> <p>【生息状況】岩手県では北上高地と奥羽山脈の平野部から低山帯にかけて広く分布し、ほぼ全域的に確認されている。周辺に農耕地、草地、牧草地などの開けた場所がある谷沿いの林がある地域が好まれる。冬季には、平地や北方から温暖な地方へ漂行する。農耕地のモグラ・ネズミ類の天敵として重要。</p>	<p>春季調査時に対象事業実施区域外の上空を飛翔する 1 個体、初夏調査時に対象事業実施区域外の上空を飛翔する 1 個体と他 1 個体、夏季調査時に対象事業実施区域外の上空を飛翔する 1 個体と他 2 個体、秋季調査時に対象事業実施区域外の上空を飛翔する 2 個体、対象事業実施区域内の改変区域内上空を飛翔する 4 個体、冬季調査時に対象事業実施区域外で鳴き声 1 例が確認された。</p> 
<p>フクロウ (フクロウ科)</p> <p>【重要種ランク】 岩手県：Dランク</p>	<p>【形態】灰白色の体に黒い縦斑。羽角のない灰色の丸い顔に黒い目。繁殖期に入る晩冬～早春の頃、ゴロスケホッホと聞きなせる独特の太い声で鳴く。晩春～初夏にかけては巣立ち後の幼鳥もやや甲高い声で鳴く。</p> <p>【分布】平地～丘陵地の大径木のある里山や社寺林等に生息する留鳥。県内では最も身近なフクロウ類で、なかでも県央～県南部にかけての北上川沿い低地帯で比較的多いが、近年では営巣地が消失した例もみられる。</p> <p>【生息状況】夜行性で主に農地周辺のネズミ類やモグラ等の小動物、ムクドリ等の小鳥類を捕食する。里山や社寺林、屋敷林の大径木の樹洞で営巣するが、大径木の減少に伴い、巣箱の利用例もある。</p>	<p>早春季調査時に対象事業実施区域外で鳴き声 4 例、秋季調査時に対象事業実施区域内の改変区域内上空を飛翔する 1 個体、冬季調査時に対象事業実施区域外で鳴き声 1 例が確認された。</p> <p>(現地撮影写真なし)</p>

分布・生態情報の出典：「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物 web 版」(2014 年、岩手県)

表 6. 7-10 (5) 重要種の生態及び確認状況等（一般鳥類）(5)

種名	分布・生態	確認状況・特記事項
<p>カワセミ (カワセミ科)</p> <p>【重要種ランク】 岩手県：D ランク</p>	<p>【形態】頭部から背部、尾羽まで光沢のある青緑色、腹部は赤褐色、嘴は頭部とほぼ同長で黒い。</p> <p>【分布】ユーラシア中緯度以南に広く分布し本州以南では留鳥、北海道のものは冬季本州以南に漂行する。</p> <p>【生息状況】採餌に適した小魚の多い浅瀬。営巣場所となる水辺の土手や崖、猛禽類などから避難するためのヨシ原、ヤナギ類オニグルミ等の適度の河畔林がみられる環境にはほとんど生息する。</p>	<p>春季調査時に対象事業実施区域外で1個体、初夏調査時に対象事業実施区域外の上空を飛翔する1個体と他1個体、夏季調査時に対象事業実施区域内の非改変区域内上空を飛翔する1個体、秋季調査時に対象事業実施区域外で1個体、対象事業実施区域内の非改変区域内で1個体が確認された。</p> 
<p>サンショウクイ (サンショウクイ科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：VU 岩手県：C ランク</p>	<p>【形態】体長 20cm、額と喉、腹部が白色、背部が灰黒色で尾の長いきれいな鳥。ヒーリリッ、ヒーリリッと鳴く。</p> <p>【分布】岩手県内では低山地からブナ帯下部の茂った落葉広葉樹林に生息する。沿海州及び本州以南の森林で繁殖し、本土のものは冬季東南アジアに渡る。</p> <p>【生息状況】1980 年以前は県内各地で繁殖が確認されたが、1990 年前後にはかなり減少した。最近は再び岩手県内各地で普通に記録されるようになった。</p>	<p>春季調査時に対象事業実施区域外で1個体、初夏調査時に対象事業実施区域外で1個体、対象事業実施区域内の改変区域内上空を飛翔する1個体、夏季調査時に対象事業実施区域外上空を飛翔する1個体と他1個体が確認された。</p> <p>(現地撮影写真なし)</p>
<p>サンコウチョウ (カササギヒタキ科)</p> <p>【重要種ランク】 岩手県：D ランク</p>	<p>【形態】全長は雄が約 45cm(繁殖期)で、尾羽は中央1対が長く 30cm になる。雌は 17.5cm。アイリングが目立つ。</p> <p>【分布】日本には夏鳥として渡来し本州以南で繁殖する。針、広混交林の薄暗い林を好む。</p> <p>【生息状況】成熟した成鳥を見る機会は少ない。近年目撃例が増えたが、目立つ鳥種でもあるので、実際に個体数が増加しているのかどうかは不明である。</p>	<p>初夏調査時に対象事業実施区域内の改変区域内で2個体が確認された。</p> <p>(現地撮影写真なし)</p>

分布・生態情報の出典：「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物 web 版」(2014 年、岩手県)



図 6.7-11 鳥類(一般鳥類)重要種確認位置図

(3) 鳥類 (猛禽類)

① 定点調査

確認状況は、表 6.7-11 と図 6.7-12 に示す。令和 4 年と令和 5 年で確認された重要な猛禽類は 2 目 3 科 8 種であった。

確認された重要種の生態及び確認状況等は、表 6.7-12 に示す。

表 6.7-11(1) 鳥類 (猛禽類) の重要種一覧 (令和 4 年)

No.	目名	科名	種名*1	確認回数						選定基準*2					
				3月	4月	5月	6月	7月	合計	I	II	III	IV	V	
1	タカ	ミサゴ	ミサゴ	4	1	2	2	0	9	-	-	-	NT	B	
2			タカ	ハチクマ	0	0	1	2	2	5	-	-	-	NT	C
3				ツミ	0	1	0	0	0	1	-	-	-		C
4				ハイタカ	2	4	0	1	0	7	-	-	-	NT	C
5				サシバ	0	22	17	19	8	66	-	-	-	VU	B
6				ノスリ	55	26	25	34	8	148	-	-	-		D
7	ハヤブサ	ハヤブサ	ハヤブサ	0	1	1	0	0	2	-	国内	-	VU	A	
合計	2 目	3 科	7 種	61 回 3 種	55 回 6 種	46 回 5 種	58 回 5 種	18 回 3 種	238 回 7 種	0 種	1 種	0 種	5 種	7 種	

表 6.7-11(2) 鳥類 (猛禽類) の重要種一覧 (令和 5 年)

No.	目名	科名	種名*1	確認回数						選定基準*2					
				3月	4月	5月	6月	7月	合計	I	II	III	IV	V	
1	タカ	ミサゴ	ミサゴ	5	7	4	1	0	17	-	-	-	NT	B	
2			タカ	ハチクマ	0	0	1	0	2	3	-	-	-	NT	C
3				ハイタカ	3	1	0	0	0	4	-	-	-	NT	C
4				オオタカ	0	2	0	0	0	2	-	-	-	NT	B
5				サシバ	0	23	15	16	35	89	-	-	-	VU	B
6				ノスリ	52	24	31	1	4	112	-	-	-	-	D
7	ハヤブサ	ハヤブサ	ハヤブサ	1	2	1	0	0	4	-	国内	-	VU	A	
合計	2 目	3 科	7 種	61 回 4 種	59 回 6 種	52 回 5 種	18 回 3 種	41 回 3 種	231 回 7 種	0 種	1 種	0 種	6 種	7 種	

*1. 種名等は「日本鳥類目録改訂第 7 版」(2014 年、日本鳥学会)に準拠した。

*2. 選定基準のカテゴリーランクは、以下のとおり。下線は現地調査で確認された種の該当するランクを示す。

I : 「文化財保護法」(昭和 25 年 法律第 214 号)

特別天然記念物(特天)、天然記念物(天)

II : 「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律(種の保存法)」(平成 4 年 法律第 75 号)

国内希少野生動植物(国内)、国際希少野生動植物(国際)

III : 「岩手県希少野生動植物の保護に関する条例」(平成 14 年 3 月 29 日 条例第 26 号)

指定希少野生動植物(指定)、特定希少野生動植物(特定)

IV : 「環境省レッドリスト 2020」(2020 年、環境省)

絶滅(EX)、野生絶滅(EW)、絶滅危惧 I A 類(CR)、絶滅危惧 I B 類(EN)、絶滅危惧 II 類(VU)、

準絶滅危惧(NT)、情報不足(DD)、絶滅のおそれのある地域個体群(LP)

V : 「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物」(2014 年、岩手県環境生活部自然保護課)

絶滅(EX)、野生絶滅(EW)、絶滅危惧 I 類(A)、絶滅危惧 II 類(B)、準絶滅危惧(C)、

C ランクに準ずる種(D)、情報不足(DD)

表 6.7-12(1) 重要種の生態及び確認状況等 (猛禽類) (1)

種名	分布・生態	確認状況・特記事項
<p>ミサゴ (ミサゴ科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：NT 岩手県：B ランク</p>	<p>【形態】全長 54～64 cm 頭部に冠羽があり上面は褐色で下面は白く、飛翔中には白い下面がよく目立つ。</p> <p>【分布】国内では全国に分布。県内では沿岸の海岸や内陸のダム湖などで繁殖。秋期には南へ渡るが、県南では少数が越冬している。</p> <p>【生息状況】沿岸地域に広く生息。沿岸では営巣数は1990年代まで増加していたが、2000年代中頃より減少に転じている。2005年頃から宮古市の閉伊川河口ではウグイの激減により飛来数が激減した。内陸では2000年以降に四十四田ダム、御所湖、錦秋湖、田瀬湖他では、外来魚や淡水魚を餌とした繁殖や生息が確認されている。</p>	<p>令和4年3月に4回、4月に1回、5月に2回、6月に2回、令和5年3月に5回、4月に7回、5月に4回、6月に1回、対象事業実施区域を含め広範囲に飛翔が確認された。なお、調査範囲外の南の遠方から北の遠方への餌運びが複数回確認された。</p> <p>本種の繁殖は確認されなかった。</p> 
<p>ハチクマ (タカ科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：NT 岩手県：C ランク</p>	<p>【形態】雄：全長 57cm、翼開長 121cm、雌：全長 60.5cm、翼開長 135cm。体下面の羽色により、淡色形、中間形、暗色形に分けられ多様なパターン羽色を有する。</p> <p>【分布】極東やインド、東南アジア地域に広く分布する。日本では北海道から九州まで広く繁殖している。</p> <p>【生息状況】岩手県内では、北上高地と奥羽山脈の低山帯の一部に局在的に、生息が確認されているがあまり多くなく、消失地域もある。</p>	<p>令和4年5月に1回、6月に2回、7月に2回、令和5年5月に1回、7月に2回、対象事業実施区域を含め広範囲に飛翔が確認された。</p> <p>本種の繁殖は確認されなかった。</p> 
<p>ツミ (タカ科)</p> <p>【重要種ランク】 岩手県：C ランク</p>	<p>【形態】雄は体長 27cm、雌は 30cm で国内最小のタカ類。雄の脇腹はぬめっとした赤褐色、雌腹部は白地に黒い横縞がある。雄、雌とも眉斑が目立たず、翼先端に5本の初列風切が出るのが特徴。</p> <p>【分布】極東アジア中北部の狭い範囲で繁殖し、冬季は一部が国内暖地や東南アジアに渡る。岩手県内では、オオタカ、ハイタカより数が少ないが山地で見られる。</p> <p>【生息状況】1997年葛巻町で営巣確認、盛岡市東部で繁殖記録、その他早池峰山に比較的多く、花巻市豊沢、早坂高原、宮古市、陸前高田市などで目撃例がある。</p>	<p>令和4年4月に1回、対象事業実施区域外で飛翔が確認された。</p> <p>本種の繁殖は確認されなかった。</p> <p>(現地撮影写真なし)</p>

分布・生態情報の出典：「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物 web 版」(2014年、岩手県)

表 6.7-12(2) 重要種の生態及び確認状況等（猛禽類）(2)

種名	分布・生態	確認状況・特記事項
<p>ハイタカ (タカ科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：NT 岩手県：Cランク</p>	<p>【形態】雄は体長 32cm、雌は 39cm の小型タカ類。雄は背中が灰色、腹部は赤褐色横斑がある。雌は背中が褐色、腹部は白地にこげ茶の細かい横縞がある。雄、雌とも眉斑があり、翼先端に 6 本初列風切が出るのが特徴。</p> <p>【分布】日本では北海道、本州で繁殖する。岩手県内では全県的に低山地からブナ帯で 1 年中見られる。</p> <p>【生息状況】滝沢市、大船渡市、陸前高田市、盛岡市東部などで繁殖記録がある。最近も県内各地の開発現場のアセス調査で繁殖や目撃記録がある。</p>	<p>令和 4 年 3 月に 2 回、4 月に 4 回、6 月に 1 回、令和 5 年 3 月に 3 回、4 月に 1 回、対象事業実施区域を含め広範囲に飛翔が確認された。</p> <p>本種の繁殖は確認されなかった。</p> 
<p>オオタカ (タカ科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：NT 岩手県：Bランク</p>	<p>【形態】雄：全長 50cm、翼開長 106cm、雌：全長 56.5cm、翼開長 131cm。成鳥では上面黒くて下面が白く、胸と腹に横帯が多数ある。</p> <p>【分布】ユーラシア大陸と北アメリカの北部に広く分布する。日本では北海道と本州が主な繁殖地になっている。</p> <p>【生息状況】岩手県内では、北上高地と奥羽山脈の平野部から低山帯、丘陵地帯のアカマツ林やカラマツ林の壮齢林地帯に生息していたが近年個体の消失が多い。</p>	<p>令和 5 年 4 月に 2 回、対象事業実施区域外で飛翔が確認された。</p> <p>本種の繁殖は確認されなかった。</p> 
<p>サシバ (タカ科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：VU 岩手県：Bランク</p>	<p>【形態】全長約雄 47～雌 51 cm、翼開長約 102.5～115 cm。ハシブトガラスくらいの大きさの、翼の長い赤褐色のタカで、胸に暗褐色の太い帯、腹に暗褐色の横縞、風切と尾には横帯がある。「キンミー」と良く鳴く。</p> <p>【分布】日本の東北から九州までの極東の限られた地域で繁殖し、冬季は南西諸島、東南アジア諸国で越冬する。岩手県では夏鳥。雫石町以南で繁殖する。4～5 月の春の渡りの時期には沿岸地域や県北部でも目撃されることがある。</p> <p>【生息状況】台地や丘陵地の谷津田を含む里山が主な繁殖地で、アカマツ、スギに営巣することが多い。まれに山間部の森林地帯で繁殖することもある。木の梢や電柱等にとまり、地面等のカエルやヘビ等を捕える待伏せ探索型の採食様式。</p>	<p>令和 4 年 4 月に 22 回、5 月に 17 回、6 月に 19 回、7 月に 8 回、令和 5 年 4 月に 23 回、5 月に 15 回、6 月に 16 回、7 月に 35 回、対象事業実施区域を含め広範囲に飛翔が確認された。</p> <p>対象事業実施区域外の 1 箇所ですべて令和 4 年と令和 5 年に繁殖が確認された。</p> 

分布・生態情報の出典：「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物 web 版」(2014 年、岩手県)

表 6.7-12(3) 重要種の生態及び確認状況等 (猛禽類) (3)

種名	分布・生態	確認状況・特記事項
<p>ノスリ (タカ科)</p> <p>【重要種ランク】 岩手県：D ランク</p>	<p>【形態】雄：全長 52cm、翼開長 122cm、雌：全長 56.5cm、翼開長 137cm。上面が暗褐色、下面が淡バフ色で、脇と翼下面の翼角部に暗褐色のパッチがある。</p> <p>【分布】日本では北海道から九州まで広く繁殖している。</p> <p>【生息状況】岩手県では北上高地と奥羽山脈の平野部から低山帯にかけて広く分布し、ほぼ全域的に確認されている。周辺に農耕地、草地、牧草地などの開けた場所がある谷沿いの林がある地域が好まれる。冬季には、平地や北方から温暖な地方へ漂行する。農耕地のモグラ・ネズミ類の天敵として重要。</p>	<p>令和 4 年 3 月に 55 回、4 月に 26 回、5 月に 25 回、6 月に 34 回、7 月に 8 回、令和 5 年 3 月に 52 回、4 月に 24 回、5 月に 31 回、6 月に 1 回、7 月に 4 回、対象事業実施区域を含め広範囲に飛翔が確認された。</p> <p>令和 4 年の繁殖は確認されなかったが、令和 5 年は対象事業実施区域外の 1 箇所繁殖途中失敗を確認した。</p> 
<p>ハヤブサ (ハヤブサ科)</p> <p>【重要種ランク】 種の保存法：国内環境省：VU 岩手県：A ランク</p>	<p>【形態】全長 38～51 cm 頭部は黒く目の下にひげ状の斑紋があり、上面は青灰色、腹部は白く横斑がある。幼鳥は全身褐色で腹部に縦斑がある。</p> <p>【分布】全国の主に海岸に生息。都市ではエサをドバトに依存し、ビル等の人工物での繁殖記録がある。県内では、主に海岸の崖で繁殖し、周年生息する。内陸の川沿いの崖でも少数が繁殖する。冬季には北方の亜種が渡来する。</p> <p>【生息状況】沿岸部では久慈市から陸前高田市にかけて繁殖地がある。内陸では 2000 年代に県北、県央、県南の河川の崖で繁殖していることが確認された。最近、繁殖率は低い。2012 年、沿岸では産卵が約 1 カ月遅れた。</p>	<p>令和 4 年 4 月に 1 回、5 月に 1 回、令和 5 年 3 月に 1 回、4 月に 2 回、5 月に 1 回、対象事業実施区域を含め広範囲に飛翔が確認された。</p> <p>本種の繁殖は確認されなかった。</p> 

分布・生態情報の出典：「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物 web 版」(2014 年、岩手県)



凡例

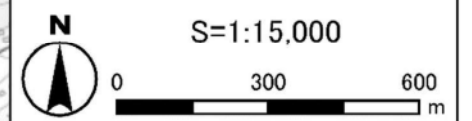


図 6.7-12(1) 重要な猛禽類確認位置図
(ミサゴ：令和4年)



凡例

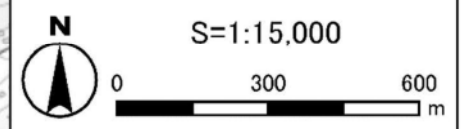


図 6. 7-12(2) 重要な猛禽類確認位置図
(ミサゴ：令和 5 年)



凡例

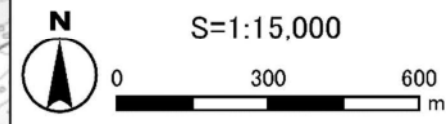


図 6. 7-12(3) 重要な猛禽類確認位置図
(ハチクマ：令和 4 年)



凡例

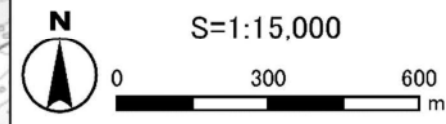


図 6.7-12(4) 重要な猛禽類確認位置図
(ハチクマ：令和5年)



環境保全の観点から、重要種の確認位置は非公開とする。

凡例

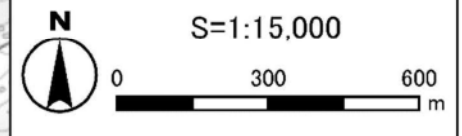


図 6.7-12(5) 重要な猛禽類確認位置図
(ツミ：令和4年)



凡例

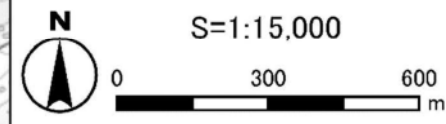


図 6.7-12(6) 重要な猛禽類確認位置図
(ハイタカ：令和4年)



凡例

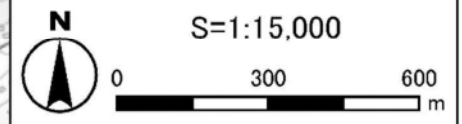


図 6.7-12(7) 重要な猛禽類確認位置図
(ハイタカ：令和5年)



凡例

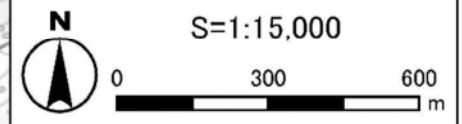


図 6.7-12(8) 重要な猛禽類確認位置図
(オオタカ：令和5年)



凡例

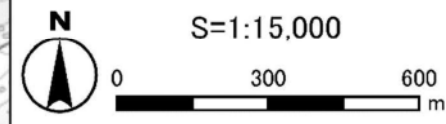


図 6.7-12(9) 重要な猛禽類確認位置図
(サシバ：令和4年)



凡例

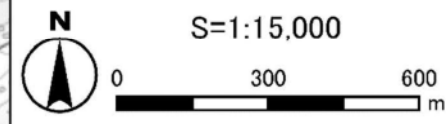


図6.7-12(10) 重要な猛禽類確認位置図
(サシバ：令和5年)



凡例

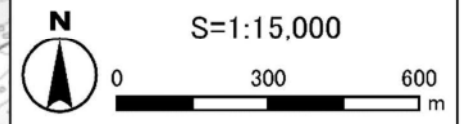


図6.7-12(11) 重要な猛禽類確認位置図
(ノスリ：令和4年)



凡例

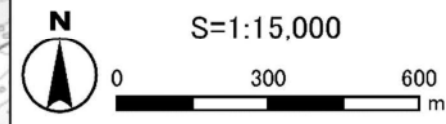


図6.7-12(12) 重要な猛禽類確認位置図
(ノスリ：令和5年)



凡例

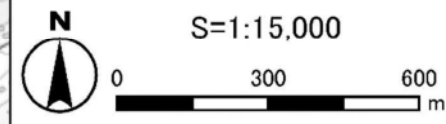


図6.7-12(13) 重要な猛禽類確認位置図
(ハヤブサ：令和4年)

② 営巣地調査

令和4年と令和5年の確認状況は、図6.7-13に示す。サシバの営巣地2箇所とノスリの古巣（繁殖途中失敗）が確認された。

サシバは、令和4年に対象事業実施区域外のスギに繁殖巣が確認され、最低1個体の巣立ちが確認された。また、令和5年には、令和4年の繁殖巣の南西約60mのアカマツに繁殖巣が確認され、最低2個体の巣立ちが確認された。

ノスリは、令和5年に抱卵行動まで確認されたが、その後の確認がなく、営巣地調査において繁殖途中失敗が確認された。なお、確認位置や古巣の状況から、令和4年に「利用種不明」とした巣と同じであると考えられた。



図 6.7-13 営巣木確認位置図

(4) 爬虫類

確認状況は、表 6.7-13 に示す。1 目 3 科 5 種を確認し、重要な爬虫類の確認はなかった。

表 6.7-13 爬虫類の確認種一覧

No.	目名	科名	種名 ^{*1}	調査時季					確認形態
				早春	春季	初夏	夏季	秋季	
1	有鱗	カナヘビ	ニホンカナヘビ	○	○	○	○	○	成体、幼体
2		ナミヘビ	シマヘビ	○		○	○	○	成体、幼体
3			アオダイショウ	○	○			○	成体
4			ジムグリ	○				○	成体、幼体
5		クサリヘビ	ニホンマムシ					○	成体
合計	1 目	3 科	5 種	4 種	2 種	2 種	2 種	5 種	-

*1. 種名等は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト 令和4年度生物リスト」(令和4年、国土交通省水情報国土データ管理センター)に準拠した。

(5) 両生類

確認状況は、表 6.7-14、表 6.7-15 と図 6.7-14 に示す。全体で 2 目 5 科 9 種を確認し、そのうち重要な両生類は 2 目 3 科 5 種であった。

確認された重要種の生態及び確認状況等は、表 6.7-16 に示す。

表 6.7-14 両生類の確認種一覧

No.	目名	科名	種名 ^{*1}	調査時季					確認形態	
				早春	春季	初夏	夏季	秋季		
1	有尾	サンショウウオ	トウホクサンショウウオ	○					卵のう、成体、死体	
2			クロサンショウウオ	○	○				卵のう	
-			サンショウウオ属 ^{*2}		○	○	○		幼生	
3		イモリ	アカハライモリ		○		○		成体	
4	無尾	アマガエル	ニホンアマガエル	○	○	○	○	○	幼生、幼体、成体、鳴き声	
5		アカガエル	ニホンアカガエル	○	○	○	○	○	卵塊、幼生、幼体、成体	
6			ヤマアカガエル				○	○	成体	
7			トウキョウダルマガエル		○	○	○	○	幼体、成体、鳴き声	
8			ウシガエル	○	○	○	○	○	幼生、成体、鳴き声	
9			アオガエル	シュレーゲルアオガエル	○	○				成体、鳴き声
合計		2 目	5 科	9 種	6 種	7 種	5 種	7 種	5 種	-

*1. 種名等は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト 令和4年度生物リスト」(令和4年、国土交通省水情報国土データ管理センター)に準拠した。

*2. サンショウウオ属は形態、分布状況からトウホクサンショウウオかクロサンショウウオのいずれかである。幼生のため、種を特定するには至らなかった。同属の種が確認されているため、種数には含めていない。

注) は重要種を示す。

表 6.7-15 両生類の重要種一覧

No.	目名	科名	種名*1	調査時季					選定基準*2				
				早春	春季	初夏	夏季	秋季	I	II	III	IV	V
1	有尾	サンショウウオ	トウホクサンショウウオ	○								NT	C
2			クロサンショウウオ	○	○							NT	C
-			サンショウウオ属*3		○	○	○						NT
3		イモリ	アカハライモリ		○		○					NT	
4	無尾	アカガエル	ニホンアカガエル	○	○	○	○	○					C
5			トウキョウダルマガエル		○	○	○	○					NT
合計	2目	3科	5種	3種	5種	3種	4種	2種	0種	0種	0種	5種	5種

*1. 種名等は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト 令和4年度生物リスト」(令和4年、国土交通省水情報国土データ管理センター)に準拠したが、一部他の文献を参考にした。

*2. 選定基準のカテゴリーランクは、以下のとおり。下線は現地調査で確認された種の該当するランクを示す。

I : 「文化財保護法」(昭和25年 法律第214号)

特別天然記念物(特天)、天然記念物(天)

II : 「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律(種の保存法)」(平成4年 法律第75号)
国内希少野生動植物(国内)、国際希少野生動植物(国際)


III : 「岩手県希少野生動植物の保護に関する条例」(平成14年3月29日 条例第26号)
指定希少野生動植物(指定)、特定希少野生動植物(特定)

IV : 「環境省レッドリスト2020」(2020年、環境省)
絶滅(EX)、野生絶滅(EW)、絶滅危惧IA類(CR)、絶滅危惧IB類(EN)、絶滅危惧II類(VU)、
準絶滅危惧(NT)、情報不足(DD)、絶滅のおそれのある地域個体群(LP)

V : 「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物」(2014年、岩手県環境生活部自然保護課)
絶滅(EX)、野生絶滅(EW)、絶滅危惧I類(A)、絶滅危惧II類(B)、準絶滅危惧(C)、
Cランクに準ずる種(D)、情報不足(DD)



*3. サンショウウオ属は形態、分布状況からトウホクサンショウウオかクロサンショウウオのいずれかである。幼生のため、種を特定するには至らなかった。同属の種が確認されているため種数には含めていない。

表 6.7-16(1) 重要種の生態及び確認状況等（両生類）(1)

種名	分布・生態	確認状況・特記事項
<p>トウホクサンショウウオ (サンショウウオ科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：NT 岩手県：Cランク</p>	<p>【形態】体の背面は黒褐色または暗褐色で、体側には淡色の斑点が見られる。腹側は灰白色で微小な褐色の斑点がある。全長9～14cm。卵のうは透明で、長さ10cm前後のバナナ状をしている。近縁のクロサンショウウオとは混生する場所もあるが、本種は比較的体が小さく華やかな感じがするのに対し、クロサンショウウオは体が太った感じで、全身黒の単色に見える。卵のうは明らかに異なるので区別できる。</p> <p>【分布】県内では山麓の平地から標高数100mの山地の林床部、沢沿いや湿地帯等全域に広く分布している。北上高地では1200m付近でも生息が確認されている。特に、平地での生息環境の悪化による生息数の減少が目立つ。新潟県、群馬・栃木両県の北部と東北地方に広く分布する。</p> <p>【生息状況】成体は山地の林床部の落葉や石の下などで生息し、ミミズや節足動物を捕食している。産卵は細い溪流のよどみ、湧水の流入している浅いため池や沼、湿地の池塘、側溝、山地の水溜りなどで行われ、水中の枯れ枝等に1対ずつ産み付けられる。孵化した幼生は鰓を持ち水中生活をする。餌は水生昆虫などを食するが、共食いもする。生息環境としては産卵場所となる水溜りと周囲に成体の生息する広葉樹林が必要である。</p>	<p>早春季調査時に対象対象事業実施区域外で卵のう96対、対象事業実施区域内の非改変区域内で卵のう9対、死骸1個体、改変区域内で成体1個体、卵のう18対が確認された。</p> 

分布・生態情報の出典：「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物 web 版」(2014年、岩手県)

表 6.7-16(2) 重要種の生態及び確認状況等（両生類）(2)

種名	分布・生態	確認状況・特記事項
<p>クロサンショウウオ （サンショウウオ科）</p> <p>【重要種ランク】 環境省：NT 岩手県：Cランク</p>	<p>【形態】体の背面は暗褐色から青みを帯びた黒褐色。腹面は灰色か暗黄褐色。全長は12～18cm。近縁のトウホクサンショウウオより一見して全身は黒の単色で、体がやや幅広く大きく見える（形態での区別は難しい）。卵のうは、乳白色のアケビ状をしており水中の枯れ枝などに1対ずつ産み付けられる。</p> <p>【分布】県内では、西部の奥羽山脈沿いに平地から高山帯（八幡平、真昼岳で確認）まで分布する。一関市（西部）、平泉町、西和賀町、北上市、雫石町、八幡平市、一戸町に分布。北上高地から沿岸部にかけては生息が確認されず分布していないようである。東北地方、北関東、北陸、佐渡に分布。</p> <p>【生息状況】成体は森林の林床部の落葉、倒木、岩の下などに潜んでおり、昆虫、クモ、ミミズなどを捕食する。産卵は各地の融雪期とほぼ一致し、池や沼、沢のよどみなどの止水域に群をなして産卵する。幼生は秋の頃、幼体となり陸上生活にはいるが、幼生のまま越冬するものもある。生息環境としては、産卵場となる水辺と森林が隣接していることが必要である。県北部ではため池の水質汚濁のため産卵できなくなった池も見られた。</p>	<p>早春季調査時に対象事業実施区域外で卵のう約390対、対象事業実施区域内の非改変区域内で卵のう9対、改変区域内で卵のう約140対、春季調査時に対象事業実施区域内の改変区域内で卵のう1対が確認された。</p> 
<p>サンショウウオ属 （サンショウウオ科）</p> <p>トウホクサンショウウオ クロサンショウウオ</p> <p>【重要種ランク】 環境省：NT 岩手県：Cランク</p>	<p>トウホクサンショウウオ、クロサンショウウオのとおり。</p>	<p>本種は、トウホクサンショウウオまたはクロサンショウウオに該当するものと考えられる。</p> <p>春季調査時に対象事業実施区域外で21個体、対象事業実施区域内の非改変区域内で20個体、改変区域内で60個体、初夏調査時に対象事業実施区域外で19個体、対象事業実施区域内の改変区域内で7個体、夏季調査時に対象事業実施区域外で1個体、対象事業実施区域内の改変区域内で6個体が確認された。確認状況は全て幼生であった。</p> 


分布・生態情報の出典：「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物 web 版」（2014年、岩手県）

表 6.7-16(3) 重要種の生態及び確認状況等（両生類）(3)

種名	分布・生態	確認状況・特記事項
<p>アカハライモリ (イモリ科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：NT</p>	<p>【形態】全長 70～140mm。鋤骨歯列は深い逆V字型で、四肢は長く、尾は極度に側偏する。背面は黒褐色で、腹面は赤色に黒色の斑紋がある。雌雄多型が著しく、オスは尾が短く先端は糸状をなし、青白色の婚姻色を生じる。オスの総排出腔開口部は膨大する。</p> <p>【分布】本州及び四国、九州地方の低地から山地に分布。</p> <p>【生息状況】水田、池、溪流、溝などで生活する。求愛行動（体内受精）は4～7月と秋に行われ、どちらの精子も授精能力がある。卵は一粒ずつ、水草などに産み付けられる。幼生は水中生活を送ったあと、年内に変態するのが普通。その後は陸上で生活し、3歳で性的成熟して、水中に留まるようになると考えられている。各地で遺伝的分化が進んでおり、とくに関東・東北地方産は他地域と大きく異なる。強い神経毒をもつが、鳥類、ウシガエル、マムシが天敵として知られる。</p>	<p>春季調査時に対象事業実施区域外で成体 6 個体、夏季調査時に対象事業実施区域外で 1 個体が確認された。</p> 
<p>ニホンアカガエル (アカガエル科)</p> <p>【重要種ランク】 岩手県：Cランク</p>	<p>【形態】体の背面は赤褐色から茶褐色、左右の眼から後ろに伸びる背側線はまっすぐで折れ曲がらない。背面体側には黒っぽい模様が出るが、腹面は白色または淡黄白色である。体長は 3.5～7.5cm。近縁のヤマアカガエルは、背側線が鼓膜の後ろで外側に折れ曲がっていること、多くは下顎の縁や腹面に黒斑が見られることで区別できる。本種の幼生は 3～4cm で背面中央部に 1 対 2 個の黒色斑紋が見られる。混在するヤマアカガエルの幼生とは斑紋の有無で区別できる。</p> <p>【分布】一関市、陸前高田市、平泉町、奥州市(前沢区)。盛岡市での坂本氏による生息確認があるが、現在は前沢区以北での生息確認はない。岩手県は太平洋側における分布の北限である。</p> <p>【生息状況】本種は主に平地や丘陵地の水田や湿地に生息し、早春に水田や湿地の水溜りに産卵する。産卵期に水の溜まっている湿地や湛水水田は非常に重要な産卵場所になっている。平泉以北での生息数は非常に少なく減少傾向が目立つ。</p>	<p>早春季調査時に対象事業実施区域外で成体 1 個体、幼生約 3,800 個体、卵塊 4、対象事業実施区域内の非改変区域内で成体 2 個体、改変区域内で卵塊 1、春季調査時に対象事業実施区域外で成体 1 個体、幼体 1 個体、対象事業実施区域内の非改変区域内で成体 3 個体、初夏調査時に対象事業実施区域外で成体 13 個体、夏季調査時に対象事業実施区域外で成体 16 個体、幼体 1 個体、対象事業実施区域内の改変区域内で成体 1 個体、幼体 1 個体、秋季調査時に対象事業実施区域外で成体 9 個体、対象事業実施区域内の非改変区域内で成体 2 個体が確認された。</p> 

分布・生態情報の出典：「レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生動物-」（2015年、環境省）
「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物 web 版」（2014年、岩手県）

表 6.7-16(4) 重要種の生態及び確認状況等（両生類）(4)

種名	分布・生態	確認状況・特記事項
<p>トウキョウダルマガエル (アカガエル科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：NT 岩手県：D ランク</p>	<p>【形態】背面の体色は緑色から茶褐色まで変化があり、背面には、明瞭な緑色や黄白色の背中線と背側線が見られる。背面には黒や茶褐色の斑紋があり、それぞれ独立し、重なり合わないことが多い。体長は 4～8cm。近縁種のトノサマガエルと似た色彩や模様であるが、斑紋がやや円形で重なり合わないことが多く、四肢がやや短いことなどが形態上の区別点である。</p> <p>【分布】県内では、北上川水系沿い標高の低い水田地帯を中心に分布する。分布のおおよその境界線は、北は岩手町、西側は北上市、東側は遠野市、一関市(千厩町)付近である。沿岸部では生息が確認されていないことから分布していないと予測される。本県が分布の北限である。関東平野、仙台平野、新潟県と長野県の一部、北海道の一部(人為移入)に分布。</p> <p>【生息状況】県内の大規模水田地帯を中心に生息しており、県南部は生息数が多いが、滝沢市以北では少なくなる。水田地帯のカエルの減少傾向が見られるが、特にも圃場整備後の水田地帯では減少傾向が目立つ。</p>	<p>春季調査時に対象事業実施区域外で成体 9 個体、鳴き声 1 個体、初夏調査時に対象事業実施区域外で成体 10 個体、幼体 20 個体、鳴き声 4 個体、夏季調査時に対象事業実施区域外で成体 1 個体、幼体 18 個体、秋季調査時に対象事業実施区域外で成体 4 個体、鳴き声 1 個体、対象事業実施区域内の改変区域内で鳴き声 1 個体が確認された。</p> 

分布・生態情報の出典：「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物 web 版」(2014 年、岩手県)



図 6.7-14(1) 両生類重要種確認位置図(全季)



図 6.7-14(2) 両生類重要種確認位置図(早春季)



図 6.7-14(3) 両生類重要種確認位置図(春季)



図 6.7-14(4) 両生類重要種確認位置図(初夏季)



図 6.7-14(5) 両生類重要種確認位置図(夏季)



図 6.7-14(6) 両生類重要種確認位置図(秋季)

(6) 昆虫類

確認状況は、表 6.7-17、表 6.7-18 と図 6.7-15 に示す。全体で 16 目 204 科 845 種を確認し、そのうち重要な昆虫類は 5 目 12 科 15 種であった。

確認された重要種の生態及び確認状況等は、表 6.7-19 に示す。

なお、確認種目録は資料編に示す。

表 6.7-17 昆虫類の確認種数

No.	目名*1	調査時季										合計	
		早春季		春季		初夏季		夏季		秋季			
1	カゲロウ(蜻蛉)	-	-	-	-	-	-	1科	1種	-	-	1科	1種
2	トンボ(蜻蛉)	-	-	8科	20種	8科	27種	8科	17種	2科	5種	9科	37種
3	カマキリ(螳螂)	-	-	-	-	-	-	1科	1種	1科	2種	1科	2種
4	ハサミムシ(革翅)	-	-	-	-	-	-	-	-	1科	1種	1科	1種
5	カワゲラ(セキ翅)	-	-	2科	2種	1科	1種	-	-	-	-	2科	2種
6	バッタ(直翅)	-	-	4科	6種	9科	15種	11科	18種	11科	23種	12科	37種
7	チャタテムシ	-	-	1科	1種	-	-	-	-	1科	1種	1科	1種
8	カメムシ(半翅)	1科	1種	22科	49種	17科	44種	24科	45種	19科	50種	34科	120種
9	ヘビトンボ	-	-	1科	1種	-	-	-	-	-	-	1科	1種
10	アミメカゲロウ(脈翅)	-	-	1科	2種	3科	4種	-	-	1科	1種	4科	6種
11	シリアゲムシ(長翅)	-	-	1科	2種	-	-	1科	1種	1科	1種	1科	2種
12	トビケラ(毛翅)	-	-	6科	7種	2科	3種	5科	7種	-	-	9科	11種
13	チョウ(鱗翅)	5科	8種	25科	99種	22科	87種	21科	68種	10科	31種	31科	209種
14	ハエ(双翅)	1科	1種	25科	45種	17科	31種	14科	20種	21科	54種	35科	100種
15	コウチュウ(鞘翅)	1科	1種	26科	102種	30科	123種	18科	70種	18科	48種	42科	249種
16	ハチ(膜翅)	-	-	14科	38種	13科	32種	8科	29種	7科	20種	20科	66種
合計	16目	8科	11種	136科	374種	122科	367種	112科	277種	93科	237種	204科	845種

*1. 目名は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト 令和4年度生物リスト」(令和4年、国土交通省水情報 国土データ管理センター)に準拠したが、一部他の文献を参考にした。

注) 各調査時季の種数は、同一の分類群に属する種などが確認されていないならば、1種として計上した。

表 6.7-18 昆虫類の重要種一覧

No.	目名	科名	種名*1	調査時季					選定基準*2						
				早春	春季	初夏	夏季	秋季	I	II	III	IV	V		
1	トンボ(蜻蛉)	イトトンボ	モートンイトトンボ		○	○							NT	D	
2		ヤンマ	サラサヤンマ		○									D	
3		サナエトンボ	ヤマサナエ		○	○									D
4	カメムシ(半翅)	コオイムシ	コオイムシ		○									NT	
5	チョウ(鱗翅)	セセリチョウ	ギンイチモンジセセリ		○									NT	D
6			ミヤマチャバネセセリ		○										C
7			スジグロチャバネセセリ 北海道・本州・九州亜種				○								NT
8		タテハチョウ	ウラギンスジヒョウモン			○	○								VU
9			オオムラサキ			○			○						NT
10	コウチュウ (鞘翅)	オサムシ	チビアオゴミムシ			○		○						EN	
11		ガムシ	コガムシ		○									DD	
12		ホタル	ゲンジボタル			○								D	
13		ハムシ	キンイロネクイハムシ					○						NT	B
14	ハチ(膜翅)	スズメバチ	モンズズメバチ		○									DD	
15		ミツバチ	クロマルハナバチ						○					NT	
合計	5 目	12 科	15 種	0 種	9 種	6 種	2 種	3 種	0 種	0 種	0 種	11 種	8 種		

*1. 種名等は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト 令和4年度生物リスト」(令和4年、国土交通省水情報国土データ管理センター)に準拠したが、一部他の文献を参考にした。

*2. 選定基準のカテゴリーランクは、以下のとおり。下線は現地調査で確認された種の該当するランクを示す。

I : 「文化財保護法」(昭和25年 法律第214号)

特別天然記念物(特天)、天然記念物(天)

II : 「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律(種の保存法)」(平成4年 法律第75号)

国内希少野生動植物(国内)、国際希少野生動植物(国際)

III : 「岩手県希少野生動植物の保護に関する条例」(平成14年3月29日 条例第26号)

指定希少野生動植物(指定)、特定希少野生動植物(特定)

IV : 「環境省レッドリスト2020」(2020年、環境省)

絶滅(EX)、野生絶滅(EW)、絶滅危惧 I A 類(CR)、絶滅危惧 I B 類(EN)、絶滅危惧 II 類(VU)、

準絶滅危惧(NT)、情報不足(DD)、絶滅のおそれのある地域個体群(LP)

V : 「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物」(2014年、岩手県環境生活部自然保護課)

絶滅(EX)、野生絶滅(EW)、絶滅危惧 I 類(A)、絶滅危惧 II 類(B)、準絶滅危惧(C)、

C ランクに準ずる種(D)、情報不足(DD)

表 6.7-19(1) 重要種の生態及び確認状況等（昆虫類）(1)

種名	分布・生態	確認状況・特記事項
<p>モートンイトトンボ (イトトンボ科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：NT 岩手県：D ランク</p>	<p>【形態】成虫は腹長 17～26mm、後翅長 11～18mm。小型のイトトンボで、成熟雄の頭部には L 字状の斑紋があり、腹端部は橙色となる。雌は未熟時には全身橙色であるが、成熟すると緑色となる。</p> <p>【分布】国内では 本州から九州まで分布する。</p> <p>【生息状況】1 年 1 世代で、平地から丘陵地にかけての湿地、水田など、水深が浅く湿性植物の繁茂した環境に発生する。成虫は春季から夏季にかけて出現する。県内の生息地はまだ残っているが、全国的には減少しており、県単位で絶滅したと考えられるところもある。</p>	<p>春季調査時に対象事業実施区域外で 5 個体、初夏調査時に対象事業実施区域外で 7 個体が確認された。</p> 
<p>サラサヤンマ (ヤンマ科)</p> <p>【重要種ランク】 岩手県：D ランク</p>	<p>【形態】成虫は腹長 41～49mm、後翅長 35～41mm。小型のヤンマで、雄は成熟すると腹部背面の斑紋が緑色になり、雌の斑紋は黄色である。</p> <p>【分布】国内では北海道から屋久島まで分布し、海外では朝鮮半島から知られる。</p> <p>【生息状況】1～3 年 1 世代で、平地から丘陵地にかけての樹林に囲まれた湿地などに生息する。成虫は春季から初夏にかけて出現し、成熟雄はホバリングを交えて湿地上で占有飛翔を行う。放棄水田やハンノキ湿地など、遷移途中段階にある湿地に生息する。</p>	<p>春季調査時に対象事業実施区域外で 3 個体、対象事業実施区域内の改変区域内で 1 個体が確認された。</p> 
<p>ヤマサナエ (サナエトンボ科)</p> <p>【重要種ランク】 岩手県：D ランク</p>	<p>【形態】成虫は腹長 44～54mm、後翅長 35～46mm。やや大型のサナエトンボで、黒地に黄色の斑紋をもつ。</p> <p>【分布】国内では岩手・秋田両県以南の本州、四国、九州に分布する。日本固有種。</p> <p>【生息状況】2～4 年 1 世代で、丘陵地から山地にかけての樹林に囲まれた河川の上・中流域や水路などに生息する。成虫は春季から初夏にかけて出現し、川岸に近い場所の植物上や地面に静止している。</p>	<p>春季調査時に対象事業実施区域外で 3 個体、対象事業実施区域内の非改変区域内で 2 個体、初夏調査時に対象事業実施区域外で 1 個体が確認された。</p> 

分布・生態情報の出典：「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物 web 版」(2014 年、岩手県)

表 6.7-19(2) 重要種の生態及び確認状況等（昆虫類）(2)

種名	分布・生態	確認状況・特記事項
<p>コオイムシ (コオイムシ科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：NT</p>	<p>【形態】体長 17～20mm、体は楕円形で淡褐色から黄褐色。</p> <p>【分布】国内では本州から九州に分布する。</p> <p>【生息状況】オスが背中で卵塊を保護する有名な昆虫である。水深の浅い開放的な止水域に生息し、オタマジャクシ、小魚、ヤゴ、巻貝などを捕食する。</p>	<p>春季調査時に対象事業実施区域外で1個体が確認された。</p> 
<p>ギンイチモンジセセリ (セセリチョウ科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：NT 岩手県：Dランク</p>	<p>【形態】雌雄の色彩斑紋はあまり違いがない。前後翅表面はピロウド状の黒褐色で、前翅裏面は前縁から外縁にかけて黄褐色に縁とられた黒褐色、後翅の中央部に銀色の条紋がある。</p> <p>【分布】国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。</p> <p>【生息状況】成虫の出現は6月上・下旬で年1回発生が多い。成虫は日当たりのいい草原を弱々しく飛んでいる。幼虫の食草はススキ科のほかいくつか知られている。産卵は食草の葉表になされ、幼虫は葉を筒状に閉じて巣を造りそこから出かけて摂食する。巣を造り変えながら成長した幼虫は巣内で越冬し翌春羽化する。</p>	<p>春季調査時に対象事業実施区域外で10個体、対象事業実施区域内の改変区域内で10個体が確認された。</p> 
<p>ミヤマチャバネセセリ (セセリチョウ科)</p> <p>【重要種ランク】 岩手県：Cランク</p>	<p>【形態】開張 40mm。翅表は褐色で少し黄緑色を帯びる。前翅には8,9個の半透明白色斑紋がやや環状に配列する。後翅の2小紋は雌では明瞭である。裏面黄褐色で前翅の斑紋は表と同じ、後翅には4白紋が横に配列する。</p> <p>【分布】国内では本州、四国、九州に分布する。</p> <p>【生息状況】気仙郡では年2回発生であるが、県北では1回発生かもしれない。幼虫の食草はススキで筒型の巣をつくって潜み、夜に出て葉を食べる。ススキの葉で蛹化して越冬し、翌春5月ころに羽化する。2回目の成虫は9月ころに見られる。既知産地で絶滅したところもあり、個体数は少なくなっている。</p>	<p>春季調査時に対象事業実施区域内の改変区域内で1個体が確認された。</p> 

分布・生態情報の出典：「レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生動物-」（2015年、環境省）
「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物 web 版」（2014年、岩手県）

表 6.7-19(3) 重要種の生態及び確認状況等（昆虫類）(3)

種名	分布・生態	確認状況・特記事項
<p>スジグロチャバネセセリ 北海道・本州・九州亜種 (セセリチョウ科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：NT</p>	<p>【形態】小型。 【分布】国内では、北海道、本州、九州に分布する。 【生息状況】成虫は、年1回、7～8月頃に発生し、食餌植物はイネ科のヤマカモジグサやカモジグサなどである。生息地は、草原に樹林が混在する疎林や林縁部である。</p>	<p>初夏調査時に対象事業実施区域外で11個体が確認された。</p> 
<p>ウラギンスジヒョウモン (タテハチョウ科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：VU</p>	<p>【形態】中型。翅表は橙色と黒のヒョウ柄模様。後翅裏面には、線状の白斑がある。オオウラギンスジヒョウモンに似るが、後翅裏面外半部の色調がより淡いことなどから区別できる。 【分布】北海道、本州、四国、九州の全都道府県に分布する。 【生息状況】生息地は、採草地、農地周辺、河川堤防、疎林などの草原である。成虫は、年1回、6～7月頃に発生し、夏眠した後、9月頃にも再び見られる。食餌植物は、タチツボスミレ、フモトスミレなどのスミレ類。</p>	<p>初夏調査時に対象事業実施区域外で7個体、夏季調査時に対象事業実施区域外で1個体が確認された。</p> 
<p>オオムラサキ (タテハチョウ科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：NT 岩手県：Cランク</p>	<p>【形態】開張90mm。雄の前後翅表面の基部より中央部にかけて紫色でこの中に白紋がある。他の部分は黒褐色で小黄色紋が散在する。後翅の内縁角には紅色紋がある。雌は紫色部が不明瞭で全体的に暗褐色で白や黄色紋の配置は雄とほぼ同じ、裏面は雌雄共に黄色味を帯びている。 【分布】国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。 【生息状況】年1回6、7月に羽化した成虫は樹液を訪れて吸液をする。エノキ、エゾエノキの葉や細い枝に産卵する。幼虫は葉を食べて成長して4令幼虫で樹の根元の枯葉、石の裏で越冬する。翌春樹に登りさらに葉を食べて成長し蛹化する。食樹の伐採によって個体数は少なくなっている。</p>	<p>春季調査時に対象事業実施区域内の非変更区域内で1個体、秋季調査時に対象事業実施区域外で幼虫1個体が確認された。</p> 



分布・生態情報の出典：「レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生動物-」（2015年、環境省）
「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物 web版」（2014年、岩手県）

表 6.7-19(4) 重要種の生態及び確認状況等（昆虫類）(4)

種名	分布・生態	確認状況・特記事項
<p>チビアオゴミムシ (オサムシ科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：EN</p>	<p>【形態】体長 8.7～9.2mm。アオゴミムシ類としては小さく、細い体型で、全体黄色みのある緑色。金色の細毛に覆われる。脚、触角、口器は黄褐色。近似種はいない。</p> <p>【分布】国内では本州のみに分布。</p> <p>【生息状況】大きな湖沼の周辺や河川敷のヨシ原や湿地に見られ、氾濫時に水没するような湿地性草地環境に生息する。肉食系で、春～秋に夜間に湿地やその周辺の草間を徘徊する。夏季には灯火下で見つかることもある。朽ち木中や石下、土中で成虫で越冬する。春繁殖するものと考えられている。</p>	<p>初夏調査時に対象事業実施区域内の非改変区域内で 2 個体、秋季調査時に対象事業実施区域内の非改変区域内で 9 個体が確認された。</p> 
<p>コガムシ (ガムシ科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：DD</p>	<p>【形態】黒色で光沢があり、触角柄部・口枝は黄褐色。雄は頭部中央に 1 本の角があり、前胸背の中央もくぼむ。体長 20～24mm。</p> <p>【分布】国内では北海道、本州、四国、九州、対馬に分布する。</p> <p>【生息状況】水田や河川敷の水たまりなど不安定な止水域で繁殖をするが、ため池などの安定した水域では繁殖しない。成虫は水草を食べ、幼虫は肉食性。かつては平野部の水田に生息する代表的な水生甲虫であり、夏には多くの成虫が灯火に飛来していたが、近年は減少傾向にある。</p>	<p>春季調査時に対象事業実施区域外で 2 個体が確認された。</p> 
<p>ゲンジボタル (ホタル科)</p> <p>【重要種ランク】 岩手県：D ランク</p>	<p>【形態】体長 12～18mm、黒色で暗色毛を装い、前胸は淡赤色、正中部には中央で広がる暗色の縦条があり、前縁は黒い。前胸背は密接して点刻され、正中部は浅くくぼみ、両側後半は広く平圧される。上翅は密に点刻され、各 4 条の縦隆線を具える。</p> <p>【分布】国内では本州、四国、九州に分布する。</p> <p>【生息状況】幼虫は水質の良い河川に生息し、カワニナを食べて生活している。成虫は 6 月下旬～7 月に出現し、雌成虫は水辺のコケなどに数百粒の卵を産む。孵化した幼虫は流水に入り、カワニナを食べて育つ。翌年の初夏までに 7 齢を経過して老熟した幼虫は、川岸の土手などに潜ってさなぎになり、川岸の土中に潜って蛹化する。</p>	<p>初夏調査時に対象事業実施区域外で 4 個体が確認された。</p> 

分布・生態情報の出典：「レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生動物-」（2015 年、環境省）
「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物 web 版」（2014 年、岩手県）
「学研生物図鑑 昆虫 II〔甲虫〕」（1990 年、株式会社学習研究社）

表 6.7-19(5) 重要種の生態及び確認状況等（昆虫類）(5)

種名	分布・生態	確認状況・特記事項
<p>キンイロネクイハムシ (ハムシ科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：NT 岩手県：B ランク</p>	<p>【形態】体長 7.5～9.0mm。体色は一般に暗緑色で強い銅色の光沢を有する。前胸背板には横皺と強い点刻がある。上翅には中央部に顕著な赤銅色の縦条とよこ皺がある。後肢腿節には小型の突起を持つ。</p> <p>【分布】国内では北海道、本州、九州に分布。</p> <p>【生息状況】平地のミクリやスゲ類の生育する湿地に生息する。成虫はミクリ、スゲなどの花に集まり葉を食べる。幼虫はミクリの根を食べる。個体数は著しく少なく、絶滅の危険性が大きい。平地の湿地環境の指標種。</p>	<p>夏季調査時に対象事業実施区域外で 10 個体が確認された。</p> 
<p>モンスズメバチ (スズメバチ科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：DD</p>	<p>【形態】頭部は黄色で頭頂単眼付近に黒斑がある。胸部と腹部は黒色。前胸背上面は赤褐色。小楯板に斑紋がない。第 1 腹背板は水平部前縁付近が赤褐色で、後縁に細い黄色帯がある。第 2 腹背板後縁に幅広い黄色帯があり、その前縁中央とその両側はえぐれて波状。第 6 腹背板は黄色。体長：雌 29mm 内外、働きバチ 21～28mm、雄 27mm 内外。</p> <p>【分布】北海道、本州、佐渡島、四国、九州。</p> <p>【生息状況】樹洞、天井裏、壁間、戸袋など閉鎖的な場所に営巣し、おもにセミを狩る。多種と違い夜にも活動する習性がある。全国的に減少傾向にあるが原因は不明。</p>	<p>春季調査時に対象事業実施区域内の改変区域内で 1 個体が確認された。</p> 
<p>クロマルハナバチ (ミツバチ科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：NT</p>	<p>【形態】雌と働きバチは同じ毛色で、全体黒色の長毛を密生し、尾端 3 節のみに赤褐色毛がある。はねは透明で、外縁部は暗褐色にくもる。雄は鮮やかな黄色長毛におおわれ、胸背中央部と第 3 腹背板の毛は黒色。体長：雌 19～23mm、働きバチ 12～19mm、雄 20mm 内外。</p> <p>【分布】本州、四国、九州。</p> <p>【生息状況】やや山地性で、全国的に減少傾向にある。個体数は少なく、生息地も限定されているため、宅地開発や土地造成、道路建設等営巣地の改変により減少が危惧されている。</p>	<p>秋季調査時に対象事業実施区域外で 1 個体が確認された。</p> 

分布・生態情報の出典：「レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生動物-」（2015 年、環境省）
「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物 web 版」（2014 年、岩手県）
「学研生物図鑑 昆虫 III [バッタ・ハチ・セミ・トンボほか]」（1990 年、株式会社学研研究社）



(7) 魚類

確認状況は、表 6.7-20、表 6.7-21 と図 6.7-16 に示す。全体で 2 目 4 科 8 種を確認し、そのうち重要な魚類は 1 目 1 科 1 種であった。

確認された重要種の生態及び確認状況等は、表 6.7-22 に示す。

表 6.7-20 魚類の確認種一覧

No.	目名	科名	種名*1	調査時季	
				春季	秋季
1	コイ	コイ	ゲンゴロウブナ		○
2			ギンブナ	○	
-			フナ属	○	○
3			アブラハヤ	○	○
4			モツゴ	○	○
5		ドジョウ	ドジョウ	○	○
6			カラドジョウ	○	
7	スズキ	サンフィッシュ	オオクチバス	○	○
8		ハゼ	トウヨシノボリ類	○	○
合計	2 目	4 科	8 種	7 種	7 種

*1. 種名等は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト 令和 4 年度生物リスト」（令和 4 年、国土交通省水情報 国土データ管理センター）に準拠した。

注) は重要種を示す。

表 6.7-21 魚類の重要種一覧


No.	目名	科名	種名*1	調査時季		選定基準*2				
				春季	秋季	I	II	III	IV	V
1	コイ	ドジョウ	ドジョウ	○	○				NT	
合計	1 目	1 科	1 種	1 種	1 種	0 種	0 種	0 種	1 種	0 種

*1. 種名等は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト 令和 4 年度生物リスト」（令和 4 年、国土交通省水情報 国土データ管理センター）に準拠した。

*2. 選定基準のカテゴリーランクは、以下のとおり。下線は現地調査で確認された種の該当するランクを示す。

- I : 「文化財保護法」(昭和 25 年 法律第 214 号)
特別天然記念物(特天)、天然記念物(天)
- II : 「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律(種の保存法)」(平成 4 年 法律第 75 号)
国内希少野生動植物(国内)、国際希少野生動植物(国際)
- III : 「岩手県希少野生動植物の保護に関する条例」(平成 14 年 3 月 29 日 条例第 26 号)
指定希少野生動植物(指定)、特定希少野生動植物(特定)
- IV : 「環境省レッドリスト 2020」(2020 年、環境省)
絶滅(EX)、野生絶滅(EW)、絶滅危惧 I A 類(CR)、絶滅危惧 I B 類(EN)、絶滅危惧 II 類(VU)、準絶滅危惧(NT)、情報不足(DD)、絶滅のおそれのある地域個体群(LP)
- V : 「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物」(2014 年、岩手県環境生活部自然保護課)
絶滅(EX)、野生絶滅(EW)、絶滅危惧 I 類(A)、絶滅危惧 II 類(B)、準絶滅危惧(C)、
C ランクに準ずる種(D)、情報不足(DD)

表 6.7-22 重要種の生態及び確認状況等（魚類）

種名	分布・生態	確認状況・特記事項
<p>ドジョウ (ドジョウ科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：NT</p>	<p>【形態】雄は約 120mm、雌は約 180mm。体は細長く筒形をしている。10 本の口ひげを持つ。体背側部に不明瞭な斑紋を持つことがある。腹面は淡色で斑紋がない。鱗はきわめて細かい。体表は粘液質に富んでいる。ふつう、雌の方が大型。</p> <p>【分布】ほぼ日本全国に分布するが、北海道と琉球列島のものは天然分布ではない可能性がある。国外では中国大陸中部、台湾島、朝鮮半島に分布する。</p> <p>【生息状況】河川の中流域から下流域にかけて、またこれにつながる用水路、水田、湿地などに生息する。成魚は泥底上を泳ぎ回り、あるいは泥底に潜って生活する。</p>	<p>春季調査時に対象事業実施区域外で 27 個体、対象事業実施区域内の非改変区域内で 13 個体、秋季調査時に対象事業実施区域外で 19 個体、対象事業実施区域内の非改変区域内で 14 個体が確認された。</p> 

分布・生態情報の出典：「川の生物図鑑」（1996 年、財団法人 リバーフロント整備センター）



図 6.7-16 魚類重要種確認位置図

(8) 底生動物

確認状況は、表 6.7-23、表 6.7-24 と図 6.7-17 に示す。全体で 23 目 86 科 185 種を確認し、そのうち重要な底生動物は 5 目 6 科 8 種であった。

確認された重要種の生態及び確認状況等は、表 6.7-25 に示す。

なお、確認種目録は資料編に示す。

表 6.7-23 底生動物の確認種一覧

No.	門名	綱名	目名	調査時季				合計		
				春季		秋季				
1	扁形動物	有棒状体	三岐腸	1 科	1 種	1 科	1 種	1 科	1 種	
2	軟体動物	腹足	新生腹足	2 科	3 種	1 科	1 種	2 科	3 種	
3			汎有肺	2 科	3 種	2 科	2 種	2 科	3 種	
4			二枚貝	イシガイ	1 科	1 種	1 科	1 種	1 科	1 種
5		マルスダレガイ		2 科	2 種	1 科	1 種	2 科	2 種	
6		環形動物	ミミズ	オヨギミミズ	1 科	1 種	-	-	1 科	1 種
7	イトミミズ			2 科	7 種	1 科	4 種	2 科	6 種	
8	ツリミミズ			1 科	1 種	1 科	1 種	1 科	1 種	
9	ヒル		吻蛭	-	-	1 科	1 種	1 科	1 種	
10			吻無蛭	2 科	2 種	-	-	2 科	2 種	
11	節足動物		軟甲	ヨコエビ	1 科	1 種	1 科	1 種	1 科	1 種
12		ワラジムシ		1 科	1 種	1 科	1 種	1 科	1 種	
13		エビ		5 科	5 種	4 科	5 種	5 科	6 種	
14		昆虫	カゲロウ(蜉蝣)	8 科	21 種	8 科	20 種	11 科	27 種	
15			トンボ(蜻蛉)	7 科	20 種	8 科	23 種	8 科	26 種	
16			カワゲラ(セキ翅)	2 科	4 種	3 科	5 種	3 科	5 種	
17			カメムシ(半翅)	2 科	9 種	5 科	9 種	5 科	11 種	
18			ヘビトンボ	-	-	1 科	1 種	1 科	1 種	
19			トビケラ(毛翅)	11 科	17 種	10 科	12 種	14 科	21 種	
20			チョウ(鱗翅)	-	-	1 科	2 種	1 科	2 種	
21			ハエ(双翅)	12 科	39 種	7 科	26 種	13 科	48 種	
22			コウチュウ(鞘翅)	4 科	8 種	4 科	9 種	7 科	14 種	
23			苔虫動物	被喉	ハネコケムシ	1 科	1 種	-	-	1 科
合計		5 門	8 綱	23 目	68 科	147 種	62 科	126 種	86 科	185 種

*1. 目名は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト 令和 4 年度生物リスト」(令和 4 年、国土交通省水情報 国土データ管理センター)に準拠したが、一部他の文献を参考にした。

注) 各調査時季の種数は、同一の分類群に属する種などが確認されていなければ、1 種として計上した。

表 6. 7-24 底生動物の重要種一覧

No.	目名	科名	種名 ^{*1}	調査時季		選定基準 ^{*2}				
				春季	秋季	I	II	III	IV	V
1	新生腹足	タニシ	マルタニシ	○	○				VU	
2			オオタニシ	○					NT	
3	汎有肺	モノアラガイ	モノアラガイ	○					NT	
4	マルスダレガイ	マメシジミ	マメシジミ属 ^{*3}	○	○					C ^{*3}
5	トンボ(蜻蛉)	ヤンマ	アオヤンマ	○	○				NT	
6		サナエトンボ	ヤマサナエ		○					D
7			オジロサナエ	○	○					D
8	カメムシ(半翅)	コオイムシ	コオイムシ		○				NT	
合計	5 目	6 科	8 種	6 種	6 種	0 種	0 種	0 種	5 種	3 種

*1. 種名等は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト 令和4年度生物リスト」(令和4年、国土交通省水情報国土データ管理センター)に準拠したが、一部他の文献を参考にした。

*2. 選定基準のカテゴリーランクは、以下のとおり。下線は現地調査で確認された種の該当するランクを示す。

I : 「文化財保護法」(昭和25年 法律第214号)

特別天然記念物(特天)、天然記念物(天)

II : 「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律(種の保存法)」(平成4年 法律第75号)

国内希少野生動植物(国内)、国際希少野生動植物(国際)

III : 「岩手県希少野生動植物の保護に関する条例」(平成14年3月29日 条例第26号)

指定希少野生動植物(指定)、特定希少野生動植物(特定)

IV : 「環境省レッドリスト2020」(2020年、環境省)

絶滅(EX)、野生絶滅(EW)、絶滅危惧 I A 類(CR)、絶滅危惧 I B 類(EN)、絶滅危惧 II 類(VU)、

準絶滅危惧(NT)、情報不足(DD)、絶滅のおそれのある地域個体群(LP)



V : 「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物」(2014年、岩手県環境生活部自然保護課)

絶滅(EX)、野生絶滅(EW)、絶滅危惧 I 類(A)、絶滅危惧 II 類(B)、準絶滅危惧(C)、

C ランクに準ずる種(D)、情報不足(DD)




*3. いわてレッドデータブックでは「マメシジミ/Pisidium spp.」と表記されているためマメシジミ属を重要種として扱った。

表 6. 7-25 (1) 重要種の生態及び確認状況等 (底生動物) (1)

種名	分布・生態	確認状況・特記事項
<p>マルタニシ (タニシ科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：VU</p>	<p>【形態】殻高約 60mm、殻径約 44mm になる。卵円形の巻貝で螺層は 6 層で丸く膨らみ、縫合は深い。体層は大きくて丸く、殻高の 3 分の 2 を占める。殻は薄く、殻口は広くて丸い。蓋は黄褐色で、中心に核があって共心円脈ができる。内面は平滑で光沢がある。殻頂は欠けている。</p> <p>【分布】北海道南部、本州から九州の各地、台湾、中国、朝鮮半島に広く分布し、近年は北アメリカに移殖されて広まっている。</p> <p>【生息状況】比較的海に近い平野部の水田、池沼、潟、用水路などに多く生息する。水田の底などを、泥を被った姿で這い回る。</p>	<p>春季調査時に対象事業実施区域外で 5 個体、対象事業実施区域内の非改変区域内で 5 個体、秋季調査時に対象事業実施区域外で 5 個体、対象事業実施区域内の非改変区域内で 10 個体が確認された。</p> 
<p>オオタニシ (タニシ科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：NT</p>	<p>【形態】殻高 60mm 前後になり、北海道産では 80mm に達する。各螺層の膨らみは弱く、縫合は浅い傾向にある。殻底角があり、弱いながらも螺条脈も有する。胎児は殻径よりも殻高が大きい菱形で、螺塔は細く高い。周縁角は顕著で、2 本の角張った螺条脈があり、この上に細い殻皮毛を配列する。</p> <p>【分布】北海道から九州にかけて分布する。</p> <p>【生息状況】流れの穏やかな河川や用水路、ため池や湖などの水量と水質の安定した (僅かに湧水のある) 場所に生息し、ヒメタニシとは一緒に生息するがマルタニシとはほとんど混棲しないようである。</p>	<p>春季調査時に対象事業実施区域外で 1 個体が確認された。</p> 
<p>モノアラガイ (モノアラガイ科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：NT</p>	<p>【形態】殻高約 25mm、殻径約 20mm になる巻貝で、殻塔 (殻の先の部分) が低く、体層がよく発達し、特に殻口が大きく、殻高の 5 分の 4 を占めることもある。なお、モノアラガイの仲間は殻が薄く、殻口には蓋がない。</p> <p>【分布】北海道から九州までの日本の各地と朝鮮半島に分布する。</p> <p>【生息状況】小川、川の淀み、池沼、水田などの水草や礫に付着している。泥底に直接いることもある。水から出るとは少ない。</p>	<p>春季調査時に対象事業実施区域外で 2 個体が確認された。</p> 



分布・生態情報の出典：「川の生物図鑑」(1996 年、財団法人 リバーフロント整備センター)
「日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類」(2004 年、株式会社ピーシーズ)

表 6. 7-25 (2) 重要種の生態及び確認状況等 (底生動物) (2)

種名	分布・生態	確認状況・特記事項
<p>マメシジミ属 (マメシジミ科)</p> <p>【重要種ランク】 岩手県：Cランク</p>	<p>【形態】本県で確認例の多いニホンマメシジミ型では、殻のふくらみが強く、殻頂はやや後方にかたより、色は白色から黄白色を帯びる。超小型の二枚貝で、殻長は3～6mmほどで、最大8mmに成長する。</p> <p>【分布】久慈市、岩泉町、遠野市、住田町などの他、盛岡市以南の北上川本川に広く生息する。</p> <p>【生息状況】砂礫質あるいは砂泥質で、有機物が堆積した場所に多く、シジミ類のように河床中にもぐり込んで生活している。卵胎生であり、小数の稚貝を直接産む形で再生産している。</p>	<p>春季調査時に対象事業実施区域内の非改変区域内で1個体、秋季調査時に対象事業実施区域内の非改変区域内で1個体が確認された。</p> 
<p>アオヤンマ (ヤンマ科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：NT</p>	<p>【形態】全身鮮やかな草色をしたヤンマ。その清々しい美しさからタケヤンマと呼ばれることもある。成虫の大きさ70～76mm。幼虫は細長い紡錘形のヤゴ。腹先に尾(えら)がない。越冬形態は幼虫。</p> <p>【分布】北海道～九州。</p> <p>【生息状況】平地のアシやマコモなどが繁茂する池沼、水郷地帯の小川にすむ。沼や湖のヨシ原で見かけるが、茂みの中をぬうように低く飛翔するので目立たない。雌は、ヨシの茎を突き抜いて穴をあけ、中に卵をぎっしりと産みつける。</p>	<p>春季調査時に対象事業実施区域外で2個体、秋季調査時に対象事業実施区域外で3個体が確認された。</p> 
<p>ヤマサナエ (サナエトンボ科)</p> <p>【重要種ランク】 岩手県：Dランク</p>	<p>【形態】成虫は腹長44～54mm、後翅長35～46mm。やや大型のサナエトンボで、黒地に黄色の斑紋をもつ。</p> <p>【分布】現在確認できるのは花巻市、奥州市、一関市の県央から県南にかけての地域である。沿岸部では宮古市から記録があったが近年の確認例は全く無く、絶滅したものと思われる。国内では岩手・秋田両県以南の本州、四国、九州に分布する。日本固有種。</p> <p>【生息状況】2～4年1世代で、丘陵地から山地にかけての樹林に囲まれた河川の上・中流域や水路などに生息する。成虫は春季から初夏にかけて出現し、川岸に近い場所の植物上や地面に静止している。</p>	<p>秋季調査時に対象事業実施区域外で1個体、対象事業実施区域内の非改変区域内で2個体が確認された。</p> 

分布・生態情報の出典：「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物 web 版」(2014年、岩手県)
「わかる! 図鑑⑧ 水辺の昆虫」(2010年、株式会社 山と溪谷社)

表 6. 7-25 (3) 重要種の生態及び確認状況等 (底生動物) (3)

種名	分布・生態	確認状況・特記事項
<p>オジロサナエ (サナエトンボ科)</p> <p>【重要種ランク】 岩手県：D ランク</p>	<p>【形態】成虫は腹長 30～34mm、後翅長 21～27mm。小型のサナエトンボで、黒地に黄色の斑紋をもつ。胸部側面の黒条は「Y」字状となることで、他種と区別は容易である。</p> <p>【分布】一関市(小岩, 1986)のほか、花巻市(岩手県, 2001)に生息することが知られているが、奥州市、盛岡市においても生息を確認している。国内では岩手・秋田両県以南の本州、四国、九州に分布する。日本固有種。</p> <p>【生息状況】2年1世代で、丘陵地から山地にかけての樹林に囲まれた河川の源流・上流域で産卵し、幼虫は流下して河川中・下流域で羽化する。成虫は初夏から夏季にかけて出現し、流れの中の石上などに静止している。</p>	<p>春季調査時に対象事業実施区域外で2個体、対象事業実施区域内の非改変区域内で2個体、秋季調査時に対象事業実施区域外で1個体、対象事業実施区域内の非改変区域内で1個体が確認された。</p> 
<p>コオイムシ (コオイムシ科)</p> <p>【重要種ランク】 環境省：NT</p>	<p>【形態】体長 17～20mm、体は楕円形で淡褐色から黄褐色。</p> <p>【分布】国内では本州から九州に分布する。</p> <p>【生息状況】オスが背中で卵塊を保護する有名な昆虫である。水深の浅い開放的な止水域に生息し、オタマジャクシ、小魚、ヤゴ、巻貝などを捕食する。</p>	<p>秋季調査時に対象事業実施区域外で3個体、対象事業実施区域内の非改変区域内で1個体が確認された。</p> 

分布・生態情報の出典：「レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生動物-」(2015年、環境省)
「いわてレッドデータブック 岩手の希少な野生生物 web 版」(2014年、岩手県)



図 6.7-17 底生動物重要種確認位置図

6.7.2 予測及び評価の結果

1) 造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響、事業の立地及び土地又は工作物の存在

(1) 予測

① 予測項目

予測項目は、表 6.7-26 に示す影響要因が動物の重要種及び注目すべき生息地に与える影響の程度とした。

表 6.7-26 動物への影響要因

時期	影響要因
工事の実施	造成等の工事による一時的な影響
	建設機械の稼働
土地又は工作物の存在及び供用	事業の立地及び土地又は工作物の存在

② 予測手法

動物の重要な種及び注目すべき生息地について、分布又は生息環境の改変の程度を踏まえた事例の引用又は解析により予測した。

③ 予測地域

予測地域は、対象事業実施区域及びその周辺約 200m の範囲とした。

④ 予測対象時期

予測対象時期は、造成時及び工事期間中、建設機械の最大稼働時、ごみ処理施設及びリサイクル施設の整備に伴い土地改変が行われる期間とした。

⑤ 予測結果

現地調査の結果、重要種として 47 種が確認された。各種の予測結果は表 6.7-27 に示す。

このうち、対象事業実施区域内で確認された種は 31 種（ヤマサナエ、コオイムシは昆虫類と底生動物の両調査で確認されている）であり、事業による動物への影響を受ける可能性のある種として、サシバ、ノスリ、トウホクサンショウウオ、クロサンショウウオの 4 種が抽出された。

表 6.7-27(1) 重要な種の予測結果(1)

分類	種名	対象事業実施区域		予測結果
		内	外	
哺乳類	重要種 1 ヒナコウモリ科 1 (20～25kHz)	○	○	<p>【確認状況】 夜間のバットディテクターを用いた調査で 20～25kHz の波長が確認された。これはヒナコウモリ科の波長に該当し、コヤマコウモリ、ヤマコウモリ、クビワコウモリ、ヒナコウモリの可能性がある。 春季調査時に対象事業実施区域外で 2 例、対象事業実施区域内の改変区域内で 1 例、初夏調査時に対象事業実施区域外で 6 例、対象事業実施区域内の非改変区域内で 1 例、改変区域内で 1 例、夏季調査時に対象事業実施区域外で 9 例、対象事業実施区域内の改変区域内で 2 例、秋季調査時に対象事業実施区域内の改変区域内で 1 例が確認された。</p>
				<p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種はコヤマコウモリ、ヤマコウモリ、クビワコウモリ、ヒナコウモリのいずれかに該当するものと考えられる。いずれも樹洞性の種であるが、対象事業実施区域内で本種がねぐらに利用する樹洞の空いた大径木は確認されていないことから、摂食のために対象事業実施区域周辺の上空を利用している可能性が高い。 対象事業実施区域内にはねぐらが存在する可能性が低く、工事は本種の活動時間帯と重ならないことから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響は、小さいことが予測される。</p>
				<p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種はコヤマコウモリ、ヤマコウモリ、クビワコウモリ、ヒナコウモリのいずれかに該当するものと考えられる。いずれも樹洞性の種であるが、対象事業実施区域内で本種がねぐらに利用する樹洞の空いた大径木は確認されていないことから、摂食のために対象事業実施区域の上空を利用している可能性が高い。 対象事業実施区域内にはねぐらが存在する可能性が低く、また対象事業実施区域周辺には生息環境の樹林地が分布していることから、本種へ事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響は、小さいことが予測される。</p>

表 6.7-27(2) 重要な種の予測結果(2)

分類	種名	対象事業 実施区域		予測結果
		内	外	
哺乳類	重要種 2 ヒナコウモリ 科 2 (40~50kHz)	○	○	<p>【確認状況】 夜間のバットディテクターを用いた調査で 40~50kHz の波長が確認された。これはヒナコウモリ科の波長に該当し、ヒメホオヒゲコウモリ、カグヤコウモリ、クロホオヒゲコウモリ、ノレンコウモリ、モリアブラコウモリ、チチブコウモリ、ニホンウサギコウモリ、ユビナガコウモリ、コテングコウモリ、テングコウモリの可能性がある。</p> <p>春季調査時に対象事業実施区域外で 2 例、対象事業実施区域内の改変区域内で 2 例、初夏調査時に対象事業実施区域外で 2 例、対象事業実施区域内の非改変区域内で 1 例、改変区域内で 1 例、夏季調査時に対象事業実施区域外で 6 例、対象事業実施区域内の改変区域内で 1 例、秋季調査時に対象事業実施区域外で 2 例が確認された。</p>
				<p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種はヒメホオヒゲコウモリ、カグヤコウモリ、クロホオヒゲコウモリ、ノレンコウモリ、モリアブラコウモリ、チチブコウモリ、ウサギコウモリ、ユビナガコウモリ、コテングコウモリ、テングコウモリのいずれかに該当するものと考えられる。洞窟性や樹洞性の種であるが、対象事業実施区域内で本種がねぐらに利用する洞窟や樹洞の空いた大径木は確認されていないことから、摂食のために対象事業実施区域周辺の上空を利用している可能性が高い。</p> <p>対象事業実施区域内にはねぐらが存在する可能性が低く、工事は本種の活動時間帯と重ならないことから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響は、小さいことが予測される。</p>
				<p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種はヒメホオヒゲコウモリ、カグヤコウモリ、クロホオヒゲコウモリ、ノレンコウモリ、モリアブラコウモリ、チチブコウモリ、ウサギコウモリ、ユビナガコウモリ、コテングコウモリ、テングコウモリのいずれかに該当するものと考えられる。洞窟性や樹洞性の種であるが、対象事業実施区域内で本種がねぐらに利用する洞窟や樹洞の空いた大径木は確認されていないことから、摂食のために対象事業実施区域周辺の上空を利用している可能性が高い。</p> <p>対象事業実施区域内にはねぐらが存在する可能性が低く、また対象事業実施区域周辺には生息環境の樹林地が分布していることから、本種へ事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響は、小さいことが予測される。</p>

表 6.7-27(3) 重要な種の予測結果(3)

分類	種名	対象事業実施区域		予測結果
		内	外	
哺乳類	重要種 3 カモシカ	○	○	<p>【確認状況】</p> <p>春季と夏季の調査において、糞及び目撃（センサーカメラ含む）で確認された。</p> <p>春季調査時に対象事業実施区域外で 3 例、対象事業実施区域内の改変区域内で 3 例、夏季調査時に対象事業実施区域外で 1 例、対象事業実施区域内の非改変区域内で 1 例が確認された。</p>
				<p>【造成等の工事による一時的な影響】</p> <p>【建設機械の稼働に伴う影響】</p> <p>本種は、都市部を除く県内の山地、里地のほぼ全域に分布している。</p> <p>対象事業実施区域は行動圏の一部に含まれる可能性が高いが、対象事業実施区域周辺には生息環境の樹林地が広く存在すること、環境配慮事項としてまとまった非改変区域を設定し、改変区域周辺部にも残置林が存在することから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響は、小さいことが予測される。</p>
				<p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】</p> <p>本種は、都市部を除く県内の山地、里地のほぼ全域に分布している。</p> <p>対象事業実施区域は行動圏の一部に含まれる可能性が高いが、対象事業実施区域周辺には生息環境の樹林地が広く存在すること、環境配慮事項としてまとまった非改変区域を設定し、改変区域周辺部にも残置林が存在することから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響は、小さいことが予測される。</p>
鳥類	重要種 4 ヤマドリ	○		<p>【確認状況】</p> <p>秋季調査時に対象事業実施区域内の改変区域内で 1 個体が確認された。</p>
				<p>【造成等の工事による一時的な影響】</p> <p>【建設機械の稼働に伴う影響】</p> <p>本種は、平地から低山帯のキジの生息圏にもいるが、それより上部の山間地帯に多いことが知られている。</p> <p>対象事業実施区域は、西側に水田等の耕作地が存在する丘陵地であり、本種の主要な生息地よりも低地に位置する可能性が高く、また、秋季に 1 個体のみの確認であることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響は、小さいことが予測される。</p>
				<p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】</p> <p>本種は、平地から低山帯のキジの生息圏にもいるが、それより上部の山間地帯に多いことが知られている。</p> <p>対象事業実施区域は、西側に水田等の耕作地が存在する丘陵地であり、本種の主要な生息地よりも低地に位置する可能性が高く、また、秋季に 1 個体のみの確認であることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響は、小さいことが予測される。</p>

表 6.7-27(4) 重要な種の予測結果(4)

分類	種名	対象事業 実施区域		予測結果
		内	外	
鳥類	重要種 5 オシドリ		○	<p>【確認状況】 秋季調査時に対象事業実施区域外で2個体が確認された。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、樹洞性のカモ類で溪流畔や平地流河畔の広葉樹林などで繁殖することが知られている。 対象事業実施区域内で本種が繁殖に利用する樹洞の空いた大径木確認されておらず、確認は対象事業実施区域外のみであることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響は、小さいことが予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、樹洞性のカモ類で溪流畔や平地流河畔の広葉樹林などで繁殖することが知られている。 対象事業実施区域内で本種が繁殖に利用する樹洞の空いた大径木確認されておらず、確認は対象事業実施区域外のみであることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響は、小さいことが予測される。</p>
	重要種 6 バン		○	<p>【確認状況】 秋季調査時に対象事業実施区域外で2個体が確認された。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、夏鳥として各地に飛来し、河川、湖沼などや背の高い水草が生える湿地を好み営巣する。イネ科、タデ科など植物質を主食とし小動物も餌とする。 対象事業実施区域内に本種の好む環境が存在する可能性は低く、確認は、対象事業実施区域外のため池のみであることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響は、小さいことが予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、夏鳥として各地に飛来し、河川、湖沼などや背の高い水草が生える湿地を好み営巣する。イネ科、タデ科など植物質を主食とし小動物も餌とする。 対象事業実施区域内に本種の好む環境が存在する可能性は低く、確認は、対象事業実施区域外のため池のみであることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響は、小さいことが予測される。</p>

表 6.7-27(5) 重要な種の予測結果(5)

分類	種名	対象事業 実施区域		予測結果
		内	外	
鳥類	重要種 7 オオバン		○	<p>【確認状況】 秋季調査時に対象事業実施区域外で 2 個体、冬季調査時に対象事業実施区域外で 5 個体が確認された。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、渡りの時期に少数見られ、河川、湖沼、湿原、水田などに生息する。 対象事業実施区域内に本種の好む環境が存在する可能性は低く、確認は、対象事業実施区域外のため池のみであることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響は、小さいことが予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、渡りの時期に少数見られ、河川、湖沼、湿原、水田などに生息する。 対象事業実施区域内に本種の好む環境が存在する可能性は低く、確認は、対象事業実施区域外のため池のみであることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響は、小さいことが予測される。</p>
	重要種 8 ハリオアマツバメ		○	<p>【確認状況】 秋季調査時に対象事業実施区域外の上空を飛翔する 1 個体が確認された。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、日本では夏鳥として本州北部に 4 月頃渡来し、ブナ帯や亜高山以上の高い地域で確認できることが知られている。 対象事業実施区域は、西側に水田等の耕作地が存在する丘陵地であることから、本種が繁殖に利用する可能性は非常に低いものと考えられ、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響はないことが予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、日本では夏鳥として本州北部に 4 月頃渡来し、ブナ帯や亜高山以上の高い地域で確認できることが知られている。 対象事業実施区域は、西側に水田等の耕作地が存在する丘陵地であることから、本種が繁殖に利用する可能性は非常に低いものと考えられ、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響はないことが予測される。</p>

表 6.7-27(6) 重要な種の予測結果(6)

分類	種名	対象事業 実施区域		予測結果
		内	外	
鳥類	重要種 9 ミサゴ	○	○	<p>【確認状況】 一般鳥類調査では、夏季調査時に対象事業実施区域外の上空を飛翔する1個体が確認された。 猛禽類調査では、令和4年3月に4回、4月に1回、5月に2回、6月に2回、令和5年3月に5回、4月に7回、5月に4回、6月に1回、対象事業実施区域を含め広範囲に飛翔が確認された。なお、調査範囲外の南の遠方から北の遠方への餌運びが複数回確認された。 本種の繁殖は確認されなかった。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、県内では沿岸の海岸や内陸のダム湖などで繁殖する。秋季には南へ渡るが、県南では少数が越冬していることが知られている。 対象事業実施区域内外で広範囲に確認されており、また、南の遠方から北の遠方への餌運びが確認されたことから、対象事業実施区域外で繁殖した可能性がある。本種の繁殖場所は対象事業実施区域外と考えられ、採餌環境となる広い水域も対象事業実施区域内には存在しないことから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響は、小さいことが予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、県内では沿岸の海岸や内陸のダム湖などで繁殖する。秋季には南へ渡るが、県南では少数が越冬していることが知られている。 対象事業実施区域内外で広範囲に確認されており、また、南の遠方から北の遠方への餌運びが確認されたことから、対象事業実施区域外で繁殖した可能性がある。本種の繁殖場所は対象事業実施区域外と考えられ、採餌環境となる広い水域も対象事業実施区域内には存在しないことから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響は、小さいことが予測される。</p>
	重要種 10 ハチクマ	○	○	<p>【確認状況】 一般鳥類調査では確認されなかった。 猛禽類調査では、令和4年5月に1回、6月に2回、7月に2回、令和5年5月に1回、7月に2回、対象事業実施区域を含め広範囲に飛翔が確認された。 本種の繁殖は確認されなかった。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、夏鳥として飛来し、北海道から九州まで広い範囲で繁殖していることが知られている。 対象事業実施区域内の上空の通過が1回確認されたが、他はすべて対象事業実施区域外であることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響はないことが予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、夏鳥として飛来し、北海道から九州まで広い範囲で繁殖していることが知られている。 対象事業実施区域内の上空の通過が1回確認されたが、他はすべて対象事業実施区域外であることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響はないことが予測される。</p>

表 6.7-27(7) 重要な種の予測結果(7)

分類	種名	対象事業 実施区域		予測結果
		内	外	
鳥類	重要種 11 ツミ	○	○	<p>【確認状況】 一般鳥類調査では、秋季調査時に対象事業実施区域内の非改変区域内上空を飛翔する 1 個体が確認された。 猛禽類調査では、令和 4 年 4 月に 1 回、対象事業実施区域外で飛翔が確認された。 本種の繁殖は確認されなかった。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、極東アジア中北部の狭い範囲で繁殖し、冬季は一部が国内暖地や東南アジアに渡ることが知られている。 本種の確認は 2 回だけであり、営巣場所は対象事業実施区域外である可能性が高く、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響は、小さいことが予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、極東アジア中北部の狭い範囲で繁殖し、冬季は一部が国内暖地や東南アジアに渡ることが知られている。 本種の確認は 2 回だけであり、営巣場所は対象事業実施区域外である可能性が高く、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響は、小さいことが予測される。</p>
	重要種 12 ハイタカ	○	○	<p>【確認状況】 一般鳥類調査では、初夏調査時に対象事業実施区域内の非改変区域内上空を飛翔する 1 個体が確認された。 猛禽類調査では、令和 4 年 3 月に 2 回、4 月に 4 回、6 月に 1 回、令和 5 年 3 月に 3 回、4 月に 1 回、対象事業実施区域を含め広範囲に飛翔が確認された。 本種の繁殖は確認されなかった。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、岩手県内では全県的に低山地からブナ帯で 1 年中生息することが知られている。 対象事業実施区域の非改変区域内で狩りが 1 回確認されたが、繁殖行動はなく、本種の繁殖地は対象事業実施区域外である可能性が高く、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響は、小さいことが予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、岩手県内では全県的に低山地からブナ帯で 1 年中生息することが知られている。 対象事業実施区域の非改変区域内で狩りが 1 回確認されたが、繁殖行動はなく、本種の繁殖地は対象事業実施区域外である可能性が高く、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響は、小さいことが予測される。</p>

表 6.7-27(8) 重要な種の予測結果(8)

分類	種名	対象事業 実施区域		予測結果
		内	外	
鳥類	重要種 13 オオタカ		○	<p>【確認状況】</p> <p>一般鳥類調査では、夏季調査時に対象事業実施区域外の上空を飛翔する1個体が確認された。</p> <p>猛禽類調査では、令和5年4月に2回、対象事業実施区域外で飛翔が確認された。</p> <p>本種の繁殖は確認されなかった。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】</p> <p>【建設機械の稼働に伴う影響】</p> <p>本種は平野部から低山帯、丘陵地帯のアカマツ林やカラマツ林の壮齢林地帯に生息することが知られている。</p> <p>対象事業実施区域外で狩りが1回確認されたが、全体では3回のみの確認であり、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響は、小さいことが予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】</p> <p>本種は平野部から低山帯、丘陵地帯のアカマツ林やカラマツ林の壮齢林地帯に生息することが知られている。</p> <p>対象事業実施区域外で狩りが1回確認されたが、全体では3回のみの確認であり、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響は、小さいことが予測される。</p>
	重要種 14 サンバ	○	○	<p>【確認状況】</p> <p>一般鳥類調査では、春季調査時に対象事業実施区域外で1個体、夏季調査時に対象事業実施区域外で1個体が確認された。</p> <p>猛禽類調査では、令和4年4月に22回、5月に17回、6月に19回、7月に8回、令和5年4月に23回、5月に15回、6月に16回、7月に35回、対象事業実施区域を含め広範囲に飛翔が確認された。</p> <p>対象事業実施区域外の1箇所では令和4年と令和5年に繁殖が確認された。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】</p> <p>【建設機械の稼働に伴う影響】</p> <p>本種は夏鳥であり、雫石以南で繁殖することが知られている。台地や丘陵地の谷津田を含む里山が主な繁殖地で、アカマツ、スギに営巣することが多い。まれに山間部の森林地帯で繁殖することもある。</p> <p>対象事業実施区域外の北西側を中心に多く確認され、令和4年、令和5年ともに繁殖が確認された。2箇所の営巣地ともに対象事業実施区域の改変区域から200m以上離れているが、今後営巣地が改変区域に近づく可能性もあることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響はであると予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】</p> <p>本種は夏鳥であり、雫石以南で繁殖することが知られている。台地や丘陵地の谷津田を含む里山が主な繁殖地で、アカマツ、スギに営巣することが多い。まれに山間部の森林地帯で繁殖することもある。</p> <p>対象事業実施区域外の北西側を中心に多く確認され、令和4年、令和5年ともに繁殖が確認された。2箇所の営巣地ともに対象事業実施区域の改変区域から200m以上離れているが、今後営巣地が改変区域に近づく可能性もあることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響はであると予測される。</p>

表 6.7-27(9) 重要な種の予測結果(9)

分類	種名	対象事業 実施区域		予測結果
		内	外	
鳥類	重要種 15 ノスリ	○	○	<p>【確認状況】</p> <p>一般鳥類調査では、春季調査時に対象事業実施区域外の上空を飛翔する 1 個体、初夏調査時に対象事業実施区域外の上空を飛翔する 1 個体と他 1 個体、夏季調査時に対象事業実施区域外の上空を飛翔する 1 個体と他 2 個体、秋季調査時に対象事業実施区域外の上空を飛翔する 2 個体、対象事業実施区域内の改変区域内上空を飛翔する 4 個体、冬季調査時に対象事業実施区域外で鳴き声 1 例が確認された。</p> <p>猛禽類調査では、令和 4 年 3 月に 55 回、4 月に 26 回、5 月に 25 回、6 月に 34 回、7 月に 8 回、令和 5 年 3 月に 52 回、4 月に 24 回、5 月に 31 回、6 月に 1 回、7 月に 4 回、対象事業実施区域を含め広範囲に飛翔が確認された。</p> <p>令和 4 年の繁殖は確認されなかったが、令和 5 年は対象事業実施区域外の 1 箇所繁殖途中失敗を確認した。</p>
				<p>【造成等の工事による一時的な影響】</p> <p>【建設機械の稼働に伴う影響】</p> <p>本種は、岩手県では北上高地と奥羽山脈の平野部から低山帯にかけて広く分布し、ほぼ全域的に確認されていることが知られている。周辺に農耕地、草地、牧草地などの開けた場所がある谷沿いの林がある地域が好まれる。冬季には、平地や北方から温暖な地方へ漂行する。</p> <p>対象事業実施区域を中心に多く確認され、令和 5 年に営巣地が確認されたが、繁殖は途中失敗であった。繁殖失敗の巣(古巣)は、対象事業実施区域の改変区域から 300m 離れているが、今後営巣地が改変区域に近づく可能性もあることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響はありと予測される。</p>
				<p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】</p> <p>本種は、岩手県では北上高地と奥羽山脈の平野部から低山帯にかけて広く分布し、ほぼ全域的に確認されていることが知られている。周辺に農耕地、草地、牧草地などの開けた場所がある谷沿いの林がある地域が好まれる。冬季には、平地や北方から温暖な地方へ漂行する。</p> <p>対象事業実施区域を中心に多く確認され、令和 5 年に営巣地が確認されたが、繁殖は途中失敗であった。繁殖失敗の巣(古巣)は、対象事業実施区域の改変区域から 300m 離れているが、今後営巣地が改変区域に近づく可能性もあることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響はありと予測される。</p>

表 6.7-27(10) 重要な種の予測結果(10)

分類	種名	対象事業実施区域		予測結果
		内	外	
鳥類	重要種 16 フクロウ	○	○	<p>【確認状況】 早春季調査時に対象事業実施区域外で鳴き声 4 例、秋季調査時に対象事業実施区域内の改変区域内上空を飛翔する 1 個体、冬季調査時に対象事業実施区域外で鳴き声 1 例が確認された。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、平地～丘陵地の大径木のある里山や社寺林等に生息する留鳥であり夜間に活動することが知られている。 対象事業実施区域の改変区域内で秋季に飛翔が 1 回確認されたが、繁殖期の鳴き声 5 回は、全て対象事業実施区域外であった。さらに、対象事業実施区域内で本種が繁殖に利用する樹洞の空いた大径木は確認されておらず、工事は本種の活動時間帯と重ならないことから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響は、小さいことが予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、平地～丘陵地の大径木のある里山や社寺林等に生息する留鳥であり夜間に活動することが知られている。 対象事業実施区域の改変区域内で秋季に飛翔が 1 回確認されたが、繁殖期の鳴き声 5 回は、全て対象事業実施区域外であった。また、対象事業実施区域内では本種が繁殖に利用する樹洞の空いた大径木は確認されていないことから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響は、小さいことが予測される。</p>
	重要種 17 カワセミ	○	○	<p>【確認状況】 春季調査時に対象事業実施区域外で 1 個体、初夏調査時に対象事業実施区域外の上空を飛翔する 1 個体と他 1 個体、夏季調査時に対象事業実施区域内の非改変区域内上空を飛翔する 1 個体、秋季調査時に対象事業実施区域外で 1 個体、対象事業実施区域内の非改変区域内で 1 個体が確認された。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、本州以南では留鳥。採餌に適した小魚の多い浅瀬、営巣場所となる水辺の土手や崖、適度の河畔林がみられる環境に生息する。 対象事業実施区域内に営巣環境が存在する可能性は低く、採餌環境は対象事業実施区域外に多くのため池があることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響は、小さいことが予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、本州以南では留鳥。採餌に適した小魚の多い浅瀬、営巣場所となる水辺の土手や崖、適度の河畔林がみられる環境に生息する。 対象事業実施区域内に営巣環境が存在する可能性は低く、採餌環境は対象事業実施区域外に多くのため池があることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響は、小さいことが予測される。</p>

表 6.7-27(11) 重要な種の予測結果(11)

分類	種名	対象事業 実施区域		予測結果
		内	外	
鳥類	重要種 18 ハヤブサ	○	○	<p>【確認状況】 一般鳥類調査では確認されなかった。 猛禽類調査では、令和4年4月に1回、5月に1回、令和5年3月に1回、4月に2回、5月に1回、対象事業実施区域を含め広範囲に飛翔が確認された。 本種の繁殖は確認されなかった。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、主に海岸の崖で繁殖し、内陸の川沿いの崖でも少数が繁殖することが知られている。 対象事業実施区域外の北東の遠方への餌運びが1回確認されたが、全体の確認回数は少なく、対象事業実施区域内には繁殖環境が存在しないことから、対象事業実施区域内で繁殖している可能性は低く、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響はないことが予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、主に海岸の崖で繁殖し、内陸の川沿いの崖でも少数が繁殖することが知られている。 対象事業実施区域外の北東の遠方への餌運びが1回確認されたが、全体の確認回数は少なく、対象事業実施区域内には繁殖環境が存在しないことから、対象事業実施区域内で繁殖している可能性は低く、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響はないことが予測される。</p>
	重要種 19 サンショウクイ	○	○	<p>【確認状況】 春季調査時に対象事業実施区域外で1個体、初夏調査時に対象事業実施区域外で1個体、対象事業実施区域内の改変区域内上空を飛翔する1個体、夏季調査時に対象事業実施区域外上空を飛翔する1個体と他1個体が確認された。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、低山地からブナ帯下部の茂った落葉広葉樹林に生息する。 対象事業実施区域内では1回のみ確認であり、対象事業実施区域外には生息環境が広く存在することから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響は、小さいことが予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、低山地からブナ帯下部の茂った落葉広葉樹林に生息する。 対象事業実施区域内では1回のみ確認であり、対象事業実施区域外には生息環境が広く存在することから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響は、小さいことが予測される。</p>

表 6. 7-27(12) 重要な種の予測結果(12)

分類	種名	対象事業 実施区域		予測結果
		内	外	
鳥類	重要種 20 サンコウチヨ ウ	○		<p>【確認状況】</p> <p>初夏調査時に対象事業実施区域内の改変区域内で 2 個体が確認された。</p>
				<p>【造成等の工事による一時的な影響】</p> <p>【建設機械の稼働に伴う影響】</p> <p>本種は、夏鳥として渡来し本州以南で繁殖する。針広混交林の薄暗い林を好むことが知られている。</p> <p>対象事業実施区域内には、生息地の針広混交林が分布するが、同様の環境は周辺一帯に広く分布すること、環境配慮事項としてまとまった非改変区域を設定することから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響は、小さいことが予測される。</p>
				<p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】</p> <p>本種は、夏鳥として渡来し本州以南で繁殖する。針広混交林の薄暗い林を好むことが知られている。</p> <p>対象事業実施区域内には、生息地の針広混交林が分布するが、同様の環境は周辺一帯に広く分布すること、環境配慮事項としてまとまった非改変区域を設定することから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響は、小さいことが予測される。</p>
両生類	重要種 21 トウホクサン ショウウオ	○	○	<p>【確認状況】</p> <p>早春季調査時に対象事業実施区域外で卵のう 96 対、対象事業実施区域内の非改変区域内で卵のう 9 対、死骸 1 個体、改変区域内で成体 1 個体、卵のう 18 対が確認された。</p>
				<p>【造成等の工事による一時的な影響】</p> <p>【建設機械の稼働に伴う影響】</p> <p>本種は、山麓の平地から標高 数 100m の山地の林床部、沢沿いや湿地帯等全域に広く分布している。成体は山地の林床部の落葉や石の下などで生息し、ミミズや節足動物を捕食している。産卵は細い溪流のよどみ、湧水の流入している浅いため池や沼、湿地の池塘、側溝、山地の水溜りなどで行われる。</p> <p>対象事業実施区域外では、多くの卵のうが確認され、生息環境は広く分布しているが、対象事業実施区域内では、多くの産卵場を含む生息環境が改変されることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響はあることが予測され、保全対策が必要と考えられる。</p>
				<p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】</p> <p>本種は、山麓の平地から標高 数 100m の山地の林床部、沢沿いや湿地帯等全域に広く分布している。成体は山地の林床部の落葉や石の下などで生息し、ミミズや節足動物を捕食している。産卵は細い溪流のよどみ、湧水の流入している浅いため池や沼、湿地の池塘、側溝、山地の水溜りなどで行われる。</p> <p>対象事業実施区域外では、多くの卵のうが確認され、生息環境は広く分布しているが、対象事業実施区域内では、多くの産卵場を含む生息環境が改変されることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響は大きいことが予測され、保全対策が必要と考えられる。</p>

表 6.7-27(13) 重要な種の予測結果(13)

分類	種名	対象事業実施区域		予測結果
		内	外	
両生類	重要種 22 クロサンショウウオ	○	○	<p>【確認状況】 早春季調査時に対象事業実施区域外で卵のう約 390 対、対象事業実施区域内の非改変区域内で卵のう 9 対、改変区域内で卵のう約 140 対、春季調査時に対象事業実施区域内の改変区域内で卵のう 1 対が確認された。</p>
				<p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、西部の奥羽山脈沿いに平地から高山帯(八幡平, 真昼岳で確認)まで分布する。産卵は池や沼、沢のよどみなどの止水域に群をなして行われる。 対象事業実施区域外では、多くの卵のうが確認され、生息環境は広く分布しているが、対象事業実施区域内では、多くの産卵場を含む生息環境が改変されることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響はあることが予測され、保全対策が必要と考えられる。</p>
				<p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、西部の奥羽山脈沿いに平地から高山帯(八幡平, 真昼岳で確認)まで分布する。産卵は池や沼、沢のよどみなどの止水域に群をなして行われる。 対象事業実施区域外では、多くの卵のうが確認され、生息環境は広く分布しているが、対象事業実施区域内では、多くの産卵場を含む生息環境が改変されることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響は大きいことが予測され、保全対策が必要と考えられる。</p>

表 6.7-27(14) 重要な種の予測結果(14)

分類	種名	対象事業実施区域		予測結果
		内	外	
両生類	(重要種 21, 22) サンショウウオ属	○	○	<p>【確認状況】 本種は、トウホクサンショウウオまたはクロサンショウウオに該当するものと考えられる。 春季調査時に対象事業実施区域外で 21 個体、対象事業実施区域内の非改変区域内で 20 個体、改変区域内で 60 個体、初夏調査時に対象事業実施区域外で 19 個体、対象事業実施区域内の改変区域内で 7 個体、夏季調査時に対象事業実施区域外で 1 個体、対象事業実施区域内の改変区域内で 6 個体が確認された。確認状況は全て幼生であった。</p>
				<p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 トウホクサンショウウオは、山麓の平地から標高 数 100m の山地の林床部、沢沿いや湿地帯等全域に広く分布している。成体は山地の林床部の落葉や石の下などで生息し、ミミズや節足動物を捕食している。産卵は細い溪流のよどみ、湧水の流入している浅いため池や沼、湿地の池塘、側溝、山地の水溜りなどで行われる。 クロサンショウウオは、西部の奥羽山脈沿いに平地から高山帯(八幡平, 真昼岳で確認)まで分布する。産卵は池や沼、沢のよどみなどの止水域に群をなして行われる。 対象事業実施区域外では、多くの卵のうが確認され、生息環境は広く分布しているが、対象事業実施区域内では、多くの産卵場を含む生息環境が改変されることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響はあることが予測され、保全対策が必要と考えられる。</p>
				<p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 トウホクサンショウウオは、山麓の平地から標高 数 100m の山地の林床部、沢沿いや湿地帯等全域に広く分布している。成体は山地の林床部の落葉や石の下などで生息し、ミミズや節足動物を捕食している。産卵は細い溪流のよどみ、湧水の流入している浅いため池や沼、湿地の池塘、側溝、山地の水溜りなどで行われる。 クロサンショウウオは、西部の奥羽山脈沿いに平地から高山帯(八幡平, 真昼岳で確認)まで分布する。産卵は池や沼、沢のよどみなどの止水域に群をなして行われる。 対象事業実施区域外では、多くの卵のうが確認され、生息環境は広く分布しているが、対象事業実施区域内では、多くの産卵場を含む生息環境が改変されることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響は大きいことが予測され、保全対策が必要と考えられる。</p>

表 6.7-27(15) 重要な種の予測結果(15)

分類	種名	対象事業実施区域		予測結果
		内	外	
両生類	重要種 23 アカハライモリ		○	<p>【確認状況】 春季調査時に対象事業実施区域外で成体 6 個体、夏季調査時に対象事業実施区域外で 1 個体が確認された。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、本州及び四国、九州地方の低地から山地に分布し、水田、池、溪流、溝などで生活する。 確認地点は、全て対象事業実施区域外であることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響はないことが予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、本州及び四国、九州地方の低地から山地に分布し、水田、池、溪流、溝などで生活する。 確認地点は、全て対象事業実施区域外であることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響はないことが予測される。</p>
	重要種 24 ニホンアカガエル	○	○	<p>【確認状況】 早春季調査時に対象事業実施区域外で成体 1 個体、幼生約 3,800 個体、卵塊 4、対象事業実施区域内の非改変区域内で成体 2 個体、改変区域内で卵塊 1、春季調査時に対象事業実施区域外で成体 1 個体、幼体 1 個体、対象事業実施区域内の非改変区域内で成体 3 個体、初夏調査時に対象事業実施区域外で成体 13 個体、夏季調査時に対象事業実施区域外で成体 16 個体、幼体 1 個体、対象事業実施区域内の改変区域内で成体 1 個体、幼体 1 個体、秋季調査時に対象事業実施区域外で成体 9 個体、対象事業実施区域内の非改変区域内で成体 2 個体が確認された。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、主に平地や丘陵地の水田や湿地に生息し、早春に水田や湿地の水溜りに産卵する。 対象事業実施区域の改変区域内の生息環境は改変されるものの、本種の本来の生息環境は対策事業実施区域外であり、広範囲に生息することが予測されることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響は、小さいものと予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、主に平地や丘陵地の水田や湿地に生息し、早春に水田や湿地の水溜りに産卵する。 対象事業実施区域の改変区域内の生息環境は改変されるものの、本種の本来の生息環境は対策事業実施区域外であり、広範囲に生息することが予測されることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響は、小さいものと予測される。</p>

表 6.7-27(16) 重要な種の予測結果(16)

分類	種名	対象事業 実施区域		予測結果
		内	外	
両生類	重要種 25 トウキョウダ ルマガエル	○	○	<p>【確認状況】</p> <p>春季調査時に対象事業実施区域外で成体 9 個体、鳴き声 1 個体、初夏調査時に対象事業実施区域外で成体 10 個体、幼体 20 個体、鳴き声 4 個体、夏季調査時に対象事業実施区域外で成体 1 個体、幼体 18 個体、秋季調査時に対象事業実施区域外で成体 4 個体、鳴き声 1 個体、対象事業実施区域内の改変区域内で鳴き声 1 個体が確認された。</p>
				<p>【造成等の工事による一時的な影響】</p> <p>【建設機械の稼働に伴う影響】</p> <p>本種は、標高の低い水田地帯を中心に分布する。 対象事業実施区域内で秋季に鳴き声で確認されているものの、その他は全て対象事業実施区域外で確認されている。本種の本来の生息環境は、対象事業実施区域外であり、広範囲に生息することが予測されることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響は、小さいものと予測される。</p>
				<p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】</p> <p>本種は、標高の低い水田地帯を中心に分布する。 対象事業実施区域内で秋季に鳴き声で確認されているものの、その他は全て対象事業実施区域外で確認されている。本種の本来の生息環境は、対象事業実施区域外であり、広範囲に生息することが予測されることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響は、小さいものと予測される。</p>
昆虫類	重要種 26 モートンイト トンボ		○	<p>【確認状況】</p> <p>春季調査時に対象事業実施区域外で 5 個体、初夏調査時に対象事業実施区域外で 7 個体が確認された。</p>
				<p>【造成等の工事による一時的な影響】</p> <p>【建設機械の稼働に伴う影響】</p> <p>本種は、平地から丘陵地にかけての湿地、水田など、水深が浅く湿性植物の繁茂した環境に発生する。 確認地点は、全て対象事業実施区域外であることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響はないことが予測される。</p>
				<p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】</p> <p>本種は、平地から丘陵地にかけての湿地、水田など、水深が浅く湿性植物の繁茂した環境に発生する。 確認地点は、全て対象事業実施区域外であることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響はないことが予測される。</p>

表 6.7-27(17) 重要な種の予測結果(17)

分類	種名	対象事業実施区域		予測結果
		内	外	
昆虫類	重要種 27 サラサヤンマ	○	○	<p>【確認状況】 春季調査時に対象事業実施区域外で 3 個体、対象事業実施区域内の改変区域内で 1 個体が確認された。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、平地から丘陵地にかけての樹林に囲まれた湿地などに生息する。 対象事業実施区域内の生息環境のうち、生息が確認された改変区域内の環境は消失するが、東側の対象事業実施区域外には生息環境が残り、特に確認地点南側の非改変区域には連続した生息環境が残り、生息することが予測されることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響は、小さいものと予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、平地から丘陵地にかけての樹林に囲まれた湿地などに生息する。 対象事業実施区域内の生息環境のうち、生息が確認された改変区域内の環境は消失するが、東側の対象事業実施区域外には生息環境が残り、特に確認地点南側の非改変区域には連続した生息環境が残り、生息することが予測されることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響は、小さいものと予測される。</p>
	重要種 28 ヤマサナエ	○	○	<p>【確認状況】 春季調査時に対象事業実施区域外で 3 個体、対象事業実施区域内の非改変区域内で 2 個体、初夏調査時に対象事業実施区域外で 1 個体が確認された。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、丘陵地から山地にかけての樹林に囲まれた河川の上・中流域や水路などに生息する。 対象事業実施区域内で 2 個体が確認されたが、非改変区域内であり、本種の本来の生息環境は、東側の対象事業実施区域外であるため、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響は、小さいものと予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、丘陵地から山地にかけての樹林に囲まれた河川の上・中流域や水路などに生息する。 対象事業実施区域内で 2 個体が確認されたが、非改変区域内であり、本種の本来の生息環境は、東側の対象事業実施区域外であるため、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響は、小さいものと予測される。</p>

表 6.7-27(18) 重要な種の予測結果(18)

分類	種名	対象事業 実施区域		予測結果
		内	外	
昆虫類	重要種 29 コオイムシ		○	<p>【確認状況】 春季調査時に対象事業実施区域外で1個体が確認された。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、水深の浅い開放的な止水域に生息する。 確認地点は、対象事業実施区域外であることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響はないことが予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、水深の浅い開放的な止水域に生息する。 確認地点は、対象事業実施区域外であることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響はないことが予測される。</p>
	重要種 30 ギンイチモン ジセセリ	○	○	<p>【確認状況】 春季調査時に対象事業実施区域外で10個体、対象事業実施区域内の改変区域内で10個体が確認された。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、ススキなどのイネ科植物が生えている山地の草原、丘陵地、河原などの日当たりの良い場所に生息する。 対象事業実施区域の改変区域内及び対象事業実施区域外でも確認され、生息環境は対象事業実施区域外にも存在するが、対象事業実施区域内の生息環境が改変されることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響はあることが予測され、保全対策が必要と考えられる。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、ススキなどのイネ科植物が生えている山地の草原、丘陵地、河原などの日当たりの良い場所に生息する。 対象事業実施区域の改変区域内及び対象事業実施区域外でも確認され、生息環境は対象事業実施区域外にも存在するが、対象事業実施区域内の生息環境が改変されることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響はあることが予測され、保全対策が必要と考えられる。</p>
	重要種 31 ミヤマチャバ ネセセリ	○		<p>【確認状況】 春季調査時に対象事業実施区域内の改変区域内で1個体が確認された。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、ススキなどのイネ科植物の生えた小規模の草地や林縁の明るい草地などに生息する。 対象事業実施区域内の改変区域内で1個体のみが確認された。 生息環境は対象事業実施区域外にも存在するが、対象事業実施区域内の生息環境が改変されることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響はあることが予測され、保全対策が必要と考えられる。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、ススキなどのイネ科植物の生えた小規模の草地や林縁の明るい草地などに生息する。 対象事業実施区域内の改変区域内で1個体のみが確認された。 生息環境は対象事業実施区域外にも存在するが、対象事業実施区域内の生息環境が改変されることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響はあることが予測され、保全対策が必要と考えられる。</p>

表 6. 7-27(19) 重要な種の予測結果(19)

分類	種名	対象事業 実施区域		予測結果
		内	外	
昆虫類	重要種 32 スジグロチャ バネセセリ北 海道・本州・九 州亜種		○	<p>【確認状況】 初夏調査時に対象事業実施区域外で 11 個体が確認された。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、草原に樹林が混在する疎林や林縁部に生息する。 確認地点は、対象事業実施区域外であることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響はないことが予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、草原に樹林が混在する疎林や林縁部に生息する。 確認地点は、対象事業実施区域外であることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響はないことが予測される。</p>
	重要種 33 ウラギンスジ ヒョウモン		○	<p>【確認状況】 初夏調査時に対象事業実施区域外で 7 個体、夏季調査時に対象事業実施区域外で 1 個体が確認された。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、採草地、農地周辺、河川堤防、疎林などの草原に生息する。 確認地点は、全て対象事業実施区域外であることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響はないことが予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、採草地、農地周辺、河川堤防、疎林などの草原に生息する。 確認地点は、全て対象事業実施区域外であることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響はないことが予測される。</p>
	重要種 34 オオムラサキ	○	○	<p>【確認状況】 春季調査時に対象事業実施区域内の非改変区域内で 1 個体、秋季調査時に対象事業実施区域外で幼虫 1 個体が確認された。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、クヌギ、コナラ、エノキなどが生息する雑木林に生息する。成虫は樹液を吸い、幼虫はエノキの葉を摂食する。 確認地点は、2 箇所とも非改変区域内であることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響はないものと予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、クヌギ、コナラ、エノキなどが生息する雑木林に生息する。成虫は樹液を吸い、幼虫はエノキの葉を摂食する。 確認地点は、2 箇所とも非改変区域内であることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響はないものと予測される。</p>

表 6. 7-27 (20) 重要な種の予測結果 (20)

分類	種名	対象事業 実施区域		予測結果
		内	外	
昆虫類	重要種 35 チビアオゴミ ムシ	○		<p>【確認状況】 初夏調査時に対象事業実施区域内の非改変区域内で2個体、秋季調査時に対象事業実施区域内の非改変区域内で9個体が確認された。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、大きな湖沼の周辺や河川敷のヨシ原や湿地に見られ、氾濫時に水没するような湿地性草地環境に生息する。 確認地点は、2箇所とも非改変区域内であることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響はないものと予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、大きな湖沼の周辺や河川敷のヨシ原や湿地に見られ、氾濫時に水没するような湿地性草地環境に生息する。 確認地点は、2箇所とも非改変区域内であることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響はないものと予測される。</p>
	重要種 36 コガムシ	○		<p>【確認状況】 春季調査時に対象事業実施区域外で2個体が確認された。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、平野部の水田や河川敷の水溜まりなどの止水域に生息する。 確認地点は、対象事業実施区域外であることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響はないことが予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、平野部の水田や河川敷の水溜まりなどの止水域に生息する。 確認地点は、対象事業実施区域外であることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響はないことが予測される。</p>
	重要種 37 ゲンジボタル	○		<p>【確認状況】 初夏調査時に対象事業実施区域外で4個体が確認された。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種の幼虫は水質の良い河川に生息し、カワニナを食べて生活している。 確認地点は、対象事業実施区域外であることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響はないことが予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種の幼虫は水質の良い河川に生息し、カワニナを食べて生活している。 確認地点は、対象事業実施区域外であることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響はないことが予測される。</p>

表 6. 7-27 (21) 重要な種の予測結果 (21)

分類	種名	対象事業 実施区域		予測結果
		内	外	
昆虫類	重要種 38 キンイロネク イハムシ		○	<p>【確認状況】 夏季調査時に対象事業実施区域外で 10 個体が確認された。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、平地のミクリヤスゲ類の生育する湿地に生息する。 確認地点は、対象事業実施区域外であることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響はないことが予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、平地のミクリヤスゲ類の生育する湿地に生息する。 確認地点は、対象事業実施区域外であることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響はないことが予測される。</p>
	重要種 39 モンスズメバ チ		○	<p>【確認状況】 春季調査時に対象事業実施区域内の改変区域内で 1 個体が確認された。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、樹洞、天井裏、壁間、戸袋など閉鎖的な場所に営巣する。 対象事業実施区域の改変区域内で 1 個体のみが確認されたが、改変区域内に営巣環境が存在している可能性は低く、対象事業実施区域外に広く分布し生息していると予測されることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響は、小さいものと予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、樹洞、天井裏、壁間、戸袋など閉鎖的な場所に営巣する。 対象事業実施区域の改変区域内で 1 個体のみが確認されたが、改変区域内に営巣環境が存在している可能性は低く、対象事業実施区域外に広く分布し生息していると予測されることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響は、小さいものと予測される。</p>
	重要種 40 クロマルハナ バチ			○

表 6. 7-27 (22) 重要な種の予測結果 (22)

分類	種名	対象事業実施区域		予測結果
		内	外	
魚類	重要種 41 ドジョウ	○	○	<p>【確認状況】</p> <p>春季調査時に対象事業実施区域外で 27 個体、対象事業実施区域内の非改変区域内で 13 個体、秋季調査時に対象事業実施区域外で 19 個体、対象事業実施区域内の非改変区域内で 14 個体が確認された。</p>
				<p>【造成等の工事による一時的な影響】</p> <p>【建設機械の稼働に伴う影響】</p> <p>本種は、河川の中流域から下流域にかけて、またこれにつながる用水路、水田、湿地などに生息する。</p> <p>確認地点は、対象事業実施区域内外であるが、いずれも非改変区域内であることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響はないことが予測される。</p>
				<p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】</p> <p>本種は、河川の中流域から下流域にかけて、またこれにつながる用水路、水田、湿地などに生息する。</p> <p>確認地点は、対象事業実施区域内外であるが、いずれも非改変区域内であることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響はないことが予測される。</p>
底生動物	重要種 42 マルタニシ	○	○	<p>【確認状況】</p> <p>春季調査時に対象事業実施区域外で 5 個体、対象事業実施区域内の非改変区域内で 5 個体、秋季調査時に対象事業実施区域外で 5 個体、対象事業実施区域内の非改変区域内で 10 個体が確認された。</p>
				<p>【造成等の工事による一時的な影響】</p> <p>【建設機械の稼働に伴う影響】</p> <p>本種は、比較的海に近い平野部の水田、池沼、潟、用水路などに多く生息する。</p> <p>確認地点は、対象事業実施区域内外であるが、いずれも非改変区域内であることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響はないことが予測される。</p>
				<p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】</p> <p>本種は、比較的海に近い平野部の水田、池沼、潟、用水路などに多く生息する。</p> <p>確認地点は、対象事業実施区域内外であるが、いずれも非改変区域内であることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響はないことが予測される。</p>
	重要種 43 オオタニシ		○	<p>【確認状況】</p> <p>春季調査時に対象事業実施区域外で 1 個体が確認された。</p>
				<p>【造成等の工事による一時的な影響】</p> <p>【建設機械の稼働に伴う影響】</p> <p>本種は、流れの穏やかな河川や用水路、ため池や湖などの水量と水質の安定した（僅かに湧水のある）場所に生息する。</p> <p>確認地点は、対象事業実施区域外であることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響はないことが予測される。</p>
				<p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】</p> <p>本種は、流れの穏やかな河川や用水路、ため池や湖などの水量と水質の安定した（僅かに湧水のある）場所に生息する。</p> <p>確認地点は、対象事業実施区域外であることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響はないことが予測される。</p>

表 6. 7-27 (23) 重要な種の予測結果 (23)

分類	種名	対象事業 実施区域		予測結果
		内	外	
底 生 動 物	重要種 44 モノアラガイ		○	<p>【確認状況】 春季調査時に対象事業実施区域外で 2 個体が確認された。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、小川、川の淀み、池沼、水田などの水草や礫に付着し生息している。 確認地点は、対象事業実施区域外であることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響はないことが予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、小川、川の淀み、池沼、水田などの水草や礫に付着し生息している。 確認地点は、対象事業実施区域外であることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響はないことが予測される。</p>
	重要種 45 マメシジミ属		○	<p>【確認状況】 春季調査時に対象事業実施区域内の非変更区域内で 1 個体、秋季調査時に対象事業実施区域内の非変更区域内で 1 個体が確認された。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、砂礫質あるいは砂泥質で、有機物が堆積した場所に生息している。 確認地点は、対象事業実施区域内であるが、非変更区域内であることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響はないことが予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、砂礫質あるいは砂泥質で、有機物が堆積した場所に生息している。 確認地点は、対象事業実施区域内であるが、非変更区域内であることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響はないことが予測される。</p>
	重要種 46 アオヤンマ			○

表 6. 7-27 (24) 重要な種の予測結果 (24)

分類	種名	対象事業実施区域		予測結果
		内	外	
底生動物	(重要種 28) ヤマサナエ	○	○	<p>【確認状況】 秋季調査時に対象事業実施区域外で 1 個体、対象事業実施区域内の非改変区域内で 2 個体が確認された。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、丘陵地から山地にかけての樹林に囲まれた河川の上・中流域や水路などに生息する。 確認地点は、対象事業実施区域内外であるが、いずれも非改変区域内であることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響はないことが予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、丘陵地から山地にかけての樹林に囲まれた河川の上・中流域や水路などに生息する。 確認地点は、対象事業実施区域内外であるが、いずれも非改変区域内であることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響はないことが予測される。</p>
	重要種 47 オジロサナエ	○	○	<p>【確認状況】 春季調査時に対象事業実施区域外で 2 個体、対象事業実施区域内の非改変区域内で 2 個体、秋季調査時に対象事業実施区域外で 1 個体、対象事業実施区域内の非改変区域内で 1 個体が確認された。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、丘陵地から山地にかけての樹林に囲まれた河川に生息する。 確認地点は、対象事業実施区域内外であるが、いずれも非改変区域内であることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響はないことが予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、丘陵地から山地にかけての樹林に囲まれた河川に生息する。 確認地点は、対象事業実施区域内外であるが、いずれも非改変区域内であることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響はないことが予測される。</p>
	(重要種 29) コオイムシ	○	○	<p>【確認状況】 秋季調査時に対象事業実施区域外で 3 個体、対象事業実施区域内の非改変区域内で 1 個体が確認された。</p> <p>【造成等の工事による一時的な影響】 【建設機械の稼働に伴う影響】 本種は、水深の浅い開放的な止水域に生息する。 確認地点は、対象事業実施区域内外であるが、いずれも非改変区域内であることから、本種への造成等の工事による一時的な影響及び建設機械の稼働に伴う影響はないことが予測される。</p> <p>【事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響】 本種は、水深の浅い開放的な止水域に生息する。 確認地点は、対象事業実施区域内外であるが、いずれも非改変区域内であることから、本種への事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響はないことが予測される。</p>
改変区域内外の確認種数		31	41	—

(2) 評価

① 環境影響の回避・低減に係る評価

予測の結果、事業が影響を及ぼす可能性のある種として、サシバ、ノスリ、トウホクサンショウウオ、クロサンショウウオが挙げられた。

サシバ、ノスリは、各年の営巣の状況によって繁殖に影響が生じる可能性もあるため、工事前年度よりモニタリング調査を実施し、その結果を踏まえて、影響を低減させる環境保全措置を講じる。

トウホクサンショウウオ、クロサンショウウオについては、代償措置として改変区域内の卵のうの移殖を行う。

ギンイチモンジセセリ、ミヤマチャバネセセリについては、代償措置として改変区域内の個体の移設を行う。

また、その他にも事業者として実行可能な範囲内でできる限り環境への影響を回避・低減する環境配慮事項として、低騒音型の建設機械の使用や、濁水対策や環境保全区域（残置）の設置を行う。

これにより、事業の実施による影響が予測される種については、造成等の工事による一時的な影響、建設機械の稼働及び事業の立地及び土地又は工作物の存在に伴う影響は低減される。

以上のことから、動物への影響については、実行可能な範囲内でできる限り回避・低減されているものと評価する。

表 6.7-28(1) 環境保全措置

実施主体	一関地区広域行政組合	
保全対象	サシバ、ノスリ	
環境 保全 措置	区分	低減
	実施方法	事前モニタリング調査の実施
	実施内容	工事の前年度及び工事年に周辺地域の猛禽類の繁殖状況を確認し、工事年における繁殖の影響があると判断される場合には、工事を一旦休止する等の対策を講じるなど、専門家の助言をもとに適切な対策を検討、実施する。
	効果	営巣・繁殖環境の維持・保全が見込まれる
	効果の不確実性	工事期間中に繁殖阻害のおそれがある
環境保全措置後の環境状況の変化	環境状況の変化はない	
他の環境への影響	なし	

表 6.7-28(2) 環境保全措置

実施主体	一関地区広域行政組合		
保全対象	トウホクサンショウウオ クロサンショウウオ	ギンイチモンジセセリ ミヤマチャバネセセリ	
環境 保全 措置	区分	代償	代償
	実施方法	卵のうの移殖	個体の移設
	実施内容	工事前に調査を実施し、改変区域内の卵のうについては移殖を行う。移殖先は対象事業実施区域内に設置する環境保全区域内のため池とする。なお、対象事業実施区域外への移殖については、同じ水系内のため池や湿地を対象に検討を行う。	工事前に調査を実施し、改変区域内でギンイチモンジセセリとミヤマチャバネセセリを確認した場合は、対象事業実施区域内の非改変区域内のススキ草地（イネ科草地）へ移設を行う。
	効果と判断根拠	生息環境が改変される前に保全対象の個体を地形改変のない生息適地に移殖・移設することにより個体の維持・保全が見込まれると判断した	
	効果の不確実性	移殖先・移設先で生息が確保されるか不確実性が残る	
環境保全措置後の環境状況の変化	移殖先・移設先での大きな環境状況の変化はない		
他の環境への影響	移殖先・移設先の動物相に変化が生じ、生息環境を同じくする種との競合が生じるおそれがある		
回避・低減が困難な理由	施設の配置計画において生息を確認した区域の改変が避けられないため		
損われる又は創出される環境要素	動物（両生類）	動物（昆虫類）	
損われる環境の位置及び内容	対象事業実施区域内で産卵場となっている水域が消失する	対象事業実施区域内で生息環境となっているススキ群落が消失する	
創出される環境の位置及び内容	地形改変が行われない区域（環境保全区域）へ移殖・移設するため新たな環境の創出はない		

表 6.7-29 環境配慮事項

番号	対象	環境配慮事項	環境配慮事項の内容	環境配慮事項の区分
①	動物全般	環境保全区域（残置）	対象事業実施区域内には改変を行わない環境保全区域を計画し動物の生息環境を可能な限り保全する。なお、移殖等を行った地点については、草刈り、除伐・間伐、ため池の泥上げ等の定期的な管理を行っていく。	環境影響の回避
②	猛禽類	低騒音型機械の使用	低騒音型の建設機械を使用することで猛禽類への繁殖活動等への影響を低減する。	環境影響の低減
③	水生生物	濁水処理設備の設置	工事実施時には、早期に防災調整池、仮設沈砂池を設置し泥水の土砂を沈降させ、河川への土砂流出を低減する。	環境影響の低減